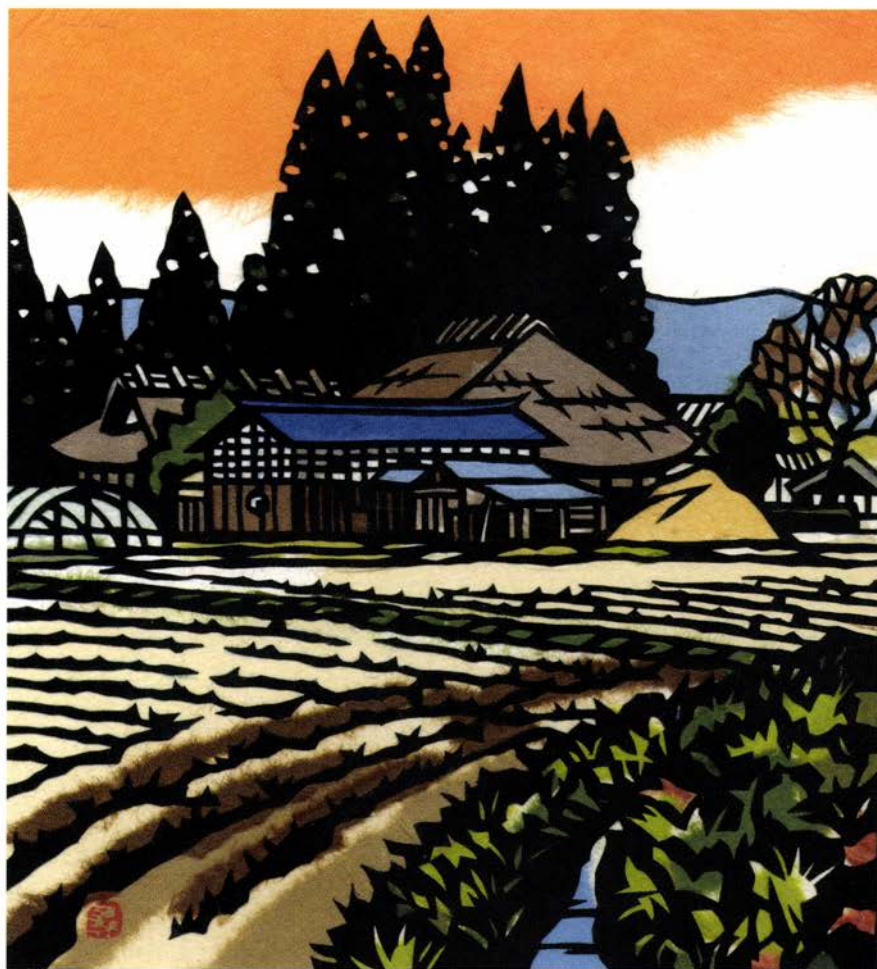


# 川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可  
平成二十四年十月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷一〇二五号



日川協加盟

No. 1025

平成二十四年度六賞発表

十月号

# 第18回 川柳塔まつり

と き 平成24年10月8日(月・祝)

午前11時開場 同人総会 11時から 午後1時開会

と ころ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間(中・西)

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 TEL 06-6772-1441  
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車)

## 《 同人総会・議事 》

平成23年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成24年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

## 《 各賞表彰式・記念句会 》

表 彰 式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「川柳に表れた死生観」 川柳塔社 新家完司 副主幹

兼 題 「 絆 」 愛 媛 黒田茂代 選

「 語 る 」 鳥 取 牧野芳光 選

「 予 定 」 北 海 道 小 沢 淳 選

「 偉 い 」 兵 庫 山 口 光 久 選

「 イメージ 」 大 阪 鶴 田 遠 野 選

事前投句 「 美 」(締め切りました) 川柳塔社 主幹 小 島 蘭 幸 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正 午(午後4時半終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

◎会 費 2,000円(当日いただきます) ※記念品 呈

ご昼食は各自でお済ませください

## 《 懇 親 宴 》

と き 平成24年10月8日(月・祝) 午後5時～7時

と ころ ホテルアウィーナ大阪 3F 葛城の間

☆会 費 7,000円(会席料理) 先着申込 120名様

☆宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

\*事前投句および懇親宴・宿泊のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(御希望の方は事務所)にて9月1日(土)までに本社事務所宛、お送り下さい。

\*懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺大道1丁目14番17号201  
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490  
振 替 00980-4-298479

# 金子みすゞ展

小島 蘭 幸

没後80年—金子みすゞ展—を鑑賞しました。広島のパートで開催されたみすゞ展は満員の大盛況で、ガラスケースに展示されている遺稿、書物、写真、実弟の手紙等は、前の人の肩越しからしか見ることが出来ませんでした。それでも「それぞれのみすゞ」のコーナーはゆつくりと鑑賞することが出来ました。

このコーナーには各界の著名人がそれぞれ自分の一番好きなみすゞの詩を一つ選んで、みすゞへの思いを直筆で素直に書いておられました。みすゞの詩と著名人のコメントを読んでいると、アツという間に一時間が経っていました。ガラスケースの前は相変わらずの人ばかりでした。

童謡詩人・金子みすゞは山口県の仙崎で生まれ四歳の時、下関に移り住んでいます。私は若い頃一度だけ、仙崎、青海島を旅したことがあります。遊覧船から見た美しい風景が今も目に焼きついていま

す。みすゞの感性は幼少時代を過ごした仙崎の山と、海に囲まれた美しい自然の中で、ふんわりふうわりと育くまれたのだと思われます。昨年、震災以後テレビで繰り返し放映された「こだまでせうか」を覚えておられる方も多いと思います。みすゞの詩のリズムはスーッと心に、体に沁み込んでくるのです。優しくて深く美しいリズムは、私達の心の中でいつまでもこだまするのです。

「大漁」という詩の前で私は

みすゞの海で魚の弔いまだ続く

幸子

ある大会の「魚」という課題でいただいた作品を思い出していました。魚を「うお」と詠むか「さかな」と詠むか迷った作品でした。そして中八になるけど「さかな」と詠んで良かったとつくづく思ったことでした。

著名人のコメントの中で英訳金子みすゞ童謡集を出版したD・P・ダッチャーの「みすゞの詩はやさしくて痛い」が光っていました。ここまで書いて私は「私と小島と鈴と」を語っています。

「みんなちがってみんないい」やさしさを貰いたみすゞの心は、私の中でこだまになりました。

座右の句

立話 長うて犬も座り換え

(薫風)

私の句

携帯に今夜のメニュー飛んでくる 辻内 げんえい

## 川柳塔 十月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「秋田・田沢湖町」

### ■巻頭言 金子みすゞ展

時代の風

川柳塔(同人吟)

川柳塔の川柳讃歌 ⑨4

自選集

温故知新

水煙抄

新川柳鑑賞 ⑧

平成二十四年度

路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞  
檸檬抄・一路賞・各地柳壇賞

中島生々庵句抄

俳風柳多留一一篇研究 86

愛染帖

檸檬抄「限界」

英語 de Senryu ⑩

小島 蘭 幸……(1)

小栗 清 吾……(2)

小島 蘭 幸選……(4)

木津川 計……(47)

温故知新……(48)

西出 楓 楽選……(51)

麻生 路 郎……(52)

新川柳鑑賞……(73)

路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞……(74)

檸檬抄・一路賞・各地柳壇賞……(75)

中島生々庵句抄……(83)

俳風柳多留一一篇研究……(84)

愛染帖……(86)

檸檬抄「限界」……(90)

英語 de Senryu……(93)

## 時代の風

小栗 清 吾

いま、BSTBSで毎週月曜日夜十時から、『謎解き！江戸のススめ』という番組を放送しています。江戸のいろいろなこと、たとえば「寺子屋」「参勤交代」「リサイクル」といったテーマ別に、謎を解き明かしていこうという番組なのですが、毎回、司会の市川染五郎さんの「その謎を解く鍵は、江戸の川柳にある」という決め台詞とともに、テーマにふさわしい江戸川柳を紹介する趣向になっています。実は、私がその川柳の資料を提供しているのですが、これが意外に難儀な作業で、七転八倒を繰り返しています。

というのは、この番組はバラエティではありますが、よく調査の行き届いたまじめな番組ですので、江戸川柳もテーマにわかりやすく取り組んだまじめな句を要求されるのです。

しかし、江戸川柳に少しでも親しんだ方にはお分かりでしょうが、なかなかそう



「平 氣」……………小谷集一選……………(94)  
一路集「札 束」……………小川てるみ選……………(95)  
「おっとり」……………関本かつ子選……………(96)

追悼 森井蒼居さんを偲ぶ……………

初歩教室「ぼろぼろ」……………岩本笑子……………(97)

秀句鑑賞「同人吟」……………鈴木公弘……………(98)  
「水煙抄」……………村上玄也……………(100)

民族の詩(5)……………三浦強一……………(102)  
……………三好專平……………(103)

『麻生路郎読本』余滴⑪……………乗原道夫……………(104)

■句集紹介『風の影』黒田能子著……………山本義子……………(108)

せんりゅう飛行船②……………新家完司……………(109)

九月本社句会……………松永浩一……………(114)

本所深川を歩く(九)…………………………(115)

各地柳壇(佳句地十選／坊農柳弘・山岡富美子)……………(130)

十月各地句会案内…………………………(130)

柳界展望…………………………(132)

■編集後記(ひとこと／山口光久)……………朱夏・まつお……………(134)

座右の句

あるがままあるがままにと竹は伸び (みつ子)

私の句

古い日記開けて自分が見えてくる 藤岡りこ

いう句はありません。世の中で起きていること、あるいはその中にいる人間の行動について、皮肉な目で見たり、洒落のめしたり、笑い飛ばしたり、一回半ひねりしたり、ひらりと体をかわしたりして、作った句が多いのです。

おそらくこれは、川柳が「その時代の風」を色濃く反映する文芸だからだと思えます。「粋を尊び、野暮を毛嫌にする」というその時代の中で、物事にまじめに対峙するのは野暮なこととして、そういう川柳が少ないのは当然のことかもしれません。

私は、江戸川柳は少し勉強しています。が、現代の川柳はまったくの門外漢です。しかし、毎月頂戴している『川柳塔』誌を拝見しますと、やはり江戸川柳とは趣を異にする句が多いように思います。

その理由の一つには、江戸時代の風と現代の風の違いがあるのではないかとすれば、現代の川柳作家の方も、たまにはちょっと江戸時代の風に当たってみるのも、新しい発想の源泉になるのではないかなどと、我が田に水を引きながら思っているところです。



小島蘭幸選

和歌山市 牛尾緑良

クーラーを効かせて政治論じるか

八月の空は反省知らぬ青

挽歌まだ八月を満たしてる

蟬時雨まだ本物が聞こえてる

羅漢さまいつから御座しましたのか

杖という仲間が出来て見る朝日

川西市 西内朋月

ポケットを探ると明日の夢がある

勘定のおまけにガムの焼肉屋

胸底に活断層が走る夜

スコッチのロックが旨い熱帯夜

命日の鉦は素直な音がする

敗戦後うちの日の丸消えたまま

大阪市 谷口義

神さまが素通りされた気もするが

何事もよきにはからう人という

A型で魚座不真面目なとこあり

香典の額が決った立話

何もしないのが良いという結論

忍者のように歩いては叱られる

札幌市 三浦強一

昭和史のネガ真つ黒なキノコ雲

命こそ宝白旗上げている

路地裏に昭和があつた縄のれん

再稼働後は野となれとも見える

変り身の早さで生きるカメレオン

コルク栓上手に抜けた乾杯だ

篠山市 酒井真由

稲光包丁研ぎがやって来る

夕立の中火柱が立っている

万物流転筋書き通りにはいかぬ

孫帰省さらに男っぽくなった

骨柄のよさが私を魅了する

バイキング庭園灯とせせらぎと

榎原市 安土理恵

高望みしないわたしに合えばいい

末期の水お酒にかえてあげますね

高い所に立つから落ちることになる

思惑どおりにいかぬ恋だと知っている

めぐり逢いこんな年齢をとつてから

エプロンに隠したはずの汚点が浮く

和歌山市 上田紀子

水飴の壺に隠れていた答

耳立てて吉報待つている兎

ポリシーを抱いて曲げない男意気

平和な世何か足りないものがある

ワンクッション置いて私の色を足す

はんなりと生きてみたくて香を焚く

さいたま市 星野育子

毎日が父の日だった風呂メシ寝る

路地行けば風の道あり城下町

スイカはゴミの日の前日に食べる

捻子ひとつ失くしたようだ物忘れ

話は半分マニフェストは二割

殺人の無いドラマ見てホッとする

枚方市 伊達郁夫

お値段を聞けば値段の味がする

音のない部屋でひとりの箸を置く

ラブコール胸で調律しています

瞑想か居眠りなのか日向ぼこ

好奇心命の芯を太くする

合鍵が今夜もドアを開かない

鳥取市 永原昌鼓

寝不足がもう始まっている五輪

マンガから学び直している歴史

ネジ巻いてラストスパート八十の坂

奥の手を仕舞った場所を見失い

フリーの身待つてましたと役が来る

病む夫やつと寝かせてペンを持つ

鳥取市 森山盛桜

今日の釣り釣らねばならぬ訳がある

取り敢えず使う真摯という言葉

生きるのはこれアバウトと大雑把

皆の前だから腕捲りを見せる

オアシスにしたくて庭の手入れする

実直な男出口へまっしぐら

神戸市 白川淑子

熟れてゆく桃老いるとは斯くのごと

困ったら開ける引き出し二つ三つ

墨染のイケメン禅師ドイツ人

猫の耳つい触りたくなるピンク

こだわりのブレンドコーヒ一人です

書く事は生きること今日も川柳

堺市 桑原道夫

扇風機君のまじめさには負ける  
日向から戻ってきたる縄電車  
言い聞かす猫の両手を握りしめ  
電柱よがんばらなくていいんだよ  
氷の旗がちぎれそうなる海の家  
大縄飛び一瞬間のない世界

和歌山市 木本朱夏

おじさんの肩車から見た花火  
茶断ちした高校生の夏だった  
持ち時間よろよろと来て残暑  
対岸は派手に花火を揚げている  
百均を覗くこの寂しさは何だろう  
オリンピック終つてたむ日章旗

弘前市 高瀬霜石

泣き黒子泣き虫だとは限らない  
下手な字を補う美しい切手  
アイウエオ順でなぞつてゆく名前  
一を聞き十を知る人などいない  
表情は豊かフトコロさみしいが  
臓器移植わたしは汚れすぎている

松江市 石橋芳山

君が代を桐の箆笥に折り畳む  
笑わせてくれる後頭部の窪み  
フォルテシモ続いて俺はまだ行ける

空想の海を回遊する人魚

騙し合い続いて遮断機をくぐる  
回想の踏み込むことのできぬ穴

府中市 藤岡ヒデコ

振り返る過去が平になつている  
日めくりに置いてけぼりにされている  
標高差二百違えば避暑気分  
成りゆきで貰つた金魚飼っている  
長生きをしようね旨いもん食べながら  
幸せを報告できた灯がおどる

奈良市 大久保眞澄

骨惜しみしても叱られなくなつた  
寝転んでセミも熱中症らしい  
私にも流れてたんだイケズの血  
墓参りごめんごめんと言うばかり  
老いたかな居場所を探すクセがつき  
職業欄ちよつと迷つて主婦にマル

奈良市 山本柳昌

そう七〇内弁慶のままなんよ  
身のうちも少しゆるんで古希が来た  
酒少し陽気になつてくる手足  
脛かじる子が居て日日も晴れている  
好きなことできて元気な口でして  
淋しさになれて仏と対座する

倉吉市 牧野芳光

冷房をしても頭は回らない

国境の線は知らない海は海

何はなくても皮靴は光らせる

青春に戻してくれるコーラ飲む

告別式にはしやぎ過ぎないようにする

熱中症狙うかカラス多すぎる

松山市 高橋宏臣

自画像の裏から洩れてくるほむら

花びらの滴は花のいろになり

背伸びしてマリオネットが浮いている

ややあつて小さな声が顔上げる

ピリオドを打った余熱が責めてくる

勾配へ無印の歩は揺がない

富田林市 中井アキ

マスカット闘病記だけ残される

眉少しあげて女の列にいる

ときどきは魔女に頼っている絆

追伸を透かして愛をたしかめる

絵手紙の余白に愛をちりばめる

信じ続けるのはもしか罪ですか

神戸市 山口美穂

脱原発お上へ抗議届かない

敗戦のひもじさで見た飛行雲

産地はわが家ゴーヤチャンプルタの膳

言い訳してさみしくなっている私

蝉はまだ立秋知らず鳴いている

陽が落ちて一瞬秋の風がくる

藤井寺市 鴨谷瑠美子

蝉が鳴くよろしきことと思つて

ピーチパラソル晒されていて夏を越す

金魚すくいの金魚はちよつと自嘲気味

姉さんがいつてしまった花野まで

人がやさしくなったと思う赤トンボ

見ぬ振りはこれを平和とは言えぬ

豊中市 松村里江

飲めないが仲間大好きついて行く

欠けててもまだまだ使う落しぶた

ストレスもとけてバスタブ小宇宙

行間を埋めるやさしい日本語

しつとりと生きるひと日の眉を引く

いつまでも凭れていたい背中です

豊中市 藤井則彦

身も心も洗濯できる一人旅

ケータイもクルマも無くていい余生

悲しみの心が揺れるピアニシモ

猿真似をしながら掴み取るヒント

クラス会甘いピントのいい写真

恙無く妻と張り合う物忘れ



大阪市 井丸昌紀

本当は信用できぬ青信号

人脈は町内会だけが頼り

嘘ひとつ澄ました顔で捨てに行く

ややこしい話になると口を出す

猿回しの猿が一番威張る国

親切な言葉目は笑っていない

寝屋川市

森

茜

まっ新の句集といっしょに移り住む

玄関から入る喜びのシンフォニー

神さまがもうそこまどと言う質素

遠い日の愛をひっそり汲む詩集

ひんやりとエスカレーター地下六階

一面の更地向日葵は虚ろ

松江市

松本文子

怒っているらしい大根芽を出さぬ

メタボと言われ医者とケンカをして帰る

脳も暑くてバテた句が多い

ピンピンコロリ誰も約束してくれぬ

耳の奥いつでも蝉が鳴っている

試されているのか千円落ちている

富田林市

片岡智恵子

夫逝って一緒に庭の鉢も枯れ

仕合わせだった時を止めたい砂時計

喉の渴きは亡夫についた嘘ひとつ

まだ病院へ行けば逢えそう初の盆

硝子拭く今日の自分を立ちあげる

物忘れ弛んだネジを巻き戻す

和泉市

横山捷也

年齢は空欄のままアンケート

天国はどっちドアは右左

言い訳はしないと決めて渡る橋

痛む腰靴べら要らぬ靴をはく

昼寝から妻がよいしょと起きてきた

腕白の面影残す盆の僧

香芝市

大内朝子

すいとんの御蔭を今も生かされる

たまさかの恋の噂の心地よい

どしゃ降りの心に傘の欲しい時

同性のような異性の友の出来

踏まれない所に移す蟬の骸

神さまへ消費期限を問う命

鳥取市

吉田弘子

ご加護かなふいに出てくる探し物

若者に安心もらう物忘れ

二―三ヶ月先の約束自信ない

十三回忌濃い絆が集まった

敏感と鈍感火花よく散らす

こう言えばああ言うだろう黙々とく

東かがわ市 清川玲子

ビタミン剤一つ多目に飲む猛暑  
欲一つからむと視界霞みだす

まろやかになつた梅酒で暑氣払い

頼もしい大樹に見える父の背な

手術後のベッド夫が居てくれる

五輪の風現在ニッポンに吹いて居る

大洲市 中居善信

八歳の記憶は今も八月忌

油蟬だけが鳴いてる友の訃に

ひとり暮らしのそして一人で死んでいた

早世だった弟たちよ盆が来る

生きざまは親父の影を踏んでいる

平和惚け大樹の下の生ビール

高知市 小川てるみ

地球への付けを残しているヒト科

クレームは上様とある領収書

オリンピックのパワーで越えるこの猛暑

なつかしい母の匂いのする仏間

前向きに生きよう母の道しるべ

潮目読む男が抱いている野望

鳥取県 山本正光

老残の余命に旨い酒たばこ

この夏の水道水は湯に化けた

暗算がまだ出来るからくたばらぬ

三猿を演じてきしみだす背骨  
核の世で生きてることが喜劇かも  
輪をつなぐための両手は開けてある

鳥取市 夏目一粹

爪切れば固い分身飛んでゆく

声だけは掛けるが来ないこと祈る

見え見えの嘘に相槌うつ弱さ

残り火にほどの風の風あててゐる

二花も咲かせるなんてやめなさい

いいことの想定外もいつか来る

倉吉市 野口節子

子沢山火の輪くぐりの日も終る

鳩尾に燻りつづく火の匂い

引き潮に踏んばっている影法師

孫達が笑い袋をさげて来る

歯車が合つて迎えたダイヤ婚

ああ余生想定外の山がある

鳥取市 吉田孔美子

百歳の続きに宇宙在るのです

夫逝つてケロリ戦中生きた方

家具の山妻の单身赴任済む

きのう来た子猫を抱いて聞く花火

御見舞に祭花火を横切つて

花火など眼中にない嫁達だ

熊本県 高野宵草

神様がちゃんと見てます奉仕する  
助手席が誉める景色を我慢する  
車庫入れてやれやれ今日も無事でした  
余生とは言えどしんどい老化なり  
怠惰から我が人柄を守らねば

熊本県 岩切康子

約束が守れず足が重くなる  
同伴者決まり旅の夢開く  
検査後の夫の顔色見落せず  
水蓮の一輪鬱を吸ってくれ  
思い出し故郷の冷汁作ってる

唐津市 井上勝視

暮れる陽に大声で言う馬鹿野郎  
天寿などと誰が定めた喜寿傘寿  
嘘涙母親だけに許される  
外に七人家にも一人敵がいる  
値下げして何故か売れない化粧品

唐津市 坂本蜂朗

母と妻に男一匹試される  
母が逝き悲しむゆとりない仏事  
スイッチオン朝の挨拶老い二人  
憂きことの種は尽きない老い二人  
妻の言う線で値引きの使者になる

唐津市 山口高明

望郷の陽炎もえる異人墓地  
八月の海でわたしを見失う  
マナー知らずの電話へむすめ留守と告げ  
飽きもせず厭かれもせんと五十年  
軟膏を貰うだけでも調剤費

唐津市 樋口輝夫

冷え過ぎて解凍できぬ夫婦仲  
鑑定に出したばかりにもめにもめ  
客帰り愚痴がこぼれている屋台  
マニフェスト大風呂敷が破れてる  
川柳の余禄人生丸く生き

札幌市 小沢淳

有り余る時間を影が食べている  
耳袋大きな人の輪に入る  
悠々自適とは言い難し病だれ  
雑草は地球の傷を埋めている  
やつと来てもう帰るのか北の夏

砂川市 大橋政良

この地図の裏に隠してあつた疵  
婆ちゃんの童話をふところに育つ  
マネキンと冬の衣装を語り合う  
ライバルと妥協の風が甘くなる  
ふれ太鼓歩行者天国かき氷

黒石市 相馬 一花

赤ちゃんが揉むとおっぱいよく弾む  
泣くことを忘れたカナリヤ住む現世  
カロリーが不足か鎖骨だけ目立つ  
大根も西瓜もカットして並び  
認知症妻を忘れる本格派

黒石市 佐藤 古拙

転びざまさいわい誰も居なかった  
原点は昭和だ日の丸弁当だ  
他力本願買ってしまったじゃんぼくじ  
まだ辞書にのっていました真空管  
少数派を待ちかまえている蟻地獄

平川市 小寺 花峯

散歩するコースに何故か酒販機が  
ときどきは小さな炎燃えて秋  
白い軍手が笑われている不思議  
十五日孫が忘れずやって来る  
トゲのあるバラで優しい香を放つ

弘前市 富士 慕情

ソーメンで凌ぐ猛暑が長すぎる  
八合目生き返らせた岩清水  
登頂記念小石ひとつを持ち帰る  
百円の玉子疑似餌に見えてくる  
ライバルと競えば深くなる絆

弘前市 今 愁女

新党の名前国民こそばゆい  
図書館は新聞読みで混んでいる  
好みだったコート捨て南無阿弥陀  
青春から漕いだ自転車断捨離に  
送り絵を目で追い秋の風を聞く

弘前市 須郷 井蛙

昼寝して午後のスタート切る老後  
旅三日添乗員も酒の輪に  
観光へ予備学習を詰めて行き  
クラス会参加の顔が決まってる  
農作業昼のビールも許されて

弘前市 稲見 則彦

コスモスに覗かれ開くお弁当  
黙祷で今年も始まるクラス会  
言い訳をしたあの日から無言劇  
幸せも半分こだと笑う皺  
逆立ちを強要される砂時計

弘前市 岡本 花匠

誘われて夢三昧の余生楽  
二人三人集い和みのきずな酒  
自画像の欲が吹つきれ至福貌  
自分史へ埋草走り整える  
逢い添うて六十年の愛と憎

弘前市 高橋 洋子

横浜市 菊地 政勝

便利さに嵌り持ち味失くして

羽根の無い扇風機には馴染めない

久し振りに孫と会ったら変声期

肩身が狭い新幹線の来ない町

もらい泣き何度するやら母看取り

青森県 松山 芳生

急いでも愛のしぐさに無駄がない

冗談のようにチューリップがひらく

その先は不問こころを急がせる

触れないであなたの指紋残すから

ダイヤの箱で肩身のせまいホテル石

東京都 岸野 あやめ

わかるような気のする手紙貰った日

CMへみんなで笑う世よ続け

要るだけは要るんだものと金のこと

くつきりと眉を描いて娘の決意

若い日の希み忘れて老いの日々

横浜市 小野 句多留

銀ブラの露地の昔が覚束ず

酷暑の夕朝顔水の試練受け

居眠りは熟女の肩が好きらしい

二十三回忌次期は何人揃うやら

夜更かしを昼のゴロ寝でカバーする

境界を越えて風鈴聞かされる

無気力なゲーム世界を駆け巡る

気配りに疲労が溜まるかすみ草

お喋りと無口夫婦にある阿吽

譲られた席へブライド苦笑させ

川崎市 三浦 きぬ

眠れぬ夜無理して眠ることもない

あの世への旅立ち航空機に決めよう

自己嫌悪どこを直せば好きになる

あの世への切符売場が見付からず

時と場所耳にふたすることも礼

富山市 島 ひかる

暑中御見舞い忘れてならぬ人に出す

恋文を破ったこともあつた過去

ぞんざいになると来年不作なり

日本海の幸を世界でシェフ勝負

同行二人心ゆたかにひとり旅

可見市 板山 まみ子

反省をしたこと忘れ元のまま

竜巻の警報何をどうしよう

厚切りのステーキ明日はやってやる

ジョギングの期待裏切る缶ビール

後まわし国のやる気は私なみ

大山市 関 本 かつ子

今日だけは煙吸つても待つうなぎ

お互いが我慢強さを上げ夫婦

水筒を持ち歩いてる家の中

絵手紙の返事に絵ハガキで御免

友の霊乗せた夏雲一周忌

大山市 金 子 美千代

かしこい人ばかりしりごみしてしまふ

また怠けさすエアコンの掃除付き

享受する優待老いもまた楽し

ゴミ捨てに行く口紅をちよつと引き

待つ人のいない気軽な外出着

大山市 吉 田 幸 子

ハラハラとドキドキ録画なら安堵

母からの小言は平気聞き流す

復習をしないと稽古続かない

まだツキがあつた抽選豪華版

まだまだと一步一步の秘訣策

愛知県 早 川 遡 行

大雨が川の掃除をしてくれる

年金の遣り繰り老後楽しかり

どうにでもなれと思つたことがある

気が付いた時には遅い胴回り

いい本をたくさん読んでバカになる

京都市 高 島 啓 子

勢いのありすぎる枝切り落とす

金色の折鶴一匹の孤独

産卵に集まる危険かえりみず

銀紙を剥がすとただのおじいさん

義理欠いてもいいよと熱風が吹く

京都市 坪 井 孝 一

自分史の表紙はバラで盛り上げる

今日からは生命線は気にしない

日記にはプラス志向の字が躍る

今日もまた寄り道すると足が言う

サプリメント僕にやさしい母が居た

京都市 榎 本 宏 子

家事育児約束したが午前様

花いっぱい駅長さんの心意気

脱脂粉乳仲良く元気だった子ら

もしももしも考え出して不眠症

奇跡はない汗と努力のアスリート

京都市 西 村 益 子

十七度極楽の風伊吹山

この猛暑お墓参りも二度に分け

御先祖様庭の野菜でおもてなし

孫の声出来る幸せおさんどん

夫留守私にとって暑氣払い

京都市 藤井文代

大阪市 川端一步

取り敢えずの挨拶だけがよく馴染み  
年金の歩幅が決めるやせがまん

おつとりも急がぬ時は二重丸

七光りなくても親は二重丸

丸裸にされても持論曲げません

亀岡市 井上森生

千回も出来ると言えば叶うとか

出来る気になれば呼吸が大らかに

限界に没頭できる句作中

この調子十年日記は後二冊

熱烈五輪今はゆつたり笑みながら

長岡京市 山田葉子

知らなかったわたしに出会うひとり旅

多分たぶん悪女になんかすぐなれる

充たされる予感レモンを丸かじり

円周率不協和音がつきまとう

ペットなのに牙をチラリとのぞかせる

大阪市 古今堂蕉子

阿呆では踊れぬと知る阿波踊り

テレビから今も地震の予報あり

誕生日あの世に少し近くなる

一人宴オリンピックのバレー見て

五輪終る ああねむかった ありがとう

十八史略無学の父に教えられ  
妻の留守テレビグルメで飲むお酒  
赤とんぼ墓参の礼を言うように  
引き分けという友情が生む絆  
石丸く老いて幼児になる如く

大阪市 板東倫子

総理孤立太陽燃える原爆忌

禁酒禁煙男のロマンも消え失せる

熱中症に効くと里から新生姜

オリンピックで知った若者の底力

ほろ酔いで見る天神さんの遠花火

大阪市 神夏磯典子

盆提灯何か楽しくなってくる

御供えは地酒地ビールチョコレート

坊さんはダイナミックに鈴鳴らす

ああ傘寿まだまだ耳は聞こえます

宝石の力を借りている喜劇

大阪市 小谷集一

歯を削る女医の瞳が魔女に見え

深読みをすると迷路に嵌り込む

向日葵と入道雲に気を貰う

触れた手を握りしめたい時がある

不器用に生きてても軸にブレはない



大阪市 榎 本 日 出

何もかも自粛が真夏だけは別  
節電をします絹のパジャマ着て  
ボランティア笑顔届ける仕事あり  
ごほうびを自分に買って楽しむ  
控えめの言葉が好きで出てこない

大阪市 坂 裕 之

商売が好きでまだまだ続けます  
期待した返事引き出す間いをする  
この先が心配だからうるさいの  
弁解を咎めぬ方がなお怖い  
誰からも良く見られたいのが嫌い

大阪市 佐 藤 忠 昭

停年後趣味のライバル皆元氣  
不器用で変化に弱い石頭  
義父に耐え亭主に耐えて子に耐える  
わが女房喋らん時は美しい  
美しい浴衣姿は遠い過去

大阪市 吉 村 一 風

平凡に老いた笑顔を妻誉める  
嫁の意見妻は笑顔でпойと受け  
蝉しぐれ朝の五時ならファイト湧く  
容赦ない雨に泣いてる青テント  
代役をうまくこなして老い達者

大阪市 平 嶋 美智子

明け方の大きな星を亡父と決め  
淡い愛言葉にすれば消えそうで  
いい人に会うそれだけで元気で  
水やれば雑草先にしゃんとする  
氷枕すぐ反乱の熱帯夜

大阪市 近 藤 正

原発を阻止した村が胸を張る  
過疎の村風鈴だけが泣いている  
フクシマを過疎化したのは誰なんだ  
語り部の沖縄差別胸を刺す  
液化化していませんか野田与党

大阪市 伏 見 雅 明

真夜中に本音歯ぎしりして困る  
少しずつ本音削って輪が丸い  
夢でなら本音を喋る平社員  
満月に本音ときどき雲隠れ  
仮面脱ぎ本音が戻る終電車

大阪市 岩 崎 公 誠

泣き言をいうなお前は先ながい  
おんぶに抱っこ人に頼って芯曲がり  
何となく未練を残す手紙焼く  
露天風呂と趣きあるがゴミが浮く  
虫図鑑おやじの顔が並んでる

大阪市 大川 桃花

本当は淋しい母の不愛想

盆踊りのテンポ年々速くなり

脈絡ない話が続くケアハウス

父似だった顔がこの頃母に似る

七日しか無い命にも不慮の事故

大阪市 松尾 柳右子

まんねりの夫婦二人へ息子来る

熱帯夜省エネ出来ぬつらい日々

唄きいて若返りに夢つなぐ

男性が少ない町の盆踊り

打ち上げの花火町会活気づく

大阪市 田浦 實

心に懺が生えないように旅に出る

梅雨の恵み庭に見付けた西芳寺

やさしい笑顔送り合つてる老夫婦

サルスベリの我慢強さに励まされ

四柱推命ずばりと当たり気味悪い

大阪市 津守 なぎさ

今日もまた出足にぶらす猛暑です

たつ巻が日本にもあるこわいこと

オフレコを破り捜査をするいじめ

帰宅後はオリンピックに夢中です

ピーポーで運ばれ札を言えぬまま

大阪市 山崎 君子

胡蝶蘭今年の夏も暑かろう

友来る嬉しさそつと涙する

息一つついて我が身を想いやる

ブーゲンビリヤそよ風吹いて美しく

オリンピック家事おろそかになりがちで

大阪市 津村 志華子

漁火のちらちら旅を深くする

支離滅裂旅のはなしに死の話

温かい情けは明日の糧となる

せつかちの癖が中中なおらない

時折はもう疲れたと長寿箸

大阪市 小泉 ひさ乃

努力積み重ね笑顔の花が咲く

一杯の珈琲と聞く雨の音

オフレコで本音が聞けたレポーター

断捨離が出来ない亡父の道具箱

近頃は美談などない社会面

大阪市 江島谷 勝弘

いい友だ必ず届く旬野菜

奢ってくれる人には素直でいる

午前九時露天風呂には誰も来ず

ここだけの話僕は好きなんですよ

動かずに安静にしる原子力

大阪市 池上清治

予定表食べるツアーで埋めてゆく  
仕掛花火人の頭の隙で見る  
百均もデパート並の品揃え  
フランクスラスク買うのに長い列につき  
天神祭り花火は友と飲んで見る

大阪市 中村 叡子

お盆には旅の土産の絵蠟燭  
日本の女子力五輪盛上げる  
オリンピック日本人の誠実さ  
うめちゃんせんせ老いた私が教えられ  
節電にお化け屋敷が大はやり

大阪市 寺井 弘子

声だけを聞けば優しい妻になる  
オノオフの切換え早い遊び好き  
心まで透明にして座禅組む  
子を叱る声はそのまま亡母に似て  
仏壇に座り直して気を静め

大阪市 奥村 五月

断捨離にまだ捨てきれぬ片思い  
老いた母独りで守る休耕田  
失恋に痛めた羽を癒さねば  
あと二合天下取りには足らぬ酒  
濡さずにプールサイドの水着ショー

大阪市 升成 好

忍従のほほ笑みだつてあるのです  
セピア色の記憶がひとつ棚の隅  
溜息を入れた風船上がれない  
パソコンに単細胞を笑われる  
ハッピーエンドあとが気になる苦勞性

大阪市 原田 すみ子

蝉の声降り落ち他の音消える  
何をしてもいいと何もしなくなる  
百四の伯母は仏と会うと言う  
静いの免疫出来ず繰り返す  
夏厨火を使わずにチンの音

大阪市 笠嶋 恵美

歯の治療練習台にされたのか  
燕の巣見つけ散歩の目的に  
老夫婦しあわせそうに仏画展  
親切にされる度ごと若作り  
家事忘れオリンピックに嵌まり込む

大阪市 熊代 菜月

お先にと声もかけずに友が逝く  
まだ老いに負けてはおれず白髪染め  
両の手に断る勇氣やる勇氣  
好きなこと半分にする老いの知恵  
塞ぐ手のすき間で噂聞かされる

大阪市 榎本舞夢

子と連盟パパの酒飲み止めさせる  
妻の座を得るため私ダイエツト  
主婦の粹飛び出してから迷い出し  
物忘れ二人仲良く忘れてる  
白寿まで元気でいれば祝つてね

堺市 柿花和夫

階段が嫌いになった僕の靴  
草むしり小さなウツも引つこ抜く  
落ち着かぬ朝だ新聞休刊日  
輪唱はいかがですかと朝の蟬  
端座して孫に伝える八月忌

堺市 村上玄也

会社では別人になるお父さん  
原発は怖いし停電も嫌だ  
平成の玄人女は口軽い  
行き過ぎてないか週刊誌の記述  
ゴキブリに悲鳴あげてたのは夫

堺市 加島由一

暑き夜ジョーク連発して耐える  
子には子のおもうがなんで嫁が来ぬ  
手花火にうふふと君が火を点ける  
ガーデニング妻の形見だ枯れるなよ  
風鈴の亡妻に届いた声になる

堺市 西村りつえ

欲無限あつという間に出た両手  
古稀すぎて時時位置を確かめる  
淑女にも魔女にもなれる不発弾  
妻と娘の話題に夫は遠ざかり  
へこたれず秋の空待つ夏疲れ

堺市 内藤憲彦

一粒ずつ誉めては食べる黒巨峰  
たわむれに妻の手つなぎ胸がキュン  
イケメンの写真で売れる茄子きゅうり  
四人のジジババ相手孫一人  
遺言書どんどん書き足して元氣

堺市 源田八千代

白熱戦のテレビに猛暑遣り過す  
日の丸と君が代流れ自然体  
半年ぶり息子が見舞う盆休み  
缶ビールと酎一タバコ親ゆずり  
受ける身に介護保険のありがたさ

堺市 山本半錢

風のノック心待ちして黄昏る  
お気に入りワイングラスに馴染む夜  
酒飲めぬ事も女は言い訳に  
後悔を重ねて短氣治らない  
先のない一本道と気付かない

堺市 大隅 克博  
なるようにしかならないとい聞かす

寝る前に今日の一日感謝する  
徒競争まだまだ孫は欲がない  
獅子のように崖から我が子落せない  
もし仮の話にのらん事にする

堺市 矢倉 五月

虹二本出たと写メール病床へ  
長老の役目次代の背を押す  
一言のハイですつきり出来ました  
すぐ顔に出るのでチョット席はずす  
孫膝につむじが僕と同じ位置

堺市 奥 時雄

カラオケでお互い義理の拍手する  
手短に終えての拍手だと判る  
マニフェストもう素直には読まれない  
初診には長くて辛い待ち時間  
黒枠に入れる写真は先送り

堺市 宮本 かりん

ハイハイハイ本当の味方ではないな  
ぎりぎりの線まで入れる欲もあり  
チンで済む料理がいつの間にか増え  
代り映えない毎度の食事だな  
すつぽりと隠しきれずに出た尻尾

堺市 志田 千代

吸盤のついてるような着地する  
白い肌は弱い肌だと知りました  
子が住んで東京が身近になった  
梅田までいく日の母は旅支度  
茄子の花母に背いたことがある

堺市 澤井 敏治

礼状に礼状が来てまたお礼  
愛してる誕生祝い忘れても  
解説を聞いて名画のうなだれる  
いいじゃないかシミが増えても酒飲みや  
ぼつくり寺直ぐのご利益では困る

堺市 齋藤 さくら

お茶の間で日の丸の数かぞえてる  
オリンピックいつの間にやら寝てしま  
この頃は孫に遊んでもらつて  
ごめんねと電話口なら言えるのに  
墓参り疲れた心なぐさめる

堺市 大久保 のん子

生きぬいて悔いは明日へ引きずらぬ  
亡き夫に長い手紙を書きつづけ  
虚勢など張らず素顔で生きていく  
バイキングここは格差のない世界  
ヘルパーを杖とも頼む暮らし向き

堺市 荻野像山

茨木市 島田誠一

弱音だけは吐かん政治家嘘はつく  
手を貸してギックリ腰になりました  
ピカピカのベンツがカート押したはる  
耐えている仁王も偶に泣きたから  
ぺちゃんこも子供育てて来た誇り

堺市 遠山唯教

シニアの目にまだ燃え上る好奇心  
生きるため無駄もこの世の潤滑油  
やり直しのきかぬ人生おもしろい  
節電に明かり奉行が頼もしい  
五輪始まり寝不足つづき熱くなる

池田市 栗田久子

かじる歯のないまま梨をむいている  
幸せな頃の話をして笑う  
つきあいのこつ心得た人に添う  
別れ際共にやさしく掛ける声  
体温の伝わる位置の心地よさ

泉佐野市 山本蛙城

トキ巢立ちパンダの仔の死運不運  
肩組んでデカンショ歌う友も亡く  
待ってたと穴子出番の鰻高  
熱中症多発植木も水浴びせ  
集金日小銭こぞと幅利かす

スカイツリー国の明日が見えますか  
評論家安全地帯から吠える  
難題は塩漬けにして忘れられ  
もつれ糸元は単純かけちがい  
新築のとなり表札まで英語

茨木市 藤井正雄

海外へわくわく初のパスポート  
まだ親に内緒楽しいスケジュール  
順序よく花を咲かせる祖母の庭  
移転先略図大きく貼る呑み屋  
古漬けを出す順番は祖母が決め

大阪狭山市 矢野 梓

贅沢の日日へ終戦忌を忘れ  
猛暑日に手抜き息抜きして過ごし  
読むほどに悩み広がる老いの本  
度忘れの先を夫が足してくれ  
週刊誌見出しの記事を読んで足り

交野市 森本弘風

役人は税金使えずと和解  
エアコンが原発を呼ぶ暑い夏  
原発事故神話信じていた報い  
老妻に逆らわないでついでいく  
じいちゃんがお盆に買ったランドセル

河内長野市 山岡 富美子

歳時記が仕舞い忘れている猛暑

節電が伏兵になる夏の陣

イエスでもノーでもないが義理がある

ノック不要ころはいつも解放区

半額になったら欲しくなくなった

河内長野市 木見谷 孝代

重心を陰で支える土踏まず

入港へ島の民謡してみてくる

ふるさとの景色変らず人は古い

かもめ群れ大敷網が大漁だ

海からの涼風生きた心地する

河内長野市 村上 直樹

フクシマを荒野に変えた罪と罰

煽られて年甲斐もなくまた二合

ご印籠のように昔のラブレター

泣き笑い苦労かけたよなあ影よ

鬼がきて髪掴んでも追い返す

河内長野市 山室 光弘

もったいないをいっぱい詰めた冷蔵庫

節約を仕切り直しの消費税

家計簿の余白に苦労そつと書き

「近いうち」で動く政治の頼りなさ

円高に乾いたタオルまだしぼる

河内長野市 黒岩 靖博

五万発夏の夜空に恋しぐれ

サーファーがうねる高波一勝負

手術後は元氣瀧刺若返る

家計簿が日記がわりの備考欄

少子化と高齢化とで縮む国

河内長野市 松岡 篤

黙まりがまあ一献で喋り出す

入会費ゼロのカードがゾロゾロと

粘ってもコンピュータは駄目は駄目

愛敬と作り笑顔は別でつせ

老夫婦パンフ見ながら旅気分

河内長野市 谷 久美子

自画自賛出した手料理箸付かず

別々の趣味で活気の出る夫婦

盆提灯点し供養の八月忌

仮面脱ぎ日記に綴る一行詩

通い合う絆が自慢過疎の村

河内長野市 坂上 淳司

てきばきと社員指示しているパート

パートだと自覚するのは給料日

左箸を匡正しない民主主義

振り袖のお嬢さんあら握り箸

環境派いつもマイ箸忍ばせる

河内長野市 水谷 正子

オリンピック済めば幾分落ちつくか  
オリンピック朝飯前でない四年  
蚊が少ない嬉しいけれどあいそない  
歌舞伎みて残る生命に水をやり

河内長野市 梶原 弘光

辛酸をなめて愛敬にじみ出る  
遊園地財布片手に孫を追う  
爺ちゃんとは孫がおまけで聞いてくれ  
新党名いつそじゅげむにすればよい  
この辺でけりをつけねば酒タバコ

河内長野市 植村 喜代

花火の音外は涼しい夜風かな  
静かになると耳が歌い出して来る  
大きい人増えて小さい靴がない  
回覧板夜は歩けぬ老いの足  
君が代はオリンピックの歌になり

岸和田市 雪本 珠子

見解の相違名案浮き目見ず  
残業を部下に託して夜の街  
好奇心持つて偕老まだ老いず  
今わたし笑顔に支えられている  
神経が疲れ言葉に棘が出る

岸和田市 堤 梢代

友人の退院祝に一人乾杯  
応援にメダルはないが頑張るよ  
熱中症なりたくなくて籠の鳥  
蟬泣いてますます温度上ります  
誕生日祝ってくれる他人様

岸和田市 岩佐 ダン吉

産むだけで親にはなれるのだろうか  
ゆとりなどないが善意は惜しまない  
献血が終了僕を褒めてやる  
やがて花咲こうただ今少数派  
正論を吐いて淋しくなっている

四條畷市 吉岡 修

読み切ったように動かぬ棒グラフ  
前略と書けばすらすら書けました  
きつと僕の良心だろう唸ってる  
きらきらきら星座無心に詩をうたう  
咲いた咲いた幼い頃のいい国語

吹田市 山本 希久子

軸足がだんだんぶれる舞い姿  
視力聴力半分になり生き易い  
笑顔の種蒔いて家族の出来上がり  
断捨離に拍手実行はしない  
LEDも心の闇は照らせない



鈍行で行こうと妻と手をつなく  
戦争を語り尽くした百二歳  
コンパスで描くからハート固くなる  
八月の罪を葬り石を積む  
スラックスからステテコになり熱帯夜

吹田市 太田 昭

皆のお蔭五輪メダルの合い言葉  
父母祖父母子ら真ん中に花が咲く  
波瀾万丈出会った人に運もらう  
松籟も消え砂浜も消えました  
枯尾花整骨院の賑やかさ

吹田市 瀬戸 まさよ

何もかも暑さのせいにして怠け  
暑くても米櫃だけはしかと減り  
ロンドンへ日本頑張れ茶の間から  
鬼灯の一枝挿して秋にする  
ずんぐりむつくり正直な影法師

吹田市 須磨 活恵

賑やかなオリンピックを一人見る  
残り火を綺麗に燃やす夏祭り  
二十年先のことで聞く傘寿  
ライバルも今は手本にして暮す  
きつといい明日にしよう米洗う

吹田市 木下 敏子

なるようになるあまり深くは考えぬ  
きりぎりす鳴いてふる里たぐり寄す  
老いるつてこんなに涙すぐに湧く  
限りある命と話し答え出ず  
ストレスを捨てに句会で大笑い

吹田市 大谷 篤子

どうします飛ぶに飛べないオスプレイ  
神様も熱中症の経験を  
いじめなら遠い体験身に沁みる  
金メダルみんなの愛もこもつて  
マンションの廊下大の字黄金虫

吹田市 野下之男

一つ穴のむじなだそつとしておこう  
蒔かぬ種身にふりかかる事もある  
どなたかしら庭の雑草抜いてある  
負けている阪神なんか見たくない  
待つ人の居ない家でも帰らねば

高石市 浅野 房子

五輪選手親の想いは如何ばかり  
おかげさまで暑い一日無事過ぎる  
くもりガラス磨けば見える我が心  
嫁姑愁眉開いてきた絆  
泣き虫の孫拳式して泣くばかり

高槻市 井上 照子

高槻市 安田 忠子

送り迎えしてくれるのです。ゴルフ  
見送りに分かれ惜しんで旅終る  
隠岐の島夏の思い出丸い石  
噴火口潮引くごとく避難する  
阿蘇に来て小さなことが飛んで行く

高槻市 指宿 千枝子

広島を忘れぬ白い夾竹桃  
おとといが白紙のままの日記帳  
冷房の部屋は極楽夏ごもり  
衣替えしたい猛暑のカラスです  
彩替えて時を楽しむ醉芙蓉

高槻市 片山 かずお

半分こして美味しさを倍にする  
都会人ルーツ辿れば過疎の里  
いつも遅れるバスに合せて家を出る  
今日もボクはお家で妻はカルチャーへ  
損得を言つて器を小さくする

高槻市 島田 千鶴子

弱者にも夏の日差しは容赦なく  
合歓木の揺れる葉音は母の歌  
にがうりをたとえ食べたなら秋が来た  
迷いなく女は勘で動きまわす  
不器用であなたの心掴めない

高槻市 峯村 勲弘

地球儀を回し戦火の地を辿る  
有益な訓話でしたがすぐ忘れ  
もう三年充電すると言つてから  
ルイヴィトンきつと本物の歩き  
手作りの弁当愛のサイン入り

高槻市 杉本 義昭

縞模様着たら道草したくなる  
遠回りした人生の笑い皺  
あきらめず一本道を行けと母  
この顔が好きで人生生きて来た  
ひとり酒やけに地酒がよく喋る

高槻市 初代 正彦

いよいよと覚悟を決めた人の顔  
ド忘れもその一言で膝を打つ  
手紙ではご多幸何度祈つたか  
父の背を越せないけれど僕は僕  
あのチャンス逸したお陰いま気楽

高槻市 左右田 泰雄

響き合う形で支え合う暮らし  
追信に本音をそつと書き添える  
浮き沈みあつて人生面白い  
忘れたいことがあるから海を見る  
昼下り犬も欠伸をする長閑

高槻市 富田保子

我慢したのに減つてない電気代  
七転び八起きでこころ鍛えている  
黄信号やっぱり止まる歳になる  
朱印帳埋めるためです夫婦旅  
過ぎた日を手繰ればやはり母の味

高槻市 富田美義

悪人のままでセシウム眠れない  
人に飽き政治にも飽き日向ぼこ  
もう少し生きてみようと言う絆  
目標が見えて足並み乱れだす  
幾らでも削れる自分史の肥満

高槻市 佐甲昭二

堪忍袋胸にたたんで会いにいく  
試着室でしばらく甘い夢を見る  
スタンドにふる里揺れる甲子園  
錆び付いたハーモニカ吹く里帰り  
叩かれるコツを覚えて永らえる

豊中市 水野黒兔

おしゃべりなテレビは音を消して見る  
皺の数微妙に減らす肖像画  
議事堂に居留守のつづくマニフェスト  
水打って小さな風を庭に生む  
夕焼けの放置自転車錆が浮く

豊中市 江見見清

雑沓に雲水の鉦かき消され  
風鈴の聞きたい時に風が凜ぐ  
思う事ずばりと書いてまた消して  
棚経に寄進願もついでくる  
蒸し暑さとセツトになった蚊の羽音

豊中市 松尾美智代

自分に甘く夫に辛くなっている  
笑い顔の下に悩みを抱えている  
しなやかに生きよと青い竹が言う  
遠い日の我慢の暮しもどれない  
五歳なのに孫は上手に爺使う

富田林市 中崎深雪

朝顔の青の深さに息を呑む  
田をわたる緑の風に心満つ  
夭折の母の思いに手を合わす  
日記にも書けない本音夢に出る  
五・七・五に導き給いし福の神

寝屋川市 籠島恵子

いい便り初秋の風に乗ってくる  
東京バナナ見つけましたと来たメール  
DNAたどればハレンチな先祖  
お中元は桃だと決めてゆく産地  
紙ふうせん今日は夫の部屋にいる

寢屋川市 森田 麗

なでしこのキックで変わる花言葉

ゲリラ豪雨二つの駅を通過中

節電を知らずに熱く語る蟬

雑穀米食べ平成の八月忌

米を研ぐ幸せにある八月忌

寢屋川市 山本 三郎

過ぎ去った嵐のあとに柿一つ

猿山に石を投げたら投げて来た

猿真似も石と遊んで進化する

里帰り戸を開けはなち昼寝する

しきたりを持ち出してからもめにもめ

寢屋川市 富山 ルイ子

過ぎ去った日日悲しみは浄化する

心ここにあらず友の身の上に

血圧が平常夏の暑さ故

久し振り中ジョッキ飲み舌鼓

片付けよう片付けようとして暮れる

寢屋川市 平松 かすみ

ふるさとへ魔女の箒がほしくなり

お漬物送ると近江牛が来た

好物を食べてコロリを願います

テレフォンの無い入院中でした

ありがとう私宛があるポスト

羽曳野市 三好 専平

文化へのいじめ文楽にも及び

森繁も千景も生きている映画

太陽に吠える真紅のバラとなり

どうしても鳴かねばならぬ朝の蟬

炎帝に瘦躯のかげをさらしけり

羽曳野市 徳山 みつこ

神さまが夫の臓器ノックする

しばらくは魚をおろす気になれぬ

闘病ヘスクラムくんで四人部屋

ベッドから憎まれ口が出て安堵

わたくしの胸にも鬼が舞い戻る

羽曳野市 宇都宮 ちづる

パソコンが機嫌損ねて手におえぬ

虎の子を引き出す孫の夏休み

できちゃった婚纏めて祝い弾みましょ

自分ではできぬ断捨離娘に托す

タコ焼パーティー具がまちまちの三世代

羽曳野市 安芸田 泰子

度忘れは猛暑のせいとしておこう

忘れるという幸せもあり遠花火

コマーシャルの数に疑い深くなる

飲み込んだ言葉が煮える腹の中

改築を思案しているのは余命

判断の甘さ結果のほろ苦さ

羽曳野市 吉村久仁雄

オシメする猿はいつかは喋り出す

建前をすべて溶かしていく猛暑

修羅場踏むたびに大人になっていく

首の鈴はずすとどこもない歩み

羽曳野市 永田章司

父の日に年に一度のプレゼント

列島が各地で揺れて落ち着けず

宇宙より住んでる地球もつと知れ

お家芸次から次へ乗っ取られ

便利さに変る幸せ何かある

羽曳野市 福田悦子

オリンピック金銀銅の残す影

今日も吹く世間の風に乗り切れず

メス入れた体に不安つきまとい

あみ針が冬の足音聞き始め

来年も生かせて欲しい神の加護

阪南市 森村美花

気取るのは苦手いつでもすっぴんで

曖昧な返事のなかにある温味

保存しておきます君の甘い声

少しづつ歩幅が狭くなった老い

軽い洒落とばして和む老いの智恵

咲かずに枯れる花にも熱中症がある

東大阪市 北村賢子

もう少し恥じらい持つて夏のギャル

郷の誇り龍馬板垣アンパンマン

改めて日の丸誇らしい五輪

劳いの言葉へ励む介護の手

東大阪市 佐々木満作

質問に答えず曖昧に笑う

メダリスト英雄気取りなく清楚

寄り道が多い妻との万歩計

娘が嫁ぎピアノドレミを持て余す

ボランティア多彩な人がいて楽し

東大阪市 笠井欣子

目方増え身長縮み苦笑する

般若心経だんだんおぼえ声弾む

仏壇とベッド同居で淋しい

いつかまた流す泪もかれ果てた

にこやかな夫の遺影にすくわれる

枚方市 丹後屋肇

積乱雲土堤のカップル慌て出す

スカイツリー引き摺る高所恐怖症

色つぼく墓苑を染める曼珠沙華

エンディングノート加筆の赤インク

打ち明けて仕舞ったママの聞き上手

枚方市 寺川 弘一

腕自慢すると重荷を持たされる

雷落とし鉄拳で育てた昔

老いの進化はバリアフリーに蹴躓く

ハイハイと言えど何とか生きられる

今よりはよくなる筈と生きて居る

枚方市 海老池 洋

日本中寝不足気味にして五輪

優柔のわたし励ます土用波

欲望の電車にはない赤信号

黙もくと待つ炎天の信号機

何もかもだんだん淡くなる老後

枚方市 安達 忠央

ご馳走は旨い沢庵白い飯

どう見てもあいつが白と思えない

良心が重荷たまには乱れたい

たまたまのチャンス逃したコップ酒

歩道でも信号青も油断せず

枚方市 小林 わこ

テールブルの花は一輪野のスマレ

のんびりとつましく生きて二重丸

輪の中で燃やしたあれが初恋か

輪に誘うやつぱりあなた好きだから

無精して風にお仕置されました

枚方市 二宮 紫鳳

日焼けした孫の寝顔にうちわ風

オリンピック夫婦喧嘩も中休み

朝一番朝顔咲いて心晴れ

人生の余白に咲いた花一輪

夏登山ペアルックで唄も出る

枚方市 二宮 山久

節電へグリーンカーテン青々と

山頂をきわめ口笛吹いてみる

また裾を今年も伸ばす孫育ち

親と子のオリンピックに花開く

虹立ちて行きかう人の会釈かな

藤井寺市 高田 美代子

役終えてゆうるり溶ける氷中花

雪おんなを氷室で預っています

今日の運ジャンケンポンで決めている

眠れぬ夜オリンピックが盛り上がり

秋になったらジャンプが出るかも知れぬ

藤井寺市 太田 扶美代

ためらってやつと踊りの輪に入る

娘の助言孫の助言も入れて買う

ささやかな幸でわたしにしか見えぬ

兄ちゃんと喧嘩した日の入道雲

携帯をわすれた顔ののつべらぼう

藤井寺市 津田 シルク

鈴木 いさお

脱いでも暑いまといえは茹る昨日今日  
五七五の敵は猛暑と思う日々  
釜ゆでの刑を受けてる夏さなか  
あま蛙と蟬のはざまの空模様  
錆びた脳に試行錯誤の処方箋

藤井寺市 俣野 登志子

なんでもない道で躓き澄まし顔  
正義感が強く鎮まらない怒り  
毎日がレジャー余生とも言うらし  
ブラウスが夫のシャツに化けて夏  
土用餅三つうな井そこそこに

藤井寺市 伊藤 アヤ子

真つ新の制服光る開会式  
夏だつて食欲はある家の人  
寝不足もメダルがとれてうれしいな  
被爆者の名簿今年も納められ  
平和への祈りと万灯流し

藤井寺市 増井 ヨシ枝

お願いのポーズで花が水をこう  
好奇心一杯もつて呆け封じ  
節電は無視する老いの身が大事  
千歳から伊丹へ降りてサウナです  
車椅子三泊四日ちと辛い

失意の日 日がなシヨパンを聴いている  
哀しからずや教育勅語まだ言える  
究極の夢は高額納税者  
ひょっとして百まで生きるかも わたし  
買ったまま棚に飾つてあるスマホ

藤井寺市 吉田 喜代子

猛暑日は空になつてる思考力  
猛暑日はクーラー止めて煮そうめん  
値上がりの鰻井止めて穴子井  
あいさつの筈返らぬ大都会  
オリンピック終つてやつと眠れます

藤井寺市 若松 雅枝

八月の海は哀しい彩になる  
クールビズいずれ猛暑も去つて行く  
猛暑日も律儀に咲いた百日紅  
閑かさや汗一つないお茶の席  
父の汗染みた諭吉で使えない

松原市 森松 まつお

デュエットの彼女の瞳うるんでる  
泣き黒子二つもあつてよく笑う  
葬式で会つて近況語り合う  
ケータイもテレビも切つて読書の日  
飲めるのは元気な証さあ飲もう

箕面市 広島 巴子

耳鳴りと蟬が合唱堪らない  
懐かしいほおずき鳴らし子にかえる  
思い出へ西瓜の種を飛ばし合う  
オリンピックパワーを貰い暑氣払い  
涙にも喜怒哀楽の調べあり

守口市 井上 桂作

大雨の後は台風来んといて  
生活の質を重んじ長生きを  
あるがまま飾らないのをモットーに  
新しい歯を作り替え味変る  
列島は体温並のこの暑さ

八尾市 宮崎 シマ子

ひとり暮しに自信はあるがこの暑さ  
何処へでもお茶とお塩を持ち歩き  
七光りの中に渋いの一二本  
極楽へのガイド夫がしてくれる  
鰻高値いわしの蒲焼食べておく

八尾市 村上 ミツ子

ロンドンへ眠いぬむいの日が過ぎる  
ほっぺおさえて食べる沖縄のマングー  
風鈴がかすかな風を見せてくれ  
貧乏は気楽詐欺師も遠慮する  
生きている ないものねだりばかりして

八尾市 高杉 千歩

八月を繰り返すのかオスプレイ  
パンダより人の命が軽い国  
増税へ戦後の知恵が蘇える  
マイベース老人力を蓄える  
形違つても戦ですこの世

大阪府 米澤 俣子

列島を生き返らせた金メダル  
おばちゃんの口でなにわが活気づく  
夏バテに梅干しひとつ熱い茶と  
香しいコーヒー泣かす紙コップ  
早とちりのやぶ蚊よワタシおばあさん

大阪府 粕山 隆盛

送り火にほとけを帰す五山の灯  
夏の涼夏のオブジェを組立てる  
種袋さらさらいのち息吹く音  
五七五サブリメントにするくらし  
鍵穴の向こう人間万華鏡

大阪府 吉内 タカ子

長生きの日々贅沢が有り難い  
おばあちゃん賞味期限日見て出して  
ロンドンで金銀銅と誇り咲く  
君が代を聞き手を叩く金メダル  
長引けば汗のぜいきん勿体無い



大阪府 桑田 ゆきの

しがらみを捨てたら顔が緩みだす

苔に苔六十余年の碑を撫でる

嬉しさのメダルの裏にある謙虚

永田町ちよつと静かだお昼寝か

水撒けば庭の写楽が笑い出す

神戸市 山口 光久

物好きにご飯ですよが聞こえない

靴音が乱れて機嫌よく帰る

子供っぽい大人に舵を任せられぬ

へなへなと崩れてならぬ志

行間をじっくり読んで知るころ

神戸市 伊勢田 毅

百歳が増えて年金減る平和

本堂でうつらうつらという法話

防衛は他国任せの平和論

しがらみにノーと言えないオスプレイ

年金ダウン余生の城が揺れ動く

神戸市 木村 貴代子

原爆忌君の忌 我の生れ月

午後からは避暑に行きます北の部屋

一割の節電出来た我を褒む

紙一重その差一生増えてゆく

絵日記と図工宿題夢に出る

神戸市 井上 じろう

夕焼けにドボルザークの曲流る

こげ飯をかくしてくれた母の味

指切りを忘れられても忍び草

屑入れにやつと見つけた探しもの

馬の背は喜怒哀楽を一身に

神戸市 山田 婦美子

ピンチにも耐えた私の向こう脛

幾度も夢見た里の百日紅

西瓜メロン手のつけられぬお中元

硝煙の匂いなかし母の膝

油蟬母の背丈が低くなる

相生市 中塚 礎石

耐え難い声かも知れぬ墓の蟬

晩学が小道てくてく独り旅

真つ直ぐに進めと鈴が跳ね返る

古里を捨ててはいないハガキ書く

炎天下生き抜く力蟬しぐれ

明石市 糀谷 和郎

川下へゆくほど深くなる情け

打ち明けぬ夜は悩みを深くする

生きる糧夢かパンかでまだ迷う

ネジだって右派もあるなら左派もある

足元の蟻の悲劇を知らぬまま

芦屋市 黒田 能子

それぞれの見方白から黒になる  
うつひとつ吐き出すように大あくび  
肩の荷を下ろしてからの遊び好き  
手を合わすなぜか素直になつてくる  
迷うだけ迷つて決めたことだから

芦屋市 竹山 千賀子

ありがとう受けて心のマッサージ  
ネイルして別な世界がある気分  
見えぬ未来足元だけはしかと見る  
押し花を入れたページに亡夫がいる  
路地裏に小さな幸の地蔵さま

尼崎市 長浜 美籠

新しい発見をした回り道  
リクルートスーツに敵し蟬あらし  
さすがです忘れ上手な茹で卵  
憤懣もうすれ遠雷きいている  
私の身方は母のお味噌汁

尼崎市 軸丸 勝己

早起きで揚がる日の丸見たい朝  
あと何度黙祷できる終戦忌  
八月になれば書店にあの戦記  
節電に心頭滅却戦前派  
甲子園入道雲が虎に喝

尼崎市 春城 年代

能天気卒寿の空は最高だ  
九十五歳に手を貸している九十歳  
ケイタイを持ち出し人を黙らせる  
昼寝の金魚ただようていて睡くなる  
禁猟区みささきの風鎮もれり

尼崎市 山田 耕治

正直な犬の尻尾に負けました  
何回も巻き戻して眠れぬ夜  
八月の仏の前で昼寝する  
何曜日かと先ず聞いている都合  
ドアばかり立派リフォームしたところ

尼崎市 市坪 武臣

才能を競り合うプロの伝統美  
才能を楽しみながら趣味一途  
本当は注いで欲しくて酌み交わす  
でこぼこの人生越えて目差す喜寿  
節電に家族やたらと和む部屋

尼崎市 藤岡 りこ

憂さ晴らし出来るものなら下戸も飲む  
飲み会には都合よく風邪治る人  
オリンピック精神力で勝負する  
体力と一緒に気力逃げていく  
力仕事は妻にまかせる蚤夫婦

尼崎市 林 昭三

陽は高い早めにセルフ風呂に浮く

ハツ橋が嬉しい孫の京土産

今日立秋稲田を渡るそよ風に

会談は表と裏のある話

心配は殻だけ出来た孫のこと

加西市 金川 宣子

置いてある離婚用紙はまだ白紙

金運に期待を込めたヘビの殻

抜け出せた開放感の薬指

暑いから簡単レシビばかり出る

新党にメディアが流す裏事情

川西市 米原 雪子

オリンピック老いの血潮も熱くなる

親の年巡り来て知る孤独感

乗り降りにバスハイタツチ電子音

さっぱりと友へアカット若返る

運命と思い素直に生きている

三田市 北野 哲男

生きている証し朝夕鉦叩く

勤めてた頃ほど今は暇がない

小言言う夫が留守で口淋し

遠吠えの憂国続く縄のれん

浮動票山を動かす力持つ

三田市 福田 好文

理屈では分かるが出来ぬ休肝日

眼鏡屋が知らせてくれる誕生日

素手だつて魚つかめる郷の川

仕来たりでがんじがらめの村祭り

一人では乗る気がしない観覧車

三田市 久保田 千代

今朝咲いた朝顔明日はもう咲かぬ

一期一会朝顔見ててそう思う

オリンピック観ると腹立つから見ない

命ある限り求める遙かなるもの

思い出をたんと覚えている指輪

三田市 堀 正和

ハグなんてもう出来ません加齢臭

脱がんでもいいと女医に止められる

歯科眼科外科リハビリのフルコース

スイーツの口直しにと白ワイン

好き放題していいですか後期です

三田市 上垣 キヨミ

結果聞く嫁の笑顔が晴れている

告訴より気付いて欲しい親の愛

百歳の笑みにも見えるデスマスク

戦いが済めば爽やか美男美女

盛り方にお里が知れるバイキング

三田市 上田ひとみ

やさしいと小さな声が聞こえます

見ないふりしていきましょうかその涙

あの日なら私はきつと跳べたのに

文庫本しつかり抱いて夏の旅

ピンヒール買ってみただけいいじゃない

三田市 石原歳子

お隣の朝顔こちら向いて咲き

内科へは脱ぎ着が楽な服で行き

マニキュアをした娘が家事のお手伝い

汗かいた顔を遺影に見てもらおう

幼い日母の上手な耳掃除

三田市 田中章子

口べたのほめ言葉には愛がある

十一階晩夏の蠅のような蠅

半身浴川柳集と鼻めがね

最高の笑顔父のデスマスク

短気という夫のジャブをかわしつつ

三田市 尾崎一子

盆仕度母が元気に動きだす

里帰り母を彷彿さす姉妹

もう聞けぬ私のどこが好きだった

みんな脱ぎ自分にもどるマイホーム

腕を組み二人三脚老姉妹

西宮市 山本義子

ざる蕎麦でお腹の満ちる歳になり

指人形わたしの手から小宇宙

美辞麗句で満たしてくれる試着室

満腹のあともだえてる皮下脂肪

終章までこころ満ちるか紅椿

西宮市 西口いわゑ

前例を盾に引かないばらの刺

スキップの少女大きな紙袋

初対面符丁のようにピタッと合う

貝になり守ると決めて楽になる

屈託のない笑顔に任すことにする

西宮市 足立茂

下手な句の例に私の句が並ぶ

ここの寿司回らないねと孫が言う

五千匹ヒツジ数えて目が冴える

結論は十人十色私利私欲

人間ドックの予約忘れて午前様

西宮市 牧渕富喜子

六甲の稜線やつと夏の雲

途中から行き先き聞かぬ事にする

それなりのプライド捨てることはない

大仕事終えた気になる検診日

上に立つ人を真似てはいけません

西宮市 吉井 菜々子

水色のブラウス夏を謳歌する  
涼やかな胡弓と夜風愉しんで  
キラキラ星と声を囁らしているお守り  
ぬいぐるみの真ん中にいる独りっこ  
収穫のまえにゴーヤは枯れました

西宮市 秋元 てる

ためらわず席譲られる今朝の秋  
嬉しいと外に飛び出す癖まで似  
カンパニーが好きな五歳が座を救う  
全没も生命に別条ないと笑み  
ミス連発ユーモアまぶし生き延びる

西宮市 緒方 美津子

再稼働おこっているんだなクラゲ  
割箸の行方気にして捨てている  
実力を出して負けたら泣きなさい  
頑張ったトップもビリも大写真  
これという予定のない日食べすぎる

西宮市 片山 忠

まだ泣ける自分映画で確かめる  
言い訳をするな私は冷めてます  
葬儀中愛想笑いをしてしまう  
無条件で降参したくなる笑顔  
風上に置かれそのまま干涸びる

西宮市 亀岡 哲子

パラソルへはらはら降るは百日紅  
蓮の花ボンと開いて母が来た  
介護二に下がり姉さん歩いていて  
エアコンを出て緑陰の風と逢う  
おしゃれ着も少し崩して風の中

西脇市 七反田 順子

節電にゴーヤヘチマがよく育ち  
七回忌母の笑顔を八ミリで  
ただひとつおしゃれな皿を買うただけ  
星空に秋を感じる散歩道  
コーラスで心が和む水曜日

姫路市 古川 奮水

鯛焼屋安くて人気列がある  
信州の風が恋しい友揃う  
上田着き名代のジャムを試食する  
宣伝の蕎麦屋座敷へ腰すえる  
旅土産地酒にするか漬物か

奈良市 米田 恭昌

関白も萎んで見える病み上り  
面喰いを鏡気弱にさせている  
しがらみに青息吐息する家計  
五輪伝説作るボルトの弾丸ライナー  
暑い夏に五輪の熱気輪をかける

奈良市 阿部 紀子

生駒市 飛 永 ふりこ

トライアスロン過酷なコース凄すぎる

女子バレー団結力の素晴らしさ

ボルト氏の躍動こそが男性美

白髪でも目の輝きは持っている

道頓堀プール出来たら泳ぎたい

奈良市 岩 本 浩 二

橿原市 居 谷 真理子

コンチキチンと祇園囃子が夏を呼ぶ

遠き日を訪ね無人の駅に立つ

骨抜かれ尻に敷かれて八十路坂

戦友を想い起こさず蟬しぐれ

いい汗をかいて露天の湯に溶ける

奈良市 辻内 げんえい

大和郡山市 坊 農 柳 弘

団塊でシニア特典消えていく

海外では単語並べてあと度胸

退職して今も気になる社の人事

昔ばなし子等は嫌うが孫は聞く

猛暑日に冷えた電車で寝むりこけ

奈良市 加門 萌 子

奈良県 渡 辺 富 子

弄ぶ命いつからこんな世に

学校も教委もきれいな事は言う

アメリカにノーと言えないオスプレイ

小さい国四面楚歌だがよく励む

五輪とはコスモポリタン素晴らしい

サーファーが夏雲めがけ投げキッス

人生の如くに一瞬の花火

まともにも熟睡すればケセラセラ

シュトラウスの調べ涼やかな目覚め

小椋佳風刺する目に慈と虹が

橿原市 居 谷 真理子

いじめられつづけて四つ葉になった

悲しみのあの日はいつまでも昨日

駆けてつた心がしおしおと戻る

シシユフォスの刑の如くに食うて寝る

笑って笑って笑ってさらっぴん

大和郡山市 坊 農 柳 弘

夕焼けのお洒落に似合うススキの穂

志半ばで秋をやり過ごす

秋深し隣松茸うち秋刀魚

姿見で今朝の機嫌を整える

裏方の苦労咲かせた菊花展

奈良県 渡 辺 富 子

ざぶざぶと命を洗う岩清水

七十億の中で愛する人いずこ

身を隠す天の岩戸を妻は持つ

終章を見事に染めるあかね雲

光彩のあなたへゼロになるいのち

和歌山市 福本英子

風鈴が笑う暦の逆を行く  
杖ついでご先祖様の墓洗う  
手の届く位置で蟬鳴くこれでもか  
音だけで老いも華やぐ遠花火  
生きすぎているのか猛暑身に沁みる

和歌山市 武本碧

ハナハトに強いが弱いカタカナ語  
一番の背なを見飽きた影法師  
自助努力せずに浮輪を待っている  
デジタルの疲れを癒やす紙芝居  
笛吹けば踊る仲間で山動く

和歌山市 古久保和子

輪切りしてレモンの本音確かめる  
メダカの壺は母が梅干漬けた壺  
応援のトランペットに映る夏  
銭湯に浮かべた首は噂好き  
リモコンで動く夫の日曜日

和歌山市 玉置当代

季節ごと主婦の仕事が目白押し  
夏バテの脳みそ縮むこと知らず  
迂闊なこと言っただけかなしい仲違い  
悔いはないが歩んだ道を振り返る  
ようこそと確かめあっている絆

和歌山市 田中みね

人前で上がることない超近視  
世話役があればこそだとあれやこれ  
今財布にいくら有るのか言えますか  
ノックアウト妻圧勝の口喧嘩  
今日もまた届くといいなお中元

和歌山市 堀富美子

跳んでいる無我の境地が心地よい  
ロンドン五輪夫の遺影持ち歩く  
子の前でジョークも呆けも見せられぬ  
炎天下びつくり水で脳覚ます  
開き直って精一杯に今日を生き

和歌山市 喜田准一

控え目な明治の亡母にあつた芯  
酸い甘い越えて来ました浮世坂  
立ち位置を見定めている宮仕え  
秋深しはぐれとんぼよ淋しいか  
ストレスも溜めない事にして余命

和歌山市 柏原夕胡

「おはよう」と言おう勇氣が湧いてくる  
手土産を持ってケンカを売りに行く  
常識の中に座ってなどおれぬ  
糠床を混ぜる時だけ良妻に  
少しずつ泣いて元気に生きている

和歌山市 福井菜摘

能力に限界がありマイペース  
スランプの数だけ並ぶ花の鉢  
生真面に生きて汚れない右手  
うろこ雲ふと詩ごろ里ごろ  
許す気の言葉に笑顔そえておく

和歌山市 松原寿子

鮮明な記憶を胸に閉じ込める  
踏み込んだ言葉ないまま原爆忌  
炎天下癒しの便り読み返す  
忍耐力すこしはあると言っておく  
思い出を開くと風が回り出す

和歌山市 土屋起世子

過去なんかポイポイ捨てて今の花  
親孝行息子夫婦に肩がこり  
溜め込んだ愚痴まで孫等持ち帰る  
気に入った服は意地悪小さ過ぎ  
煽てられうつかりメモをご開帳

和歌山市 松尾和香

朝顔の花色染し風さやか  
勝って涙負けて涙にもらい泣き  
電気消し愛でる満月うちわ風  
佳純ちゃん体操泳ぎ見て朝に  
新しいわたしの彩で誕生日

和歌山市 坂部紀久子

地球儀を回し開会式を見る  
整理整頓まるで国会の答弁  
過去形の話ばかりにお茶ぬるむ  
脱原発のデモへ心で参加する  
母の居るところふる里色になる

岩出市 藤原ほのか

ふつつと溢れる思い詩にする  
どの子にも語り継ぎたい夢がある  
復興の二文字胸に焼き付ける  
後の祭りにならないように種を蒔く  
ハードルを上げて一気に跳んでみる

海南市 堂上泰女

小二来てドレミの歌のプレゼント  
学園にゴーヤが笑う夏休み  
自由主義がだんだん消した公序の灯  
塾通い時々ガスを抜いてく子  
イニシアチブ孫が握って大掃除

海南市 小谷小雪

一段と涼しげな目に逢いに行く  
カーナビは帰宅コースも手抜きせず  
ささやかな光誰かに届けたい  
目をつむり大丈夫かと自問する  
溜息もあくびも自己防衛です



紀の川市

宇野幹子

ピンタ一撃夏だいこんの暑氣ばらい  
真実をさらして取れた肩パッド  
背を向けた山がひとときわ懐しい  
父の忌も母の忌もあり草いきれ  
わたくしに似た遺伝子が鼻につく

紀の川市

北山絹子

これ以上脱げば骨まで暑くなる  
お隣は避暑地私は午睡する  
泡沫の生涯風が受け止める  
人相の悪い男が側にいる  
陽が昇る今日一日の詩がある

田辺市

岡本昇

エヤコンを見上げ首振る扇風機  
炎天を逆手にとつて甲羅干し  
歳重ね手を合やすこと多すぎる  
土俵際でうつちやる腰を鍛えてる  
節電のノルマが重い熱帯夜

橋本市

石田隆彦

人間の甘さへ不意をつく自然  
甘い水飲んで努力の汗忘れ  
カルテには単に老化という付箋  
風格は場数踏んできた証  
もしもしの応酬老いの長電話

鳥取市

岸本宏章

待合せみなケイタイを持つている  
万歩計付けると遠出したくなる  
節電へ蛭がヒントくれそうだ  
忘れたと気軽に言える歳になり  
その昔お荷物だった大砂丘

鳥取市

岸本孝子

恩返しのためねごと年忌供養する  
携帯にしゃべらせている頼みごと  
花火師の夢が大空焦がす夏  
大切にされると弱る足や腰  
気がつけば今年も蟬の声がない

鳥取市

鈴木一弘

つばめの子からだいっぱい口となる  
一生は五十歩百歩明けて暮れ  
生きられる限界秘める放射能  
任期終え頬かむりとり足袋を脱ぐ  
限界を見事に演ず空の舞

鳥取市

加藤茶人

ビビッと来て結婚ビリッと来て離婚  
一円に泣いた覚えの金拾う  
恋という魔物ピラニアかも知れぬ  
反省は猿でもします人愚か  
友達はスマホ何日でも黙り

鳥取市 中村金祥

エコの夏部屋をすつきり片付ける

民主党防火扉を開け放つ

原発の海に鰻も寄って来ぬ

婚活へ野暮な話を封印す

お隣のゴーヤカーテン見て涼む

鳥取市 前田楓花

原発の町に陽炎だけが燃え

それだけの事を頭に置いてない

子供らの笑顔戦争など出来ぬ

腕枕された幸せ夢だった

トンネルにじつと留まる恐怖心

鳥取市 奥谷彩子

パズル解けぬまま人生夕暮れる

やわらかだが濃く自己主張する6B

過去の栄光を語らぬ再生紙

笑い袋で発酵させる今日のうつ

都市砂漠世相ななめに切ってみる

鳥取市 倉益一瑠

面倒な人を笑顔で遣り過す

生命線どのあたりまで粘れるか

母の背に真似の出来ない詩がある

背伸びして右へならえの青りんご

予感的中妻をあなどってはならぬ

鳥取市 竹口清信

検査してみれば何かが出る歳だ

欲張って溜めた身上老いて逝く

待合の顔もだんだん変りだす

節電も頭に入れて医者に行く

三十度越えたら医者へ行くに決め

鳥取市 中宇地秀四

盃の端から秘密こぼれ落ち

失恋の岩に碎ける波の華

風が鳴る岬あしたに夕暮に

錠剤を数えて生きるお年寄

忍耐と努力男のいぶし銀

鳥取市 春木圭一郎

不運や不幸人のせいにはしない

本心をたった一言伝えたい

携帯の絵文字とにかくありがとう

あいさつと笑顔やりすぎ丁度いい

笑顔には笑顔が返るうれしさよ

鳥取市 池澤大鯨

古稀を過ぎ五十肩とは晩稲なり

リーチの差とにかく俺に策が要る

好きな人心に描いて寝につく

自然遺産地球あちこち墓だらけ

大物だ動揺などは洩らさない

鳥取市 西 川 和 子

役一つ背骨曲げてはいられない  
肩書きが取れて背骨が丸くなり  
若い気の背骨も齢に逆らえず  
DNA僕の背骨も曲がり出し  
お手本の背骨いつともそつが無い

鳥取市 宮 脇 道 子

真白のシャツ目に沁みて少年よ  
病室で流れる日々を過ぎて良し  
心臓の手術の跡に目をそむけ  
山鳩鳴いて隣の料理おすそ分け  
もう少し健康でいる子等のため

鳥取市 福 西 茶 子

丸ぼちやが大好き邪心なさそうで  
弱点を山ほど背負った背が円い  
倦怠期 会話戻したちよいイケズ  
わたくしは悪妻料理超手抜き  
亡母の歳迎えて母の夢ばかり

鳥取市 土 橋 はるお

草取りがいやで草枯しをかける  
廃屋が草に埋れて見苦しい  
宝くじ買わなきゃもしもなどはない  
勿体ない心もしもにつなぎたい  
土踏まず消えてしまったウオーキング

鳥取市 有 沢 せつ子

どきどきを抑え柳誌の封を切る  
バス待つ間蚊に刺されてたふがいなさ  
炎天下予約の歯科へ意地で行く  
くたびれたシャツだが肌によく馴染む  
すぐ前を二分早目のバス通過

米子市 後 藤 美恵子

悲鳴あげる外反拇指にハイヒール  
思い切つて隣の猫に鈴つける  
列乱す者へ諫言命がけ  
置き土産の朝顔が咲く仮住まい  
上棟を終日見あげ首が凝る

鳥取市 高 浜 勇

ゆつたりの余裕の心うまくいく  
行列に並びたくない田舎者  
腹の立つニュースばかりで胃潰瘍  
輪の外も気楽でそれはそれでいい  
女性から声かかりだす枯れススキ

鳥取市 平 尾 菜 美

鼻歌のリズムだんだん冴えてくる  
ダイエットやつとやる気かどっこいしょ  
トンネルを抜ける近道大歓迎  
仕込まれる御恩返し of 寒稽古  
邪気を吐く大地に本音染み渡り

鳥取市 両川無限

あの頃を辿る汽車ポッポに乗って

謝りに行って忘れて来た帽子

矢印を行くと脱走できますか

沈黙を守り続けている誤算

鍵穴の奥からもれてくる吐息

鳥取市 池原天馬

暑い日は車で遠く買物に

若き日の結核地獄今は夢

無縁仏明日の自分か蛍舞う

ローン重ね建てた家だが跡いない

過疎の村跡つぎなくて先細る

倉吉市 猪川由美子

国民の恨み買つても増税す

ああ節電へんなプア感味わされ

防犯カメラの威力うっかり出歩けぬ

自己チューの虫一匹が身離れぬ

モチベーション上げる移籍のイチローだ

倉吉市 山中康子

この猛暑お天道さまと根くらべ

川柳に徹し我が身をつかいきる

手紙かく形式どこを削ろうか

何処よりもいばつて舞える我が住処

ほとばしる気力はあるがとびたてぬ

倉吉市 山本玲子

変る世に日本の四季は変らない

お疲れの形で泳ぐプラツトホーム

想定外の指名で脳が固まった

スキップは駄目ですわたし高齢者

納戸からちよつぱり洩れる団扇風

米子市 中原章子

投函に祈りの言葉そつとかけ

特選になれば赤飯きつと炊く

猛暑日が続くこの夏何か変

ほめられた後の苦言は苦くない

暑い夏あなたに会いに出掛けます

米子市 高田振作

米寿です生命線がまだ続く

年寄りの名演技です惚け上手

いいリズムメトロノームの余生です

妻の選合格したらポスト入れ

句のおかげバラもウツの字も書けます

米子市 成田雨奇

一本道歩いた人の退屈さ

ふわふわと指跡つけて歩いてきた

歩くなら歩け聞くなりラジオ聞け

予定通りゆかない会が面白い

父の予定狂わせたのはぼくだった

米子市 竹村 紀の治

まるまって寝ると寂しい夢をみる

言う通り二時間おきに水を飲む

主催者の言うほどでないデモの数

大騒ぎすると寂しさ倍になる

本気を試されている瓦礫処理

米子市 吉田 陽子

きかんきの南瓜道路に実を成らす

スクラムを組んだ夏草手強そう

葉箱亡母の語録が詰めてある

猿老いて一人傷口舐めている

咽に骨思考能力ゼロになる

鳥取県 山下 節子

四万十の清流保ちたいものだ

泣けるだけ泣いてすっきり出なおそう

父が来る雷になる予感する

苦勞した人だ笑顔に味がある

横文字が略語になってなお不解

鳥取県 岩崎 和子

冷房にすっかりおんぶココア飲む

猛暑日も涼しいストア足が向く

街路樹もみどりさやさや雨欲しい

テレビからオリンピックの声満ちる

北の郷はからも老い便り来ぬ

鳥取県 深田 俱久

老人の種目ふやして運動会

エコエコで夏をおくって紅葉狩り

失敗談手柄話の上をゆく

氏神の幟洗って秋祭り

日章旗数をかぞえて夜が更ける

鳥取県 竹信 照彦

大鹽孫のユニフォームが泳ぐ

我が県も猛暑日競う仲間入り

煩惱も少しは無いと句ができぬ

年金を下げて増税何とする

衣食住食への不安消費税

鳥取県 松川 行男

雑草の元気借りたし草を刈る

炎天に行進曲も途中まで

怒鳴られて怒鳴り返して夏に勝つ

免許捨てまだまだ用があります

顔利かぬ歳になつても呼びにくる

鳥取県 細田 裕花

アブラゼミ参戦猛暑盛り上げる

星の夜は昔語りをしたくなる

水回り大掃除する誕生日

怪物にならねば勝てぬオリンピック

引き出しの海に私のガラパゴス

鳥取県 斉 尾 くにこ

飲み会のひとり酔つてゐる異質感

やさしさに引き込まれてく迷い蟻

温度差に伸び縮みする射程距離

ポイ破り逃げた金魚の後日談

ひとさじの心臓で海越える鳥

鳥取県 石 谷 美恵子

潮焼けの父の笑顔が大好きだ

座るより立つ方がよい和服の美

人間が小さくなつて真似ばかり

すつきりと事後報告が呑みこめぬ

やつと退院千羽の鶴を解き放つ

鳥取県 西 谷 悦 子

生地のまますつきり生きて荷が軽い

今日の色すつきり消してまたあした

失敗の数だけネジが強くなる

紫陽花の色の粘りに魅了され

そして今予感していた風にいる

松江市 三 島 淞 丘

ひらめきを屈けて欲しいペンの先

閉ざされた胸を夕陽がノックする

落款を押せばその気になる色紙

手の届く位置ヘライバルぶら下げる

耳底で揺れる震災地の呻き

松江市 錦 織 禮 子

喜寿の席湖畔の風も笑顔する

腕一本永久免許揺るがない

綿バージョ ン小粋な女のクールビズ

ひと雨の命の水で甦る

盆市で涙息子が三回忌だと

松江市 川 本 畔

嫌な人くいと曲つていきました

風呂敷に夕日を包み持ち帰る

夏椿大きい息を吐いてみせ

ドンと上がる花火に揺れている忌中

ふるさとの河原なでしこ揺れもせぬ

松江市 松 本 知恵子

唯一の被爆国また夏が来る

その先は深く問わずに丸く住む

腕のいい若い主治医がついてます

夏盛り砂丘の轆馬元氣かい

蟻地獄さらさらさらと君を待つ

松江市 小 川 注 湖

まだ青いちよつぱり見せる子の未来

左利き野球に生きて甲子園

活断層上に原発共に住み

ポケットにナイフ持つ子がいる社会

米寿祝い大皿の海老腰伸ばす

出雲市 多久和 敬子

図書館で漫画を読んで笑つてる  
こつそりとへそくり数えよく眠る  
磨いても主婦のプロには届かない  
腕によりかけた肉じゃが煮くずれる  
夫留守菜園管理まかされる

出雲市 富田 蘭水

たくましい選手の汗が欲しくなる  
オリンピックは血の汗ばかり匂つてる  
リコピンの赤いトマトが笑つてる  
砂時計ばかりの性格変えている  
台風もそれでプランを確かめる

出雲市 岸 桂子

休刊日何と淋しい朝だろう  
外食の塩分少し気にかかる  
過去をまだひきずっているカタツムリ  
爪を切る昨日の事は忘れよう  
遠花火果てた闇から夏が逝く

出雲市 伊藤 玲子

退屈なステッキ誘い浜辺まで  
神の試練大海原は凧いできた  
人格をつくる学校病んでいる  
さよならの煙青い空にとけ  
風の盆胡弓の哀歌はなれない

出雲市 小白金 房子

娘に孫に持たすたのしみ種を蒔く  
ふりむけば一筋通す農日記  
婚六十四裏も表も見た重み  
地酒一杯仏と交す初の盆  
緑地また失せてマンション建つ噂

出雲市 竹治 ちかし

人間に良く似た怖い鬼がいる  
仲直り何百回もして夫婦  
地球より大きな命地に還す  
丸付けた暦が左右する暮らし  
日々生命削つて悟りには遠く

島根県 伊藤 寿美

露地裏の店へ昔を食べにいく  
雨期乾期歩き続けた八十年  
世直しのうねり維新の窓叩く  
弱肉強食波高くなる日本海  
低周波聞こえ耳鳴り止まらない

美作市 大石 あすなろ

スイッチオン妻のおしゃべり止まらない  
なつかしい癖字が過去を呼び戻す  
鍵穴を縫れ話が出て行つた  
平凡な暮らしの舵を今日も取る  
振り向いて今日一日を見届ける

宇部市 石原 淑子

松山市 古手川 光

生きのびて秋風やさし萩桔梗

終戦記念日心の傷を元兵士

言い訳は止そう感謝の足りぬ質

シクヨロとこれが噂のチャラ男

星を観て雨の不思議を孫の問う

竹原市 岩本 笑子

アメリカの広さを感じて帰り

いいじゃない話せないけどアメリカへ

どこまでも空 車とどんどん追い抜いて

一週間葉と相談して機上

日本が一番自由に話せます

宇部市 平田 実男

ペアルック仮面の一つかも知れぬ

人間の匂いをもし出す訛り

お茶に水空気買う日がきつと来る

尻尾切るだけで落着する捜査

ポケットの小石いつしか丸くなる

東かがわ市 川崎 ひかり

ただ無心野仏あれば手を合わす

暗黙の内に終わった手打ち式

一生をハウスで過すプチトマト

行き場ない怒りミジンに切り刻む

ライバルの妬心落ちてる楽屋裏

遍路旅して放電も充電も

強がりを言っても足腰が謀反

病院で待つてストレス溜めている

フライドという袴を着て孤独

剪定の庭木がぼやくヒトのエゴ

松山市 宮尾 みのり

宮仕えはご免こうむるスニーカー

女子力にもうはらはらは似合わない

マンネリと言うが才能その程度

天敵がボクの記録を塗り替える

アートだと言うからアートなのかしら

西予市 黒田 茂代

情念を燃やす真つ赤なばらの刺

七転び明日は八起きの爪を切る

エビもカニも嫌いで安くついでます

大は小を普段着みんな貰いもの

大好きな茶碗が割れた今日の鬱

高知県 小澤 幸泉

人類の罪はイエスよ重かろう

病む窓に昔を連れて夏の雨

晩酌は妻のコップになみなみと

ひた走る父の明日が短かすぎ

子供らの行方は問わぬコップ酒

(相馬一花さんの句は72頁にあります)



# 川柳塔の

## 川柳讃歌

(94)

木津川 計

いうてみよ私のどこがもの足り

酒井 真由

出ました、出ました、ご同輩、月が出た、  
どこの生易しい文句ではありませんぞ。その昔、柳橋の元芸者・お鳶は早瀬主税に別れ話を持ち出され、「妾、何か悪いことがあるの?」なら、謝るわ。直しするわ。でも、縁を切られる覚えはないわ」と、ご存知「婦系図」湯島天神境内の場で泣いてすがったのです。時移り星は流れ、当節は男が「でかいお尻が好きと帯を解きすぎりしをいかに」(これ土屋耕一の回文です)という風情。枯れるほど恋も炎が付き易い

三浦 きぬ

先の句の真由さんが、一步も下らぬ気魄でアカン男に詰めよる、と思えば、きぬさんは枯れるほど燃ゆる恋にもなるのよ、と枯れてなお、どこの生易しさではありませんぞ。それにしてもこの頃、安土理恵さんに真

由さんやきぬさんの勢いがありません。今号「おから炒る泣いていたって仕方ない」。いったい何があったのでしょうか。天童よしみは「道頓堀人情」で「ふられたぐらいで泣くのはあはや、と理恵さん、歌うてるやないですか。

指切りからゆつくり広い川になる

山本 義子

こころ穏やかならず、疑心暗鬼にかられて悶々。これ以上は耐えられず、とうとう「あんまりやないの」と問い質したら、ええーっ!? それやつたらなんでもっと早う言うてくれなんだん。わたしがぜんぶカタつけたげる、と、ここらは古今堂焦子さんの役どころです。で、カタをつけ、もう一人でも何かも抱えんと何でも言うてね、とこどもみたいに指切りしたら、気持はゆつくり広い川になって、空の青さが目に沁みるという訳。

ゆつくりしてるが丁寧ではない

谷口 義

大物というから、どんな人物やろと思うてましたら、ええーっ、女!? という場合もあるのです。思い込みは作句の方法、その一つであること、かつて川柳二七会の会長、深尾吉則さんの名句「親友が女であつてなげ悪い」に一杯食わされたのです。義さんも、当然の虚をうまく衝いた作句でした。

義太夫語りのひどいナマリをテツ(鉄)と申します。鉄は鉛より重いからです。これ

も思い込みで、比重は鉛が重いのです。

ガンバレを踏み止まるか逃げ出すか

六〇年安保闘争の頃、反体制の学生青年

知識層に大きな影響を与えた一人の詩人がいました。谷川雁です。「この世界と数行のこ」とばとが天秤にかけられてゆらゆらする可能性」詩とは何かを規定した文章の一節です。僕は靡きませんでした、詩の「革命前夜」でした。さて、くにこさん、この天秤は谷川ほど重大ではないけど、重い対比です。しかし、ガンバルな、選択は考えられませんか。

懇ろに靴を弔い以後自由

牛尾 緑良

長いサラリーマン人生でした。「以後自由」な生活に乾杯します。「PHP」の別冊「ほんとうの時代」に僕は「5つのキーワードで探る『定年後の愉しみ』」を書いたことがあります。①遊ぶ、②楽しむ、③交わる、④

尽くす、⑤学ぶ、の五つです。人生は学習期、勤労期、休息期に大別されます。休息期最大の喜びは、時間を自由裁量できる主人公になったことです。緑良さんもその境涯です。(「上方芸能」誌発行人)

# 自選集

小島蘭幸

一生懸命なのです笑つてくれますか  
夫婦きりになった隙だらけになった  
妖精を見たとき金メダルが笑う  
晩年の父の隙だらけを愛す  
わたくしの匂いになつてきた書齋

都倉求芽

瀬を渡る足はずませて水しぶき  
まちづくり地元認定第一号  
ご発言一切なしで酒が待つ  
夏祭金魚が仰ぐ雲の峰  
長生きの薬曾孫宇宙語の電話

土橋螢

仕事せぬ輩が文句ばかり言う  
茄子の花咲くあやまちがないように  
ボランティアする人金が欲しいひと  
七十を過ぎても恋は恋だろう  
人間だから恥ずかしい事もある

西出楓楽

天と地を行ったり来たりする昼寝  
いい人と勘違いした聞き上手  
大阪から文化が消えてしまいう  
それも言うならアデューよりオーボワール  
ムッシュユーと呼びたいような人に会う

仁部四郎

順序よくバスが来たので起きてた子  
瞑想の順序を乱す腹時計  
不況だが歳の順です定年日  
くじを引く順から運は動いてる  
順番は明日かもしれないろは経

波多野五楽庵

根も葉もない噂話にまどわされ  
みつまたやみな項垂れて花盛り  
海堂の花のうつつやおぼろ月  
老いの背になんと日陰の軽はずみ  
エプロンに包み夕陽を持ち帰る

林 瑞 枝

ロマンの絵をわが心臓の音で彫る  
蛭たち棲む川で見上げる杉木立  
枕から祭り御輿が眠らせぬ  
弥陀の手が笑顔で歌う眼に振られ  
迂闊には出れぬ優しい傘にいる

前 たもつ

見ぬふりの大人見ている子のしつけ  
時々は回れ右して視野変える  
踏み出せば風も味方をしてくれる  
一頭たりとも見捨てたりはせぬ羊飼  
罪いくつ積んで聖書に辿り着き

政 岡 未延子

半分は味方と思う甘い読み  
企みも私も眠る年齢になり  
満月の声は誰にも届いていない  
どう化けようと今の素顔が私です  
ようこそようこそ母の口癖だった頃

三 宅 保 州

番組も薄さも軽薄なテレビ  
画素数を競って遠くなるカメラ  
免許証不要のクルマなら乗ろう  
通話もできますと書いてあるスマホ  
一円貨よりも薄っぺらい電池

宮 西 弥 生

老いという鏡ゆつくりまた早く  
カーテンを開けては閉める夏の陣  
阿呆なりにヘソを曲げてる一本気  
ロッキングチェアたしかな風と戯れる  
深入りのきつかけとなる攻めのこつ

盆の客 八 木 千 代

たましいの客は十萬億土から  
憑かれたように仏に尽くす盆三日  
来たものは去ぬると送り火のけむり  
鬼灯はカサリと濁れて今も朱に  
片付けた広さに風が吹き募る

八十田 洞 庵

五百羅漢香華の中のいいお顔  
草の根を分けても探そ一揆の血  
背のびする男に助言聞こえない  
そそと泣く女の涙演技かも  
匠の汗にそびえる塔の夢がある

両 川 洋 々

干からびた愛をチンしてみましようか  
人生の迂回は俺の辞書にない  
生き様の一句を吐いて俺は逝く  
解凍をするこの愛ふやけ出す  
破調句のような生き様それが僕

板尾 岳人

父と母混ぜて生れて育てられ  
月光の灯りを借りて読むマンガ  
過去未来混ぜて味わうゆで卵  
ほつれ髪あのひとだった戎橋  
ふる里に続く廊下に頭がい骨

奥田 みつ子

どの国も招かざる客放射能  
贅肉も見栄もすつきり落とす旅  
親切が過ぎて時々お節介  
世の移り孔子の教えまでマンガ  
空がきれい生きてゆく価値ありそう

河井 庸佑

ずけずけと言うが憎まらない男  
言う程に動けぬ体自覚する  
それとなく優先席を立つ善意  
穏やかに断るこつを模索する  
さりげなくやがて働く駒を打つ

川上 大輪

遠近両用未来も過去もよく見える  
時計草はまだアナログのままである  
年金ではつきりしない虹の色  
答えなど書いてはいない父の背な  
ばみゆばみゆと一度も言えた事がない

木村 あきら

号笛も高らか瀬戸の観光船  
北を指し決して妥協せぬ磁石  
断崖の雨は下から降って来る  
川柳の奥の細道句碑並ぶ  
上昇気流のつてさわやか奴風

小西 雄々

足早に秋の感触下駄で知る  
頬杖に名案もない長い夜  
甘えたい人はささやいてはくれぬ  
仰ぎ見るスカイツリーの灯がうるむ  
日日多忙銭にはならぬことばかり

斉藤 効

美しいお別れでした花しずく  
チームワークなら負けぬ子の野球帽  
ひまわりの迷路で明日を模索する  
飛んで来た種裏庭で花をつけ  
朝露のまんましあわせ丸かじり

塩満 敏

五輪済み甲子園も済み静かです  
熊蟬も燕も居なくなりました  
妻の庭収穫時で忙しい  
大阪の鶴杉句碑飾りたい  
念願の墓参の準備始めよう

新家完司

ごはんですようと鎖が手繰られる  
ぬるま湯に培養される皮下脂肪  
現状に満足ですという欠伸  
褒め言葉だけを反芻する涎  
ばんやりと何かいいこと待っている

恒松町紅

バツイチの印が顔に書いてある  
どんな席だろうと子供よく食べる  
飲んで食べ話は尽きぬ夏の空  
いい返事もらつた夜はよく眠れ  
大正の記憶で仰ぐ暑い空

津守柳伸

信号が点滅すると走る癖  
運命を変えるナイトにまだ逢えぬ  
ぬるま湯の暮らしへ風が吹き抜ける  
クーラーを使わぬ意地へ水を差す  
頂上の風さわやかに雲流る

遠山可住

金メダルの涙の中に母が居る  
癌で死なず熱中症のあほらしき  
飲酒運転泊って行けと酌いでくれ  
そう聞けばそうとも見える芸術画  
大吉へ他所のお祝い事ばかり

温故知新

『清水白柳遺句集』より

道聞けば女ひとり身構える  
金槌のマジナイでよし釘を踏み  
ひとたびは風に逆ろうように佇ち  
手の甲の働く筋を見つめた  
喧嘩して出ても信号だけは待ち  
外はみな河内弁なり風薫る  
ゴミ箱へ捨てたつぼみが咲きかかり  
窓口は抗議に馴れた裁きよう  
たばこやへ傘を持たない宵の雨  
灯を消してから伝言を思い出し  
陽が落ちてからの孤独をパチンコ屋  
長生きが母系に多い祝膳  
リベートを秘書の名前で領取し  
冗談がうまくて軽く見られたり  
政治家の眼に空腹がうつらない  
大和路で壁画に飽きる女連れ  
久しぶりやつぱり過去にふれたがり  
気にさわることだけ言うて女去り



西 出 楓 楽 選

宿毛市 増田 純子

本能のおもむくままに來たら海

少子化の国のいじめと虐待と

日本へ誰が宣告する余命

許さない許す金魚の尾が揺れる

雨あがる心の鬼と和解して

しあわせを祈る敵にも味方にも

松山市 神野 きつこ

太陽と仲良し茄子の黒光り

蟬しぐれ水を欲しがる石地藏

一人旅入道雲を追いかける

仏さん内緒話を聞いている

坊さんが袈裟をなびかせ去ってゆく

五十三職安の椅子慣れてない

貝塚市 吉道 あかね

快眠快食化粧のノリも上々だ

どの部屋も大体合っている時計

体温も同じになったルビー婚

なんとかなるでなんとかなって來たふたり

家族写真ふたりの位置は同じまま

色サイズ交換とあるプレゼント

和歌山市 北原 昭枝

つややかな話もあつた茄子の色

ふところへ思い思いの石を抱く

それなりの暮しを守る蜘蛛の糸

もう会えぬひとだと思ふ駅の風

見上げれば銀河の中に父や母

ふる里の川を渡つて墓まいり

大阪市 高杉 力

定年の強みライヴで観る五輪

台所の母の背中に今日の愚痴

寄せる波の力も借りてプロポーズ

ガイド本読み過ぎ旅がつまらない

恋一つ生まれぬものか俄か雨

青いとこ少し残したままで老い

松江市 山根邦代

猛暑にて働きものは洗濯機

オリンピック爽快やさにも応援し

笑い合うその内心丸くなる

一本道だから迷いが邪魔をする

正座して平和宣言聞いてます

笑顔には人を和ます魔法あり

竹原市 土井輝恵

生き方も線香花火後がない

延命治療するかしないか念押され

遺言を書いて置こうか誕生日

アンケート一人で電車乗れますか

間違ってたかった恋を半世紀

クレヨンの花火の絵から音聴こゆ

河内長野市 大島友子

いつそのこと憎めば気持ち救われる

知らぬ間の後押し気づく温かさ

バスツアー熟女パワーが盛り上げる

ごまかせぬ携帯履歴という踏み絵

自慢です気は利かないが鼻は利く

夕空の雲ステッキカコロッケか

竹原市 國實力

お誘いはコーヒーお帰りは深夜

試食品フンフン買うのやめました

真ん中に飾る写真は息止めて

子沢山どの子も得意な割り算

率直に詫げる茶が出る菓子が出る

よく続いたねどちらも勇気なかったの

京都市 清水英旺

猛暑日に吹く涼風はかもめーる

夏風邪がつけこんできた気の隙間

次の次のオピンピックも見るつもり

キスしたくなる水蜜の肌ざわり

女房流のゴーヤチャンプル暑気払う

猛暑日にチョコ一片の元気づけ

和歌山県 森下よりこ

油照りばかりじゃないよ風うごく

いつまでも私の中の青い思慕

鶏頭の重い手ごたえ抱いて夏

国民のためなどという白々し

夏百合が咲きましたよと墓まいり

オリンピックで眺める世界のいい男

神戸市 能勢利子

簡単な漢字忘れて電子辞書

お供えは私好みの旬の味

友達の長所見つけるのが得意

保育園ママが帰れば泣き止む子

観光地トイレで分かるお国柄

長過ぎて叱った理由忘れてる

神戸市 長 川 哲 夫

尼崎市 小 池 幸 子

ブルカ脱ぎ捨て五輪の街で何を見た  
サポーター敗者の汗を拭い切る

絶頂の真ん中辺で抱く疑惑

盆栽の一枝ごとに父の型

八月はもう秋という稲の花

神戸市 木 村 忠 義

どうしても寡黙の人になる酷暑

植木たち多量の水を一気飲み

忘れ物暑さの所為にしてしまう

参拝をよくする人が神は好き

運不運半半と見て我慢する

神戸市 興 水 弘

怒鳴るクセいつしか萎えてつぶやきに

妻のメモ字数が減つて指図だけ

悩みです福耳なのに諭吉来ず

亡父の歳越えて叱咤が懐かしい

人情の温みを糧に生きている

神戸市 山 根 弘 子

才能を生かす宇宙は無限大

反抗期叱ったあとで抱きしめる

叱るより褒めて育てた母の智恵

古希の坂遊びなさいと叱られる

耳遠くいいことだけを聞いている

恒例の暑さ対策寝ごき敷く

坪庭は私の趣味を生かすところ

巣を張つて蜘蛛は何時まで待つのかな

敷くイ草いやしの香り夏の友

手抜きする老いの食事をコンビニへ

三田市 雑 賀 一 泉

生レバのビクビク感も味のうち

オマルでも殿の持物文化財

のほほんを夢見た余生どうも変

今日もまたケーキに負けたダイエツト

老いた母かばつた自分骨を折る

宝塚市 丸 山 孔 一

会話みな親指でする現代児

ペット病み保険のきかぬ治療する

雨降つて地固まらず土砂崩れ

人類が地球の資源食い尽くす

その時が来るのかノアの宇宙船

西宮市 泉 水 冴 子

考えがまとまらなくて横になる

スイッチオン作句モードに切り替える

鳴きやまぬセミと私の耳鳴りと

お静かになさい只今思案中

さっぱりと散髪してお犬様



紀の川市 楠原 富子

倉吉市 中村 毅

二者択一後悔せぬと決めた道  
巢立つ子に母が送ったブーメラン  
身構えて夏を乗り切るゴーヤ棚  
折れるのは何時も私のストーリー  
生き甲斐に自分磨きの旅に出る

紀の川市 辻内 次根

氣を病んでブツダのような肋骨  
アルミ缶ばかりたまっている袋  
体調の今日はラップの切れ具合  
米研いでびたりと決める水の量  
温暖化らしい鉢植えみな枯らす

田辺市 大峠 可動

秋の空一碧にして遠い郷  
点線の点は七坂越えた跡  
蟻の列むかし昔の民に似て  
稲光り斜影を斬って地に刺さり  
雲が湧く紀伊半島を的にして

倉吉市 岡崎 美知江

ありがとうの言葉がつなぐ和の秘訣  
輪の中で軸を磨いて耐えている  
豊かでも病める時でも妻が軸  
人間の五感を包む森林浴  
繕った野良着案山子も来ていない

お叱りはごもつともだと民主党  
年ごとに頭も腰も硬くなり  
真ん中を歩くと二倍疲れます  
もうだめだ過労死前と扇風機  
嘘が下手そんな貴方に惚れました

倉吉市 堀 かずこ

新築の我が家の門が家族待つ  
うまいこと抜け道捜し言い逃れ  
陽がのぼる今日もいい事ありそうだ  
彼の顔カバーに書いた日記帳  
鳴き声がどこかさみしい蝉しぐれ

米子市 生田 寒之

同窓会ポニーテールの顔捜す  
友の名も校歌寮歌もうろ覚え  
去年より猛暑ひときわ老い進む  
本堂に椅子が並ぶも高齢化  
スカウトをスカウトしたいタイガース

米子市 田村 周子

年月に鍛え抜かれた丸い人  
青春の破れた窓はシャボン玉  
偉い人よ民の財布は空財布  
猛暑中日陰えらんでお買物  
メダリストやつぱいい顔しているよ

米子市 野川 宣子

イメージが膨れて甘い夢を見る  
辛抱を教えた母は偉かった  
父さんが一番偉いボーマス日  
遊ぶこと覚えた女神いそいそと  
遊び球見せてその気を逸らす人

米子市 湯浅 久司

打ち水のような夕立待ち焦がれ  
いいことがなかった今日は早く寝る  
浴びるほど飲んだお酒に仕置され  
夢のない夢をよく見る熱帯夜  
足元の草が明日へ根を伸ばす

鳥取県 下田 茂登子

警察も悪事働く怖い世だ  
認知合格免許更新八十路坂  
下手な言い訳疑惑ますます呼んでいる  
暑いのに冷房つけぬ老夫婦  
この猛暑一句が出来ぬもどかしさ

鳥取県 橋谷 静江

笑ってはいるが心に棘がで  
笑顔だけ映る鏡をさがして  
暑さには負けた体が悲鳴あげ  
孫が来て心の窓を明けてくれ  
私より雨を欲しがる畑野菜

松江市 藤井 寿代

糊代ぐらいの窓です燃えてます  
食欲に女を生きたピンヒール  
あかんたれ上書き保存くり返す  
口角を上げて10歳若返る  
盆栽の松笑つてもいいんだよ

出雲市 黒目 英男

十七音を紡いで切磋琢磨する  
見返りを求めず仕事精を出す  
我が思い世界に向けて送りたい  
戦争は二度としないと誓う夏  
鐘の音に平和を願い祈つて

雲南市 菅田 かつ子

ぐち聞いている間に解ける氷水  
総入歯はずし昼寝の涼しそう  
皆無口きつと暑さのせいだろう  
ほっとして急にお腹の空いてくる  
福耳の近頃増えたひとり言

岡山市 工藤 千代子

目の舌も箸も踊った宿の膳  
母に似たお地藏さまと会えた旅  
切り札にならぬジョーカーだつてある  
微罪抱き遠くに置いてある聖書  
時効などないあの日の夏の雲

岡山市 永見心咲

待つ人はいないBGMを聴く  
会釈して笑みまで添えて名が出ない  
律儀にもとうもろこしは前へ做え  
通帳の下五ケタだけ自由です  
ディナーショー料理は記憶ありません

岡山市 藤成操江

ていねいな言葉で軽く躲される  
助走するあきらめきれぬ灯を追うて  
言い訳はしない黙って遠ざかる  
大波小波凌ぎ平らな現在地  
花も実もつけたかろうに草を抜く

瀬戸内市 東槇ますみ

一人寝の枕で蝉が鳴いている  
せせらぎも激流もあり遠い海  
扇風機の動く範囲の居る自由  
雨止んで夫婦茶碗もとの位置  
棘のある言葉拾うて不眠症

広島市 岸本清

子供らの怖さを知らぬ好奇心  
応対の上手な方がパートです  
言い訳の長口上は聞き流す  
その内に何とかなると昼寝する  
踏まれても可愛い娘なら痛くない

竹原市 若年幸子

フルムーンは火星ですよねお父さん  
オスブレイ鴉のように並ぶ基地  
アルバムの私を孫が信じない  
そんなこんなで四歳に言い負ける  
倅せは今とも思う皆達者

山口市 中前幸子

潮騒の夜が描いた洒落た戯画  
マイナスイオンところが少し透明に  
生命線消えたあたりに虹が立つ  
ひとりの祭りへよく似合う赤ワイン  
葦原の夕陽詩人にしてくれる

今治市 渡邊伊津志

口二つ耳は一つの人が増え  
出会いこそ老残の身の道標  
頷いて同意したとは限るまい  
節電がムードを創る夜のカフェ  
手答えが明日のイメージ掻き立てる

大洲市 花岡順子

鍋はびかびかストレスは晴れなんだ  
コンセント抜いて図書館でも行こう  
塗りたてのペンキに迂闊笑われる  
節電へ襲い掛かってくる猛暑  
ロンドンか甲子園かと迷う夏

香南市 桑名孝雄

生きている証に日記つけている  
敬老会先輩面が板につく  
断捨離の決意馬謖も斬って捨て  
婚五十いまさらケチもつけにくい  
合コンだろか他所の燕も来て乱舞

北九州市 小松紀子

憂うなかれ明日は明日の風がふく  
私の好きな言葉は感謝です  
両親のいないふるさと遠くなる  
月末のときめき塔誌待ちこれが  
脱原発昔の暮しもどうか

唐津市 北村松風

観光の目玉と浜の地引き網  
閻魔様お待ちください多忙です  
添乗の旗が急がす老いの足  
休肝日ふえてのれんのママ悲し  
観光の馬車がのんびりお湯の町

佐賀県 真島久美子

深呼吸みんな誰かの所有物  
動脈に近いところで人を乞う  
足音を消して切取線越える  
独り言が私のすべてだと思ふ  
おんな対オナナ諦めるバズル

シドニー 坂上り子

飛んで行って電話に手伸ばしたら切れ  
人殺すニュースない日がない憂い  
雲が割れ光待ってたように射る  
娘の定年待つかのように母呆ける  
湯にひたり冷たい雨を聞く至福

札幌市 佐藤登美子

真夏日が続き五体も干涸びる  
オリンピック国の面子の金メダル  
自慢げに失敗談を誇張する  
三叉路で迷子になった古希の影  
海水浴今が旬です西瓜わり

東京都 井上つよし

国益が火花を散らす世界地図  
メダル嚙んで夢ではないと確める  
表彰台の真ん中に立つ晴れ姿  
難題をぶつけて試すド根性  
建前が義理人情に音をあげる

横浜市 川島良子

やるだけはやつたと顔に書いてある  
私にも宿題があり夏休み  
メダルラッシュ寝てる暇ない夏休み  
豪快な笑いを下げて義兄逝く  
鏡台に笑顔足りぬと叱られる

佐渡市 高野不二

年金があるから座る場所がある  
お祭りの子役をよそへ借りに行く  
ふりがながないと読めない新生児  
わが子ではないがいじめに腹が立つ  
強くなつた女房に黙り込むばかり

富山市 有澤嘉晃

それぞれの芽生えそれぞれ自分色  
七十年かけて仕上げた笑い皺  
この辻を曲がり昔へ会いに行く  
捨てる物捨てて心を軽くする  
ここだけの話をこぼす酒の席

熱海市 三谷圭角

過ぎし日の転けた事のみ想い出す  
周りビルお宮の松も侘しげに  
常連の顔が並んだ特売日  
花火の日ホテルの窓も灯がともし  
鳶が舞い二羽の鴉があとを追う

豊橋市 藤田千休

ゴールドの夢を見ている仮免許  
草食系恋のセンサー故障中  
死角ほど監視カメラが見てござる  
グラビアを老眼鏡が舐めまわす  
酸欠の日本に欲しい設計図

大阪市 栃尾奏子

衣食住足りて愛する人も居る  
玄関で待つかえりと言いたくて  
言葉には出来ぬがわかり合っている  
もみじの手何てうれしい半分こ  
幸せはここに西瓜を切り分ける

大阪市 前川善之

一兵卒も袂分かつてば党主なり  
残された人生かす一万歩  
一芸に秀でる人はオーラ見え  
国力が落ちて睨みも伝わらず  
栈敷席馴染み客が陣を取り

池田市 上山堅坊

惚けてるよ騙されるなという息子  
饒舌に情けの薄さ透けている  
見とれると気取る美人の高い鼻  
人生のドラマを演じ合う句会  
あの世まで持つて行きたい惚れ病

池田市 多田契子

鏡には母似の顔が見えかくれ  
だとしても棄権はしない見張つてる  
アメリカに安心買った筈の国  
雲一つ浮いて平和のありがたさ  
浴衣着て巻き戻してる夏の恋

草食男子料理にはまりお弁当

泉大津市 助川 和美

深い皺平和を願ひ鶴折る手

サンダルに素足べたつく夏の海

ハルシオン二錠で寝つく熱帯夜

家内別居冷房好きといやな夫

泉佐野市 稲葉 洋

秋の蚊も切羽詰まっているようだ

比喩暗喩流れる星は誰だろう

脱風流月出る前に酔っ払い

桁外れの気象で芭蕉さん絶句

パンと麵瑞穂の国の台所

河内長野市 藤塚 克三

おっとりが詰め放題は牙を剥く

女医さんの名前梅ちゃん治りそう

領海内睨みが利かずほじくられ

痩せ我慢意地つ張りなら御手の物

増税に飲み食い減らし医者いらす

河内長野市 穂口 正子

さつささつき月日が飛ぶよ後方に

あの時は夢と希望に溢れてた

本音吐きなんと気分のこと

安ッアーお土産ばかり買いに行き

同窓会数値忘れて進む酒

美食家を気取り茶漬けが到着地

岸和田市 中岡 香代

全身のパーツが緩む更年期

ちぐはぐな性格だからうまくいき

ライバルの歩いた道に赤い花

ロボットのおんぶに抱っこ近未来

岸和田市 増田 隆昭

五輪なら国が一つになれるのに

無念さがちよつぱり交じる銀メダル

炎天でも行かねばならぬ義理の葬

伝言板すっかり消えたターミナル

孫達に総理になれと言わぬ

岸和田市 宮野 みつ江

すつぴんでいたいのが恐れ紫外線

内情を知らぬ他所様姦しい

ワンテンポおいて見直す子との距離

恐いものなかつた若さ懐かしむ

立ち読みし夕餉に作るタニタ食

堺市 近藤 治子

蟬時雨せいっぱいの応援歌

省エネに風鈴団扇顔を出す

カラオケで調子はずれが和ませる

調子出た頃に終ったお手伝い

ラジオ好き浜村淳の名調子

堺市 羽田野 洋介

只今つと弾んだ声はいい知らせ  
ムリヤリに笑顔求めてハイチーズ  
今日の予定朝の鏡と打合せ  
洗濯が一杯あると妻元氣  
真つ先に拍手するのはさくらかも

高槻市 原 洋志

自転車とスカート風は演出家  
別の人見ている彼のサングラス  
黄泉路までワンメーターで行つてくれ  
花火果て天と地の闇一つにす  
常温で喜怒哀楽を温める

豊中市 荒巻 夢

飴玉の甘さしみじみ敗戦忌  
天国の母へと繋ぐ糸電話  
大声で泣き喚く子の健やかさ  
蟬しぐれ友の急逝知った朝  
年重ね神事へ戻る夏祭り

豊中市 池田 純子

満月が金のメダルに見えた夏  
猛暑にて節電モードオフにする  
ふる里よ星降る夜は健在か  
何げない仕草をコピー母娘だね  
砂の城波と遊んで消えてゆく

豊中市 源田 啓生

つぶらな目に燃える若葉が映つてた  
昼の月見上げる余裕まだあつた  
行く度にいつも混んでた映画館  
シーンに泣く嗚呼青春のエピローグ  
新刊の柳誌開けば風を呼ぶ

富田林市 関 よしみ

アナログが葬っている家の中  
堅物がいつもふんわり炊くご飯  
湯加減は今日も亡夫に合わせてる  
ひたすらに里の小川へ泳ぎ切る  
秋の野にゆっくり流れゆくドラマ

富田林市 山野 寿之

耳打ちをされたら口がむず痒い  
両の手で煩惱そつと包み込む  
私の記憶ときどき神隠し  
なるほどの父の楔が効いている  
三面鏡今日の仮面を探してる

寝屋川市 岡本 勲

病院のハシゴで足腰鍛えてる  
生きる欲しつかり抱いて闊歩する  
笑顔にも松竹梅があると知り  
押しのきかぬリーダーに泣くサプリーダー  
本棚は俺が掃除と言つてある

寝屋川市 鈴木 楽らう鬼き

立つ位置を変えると黒が白になる

大切な子だから谷に突き落す

恥じらいの女性の仕草にある気品

芯抜いて風に任せて生きる老い

素直な日等身大で生きている

箕面市 酒井 紀子

白ぬりの玉三郎に胸さわぐ

雨上る庭のみどりが走りだす

貼り変えた障子の白さ母想う

白黒の写真の中に母の笑み

チャンネルはサブリース込み賑わしい

箕面市 寺井 柳童

脱原発越前くらげ抗議デモ

ロスタイム勝利の女神そつぽ向く

ステコが市民権得たエコライフ

溜池にバスのコーラス牛蛙

意地悪い質疑に総理肅々と

八尾市 前田 紀雄

金と暇有るが体力限界だ

男尊女卑オリンピックで逆転す

節電で一日二回シャワー浴び

淋しいネ松井ゴジラが火を吹かぬ

ひめゆりの津島恵子も千の風

八尾市 山根 妙子

名の通りうなぎのぼりの土用丑

予報士の駄洒落にいつも点をつけ

様々なドラマがあつて五輪燃え

くどいけど母の言葉が糧になる

不眠です言つて座れば寝てる人

大阪府 石田 ひろ子

夏バテにエールを呉れる冷素麺

余世では無い新世として聞く道

メカに強い嫁が頼りのデジタル化

超ミニの冷やひやさせる老婆心

落ち込んだ時は読書という薬

大阪府 小栢 こずえ

どの人が恩師か古稀のクラス会

おしゃべりが泉のごとくクラス会

だれにでも似合う笑顔を忘れかけ

今日もまたお願いばかり墓洗う

昼寝からさめて夢からまださめず

大阪府 神野 千恵子

酒を飲む理由そんなのありません

焼酎もワインも同じ顔で飲み

効能を信じる他はない薬

熱中症ならないコツを蟻に訊く

煮崩れをしているような永田町



神戸市 大島 まさる

わらべ歌亡母に添い寝か夢うつつ  
幸せという朝ねがいティーバッグ  
八月は歴史の秘話のページ繰り  
しんどいな同窓生の名のおぼろ

神戸市 玄 番 美恵子

躰きが転機となつて知る情け  
深い愛もらう介護の車椅子  
良い事は聞えてました遠い耳  
明日に向く被災地の空美しい

加東市 岩 本 美緒子

わたくしを少しは飾る短冊画  
とうもろこし挽ぐ体験の西はりま  
南光のひまわりに圧倒される  
鳥羽繫くような零秒競泳差

加東市 黒 崎 美紗子

行く先で何回も会う同じ人  
朝のうち用すませたい暑い中  
勤務ぶりみとめられての出張か  
熱中症と記事には出ないよう生きる

川西市 日野岡 和 之

泣いただけ笑う日来るよ被災の地  
どつと降りからりと晴れて男梅雨  
梅雨晴れ間ブルーいっぱいかつぱの児  
子等へ継ぐ天地の恵み玉の汗

健やかに老いてゆくとはきれいごと

川西市 山口 不動

蝉鳴いてテレビの音を高くする  
賑やかな頭上注意のツバメの巣  
イチローに白鵬に來た曲がり角

篠山市 石 田 久 子

教わつて自家産胡瓜福神漬け  
節電がチャンス彼女の手を握り  
いじめには先生ずばりと物申せ  
滑らかな医者の口調にホツとする

篠山市 北 澤 稠 民

住職の説教終わり目が覚める  
ああしんどこれで何回言つたかな  
荒れた手にお疲れさんといったわりを  
シルバーに人気の医者はお上手

篠山市 酒 井 健 二

北朝鮮昔の日本によく似てる  
一歩先一秒先は神の域  
虫知らせ里へ帰るとお葬式  
取り逃がすムカデに部屋を明け渡す

篠山市 佐々木 勇

さりげない言葉に咲いたバラの花  
雑音に惑わず余生マイペース  
平凡な暮らしの中にある歩幅  
禁煙に体重計が忙しい

篠山市 谷 田 多美子

今朝も晴れ整骨院へ行きましょう  
お早うさん深呼吸して梅雨明け  
永田町揉めて税金無駄遣い  
無事巣立つ隣りの燕見届ける

篠山市 藤 井 美智子

好きだよと言ったお人は千の風  
百歳と古希と老犬肩寄せて  
宅急便孫の笑顔が見えてくる  
アドバイスずばり親友なればこそ

三田市 辻 開 子

玄関に一輪生けて客を待つ  
胸の内猪口一口でぼろり出す  
あれこれのサービス受けて丸く生き  
寝不足も歳も忘れて見る五輪

西宮市 株 元 玲 子

オリンピック聖火輪になり感無量  
地球が燃えている天も地も人も  
熱帯夜氷ほおぼり目を瞑る  
医者と友だちと笑う顔切ない

三木市 山 口 久 子

爪楊枝細い乍らも役目あり  
夏料理ソーメン流しにぎやかに  
苦言にも心開いて耳かして  
過ちを言訳しすぎ失敗し

奈良県 谷 川 憲

被災地の重い声聞く濃い時間  
弱音吐き変わり目を待つしたたかさ  
かたじけないと言う日本の良さ消え  
法案が骨抜きになる会期末

奈良市 前 田 弘 恵

手抜きせず努力してます独り食  
豚丼が代り務める土用丑  
子育てに見習い多き鳥社会  
立党と壊しを返す時の人

奈良市 尾 畑 なを江

忘れたところに顔を出す忘れもの  
期待させがっかりさせる体重計  
サングラス畑仕事の友となり  
言訳はつい早口になって来る

和歌山市 磯 部 義 雄

ふるさとが丸ごと届くお中元  
節電へフル回転の扇風機  
打ち水が効いてひんやり窓の風  
毎定時帰宅の夫疎ましい

和歌山市 坂 部 かずみ

太陽のひかりを食べるプチトマト  
蜘蛛の糸今日の命を待ち伏せる  
保冷剤体に張って秋を待つ  
独り言増えて亡母と会話中

和歌山市 平田元三

子沢山古着が順に下りて来る

減食中練歯磨の味がよい

芸人は迂闊演じて笑い取る

目覚め二時本が夜長の相手する

岩出市 村中悦男

朝から猛暑ボリュームあげる油蟬

すりへった靴底嬉し達者です

介護保険払う見返りほしくない

休日は勤め以上にババ疲れ

田辺市 小川イセ

舞い扇鉾にかえはや五十年

全快に千羽の鶴も舞いはじめ

栄転へ単身赴任という皮肉

白黒を量しまあるく三世代

鳥取市 大前安子

ビール泡ストレス抱え喉通る

よく見れば癖のかたまり二人共

単純も複雑も吞む大欠伸

猛暑日をあきらめて飲むコップ水

鳥取市 近藤秋星

なでしこジャパン五輪で初の銀メダル

競泳の熱き友愛銀メダル

鳥取へ来なんせしやんしやん傘が舞う

新名所砂丘に砂の美術館

鳥取市 坂本とも湖

学校の苛め先生なぜ隠す

介護の老母抱く喜びがドラマです

野暮つたい君の話は肩がこり

熱帯夜二日つづいた寝不足だ

鳥取市 津村律子

青田の上を燕返しのスーイスイ

池中を子孫を残す白い泡

池に春錦の稚魚が群をなす

迎え灯たいて西国嘶語り合う

倉吉市 田中紀美恵

亡き柳友過去の人にはしたくない

水面に石投げ入れて戯れる

天の川母と二人で渡ろうか

変り映えしないがちよつと厚化粧

倉吉市 前田喜美子

野暮な服逆手にとつて着る若さ

一兵卒に徹する口が今党首

死亡欄ほのかに思い抱いた人

マイホーム飾りのように小さな窓

境港市 中井虎尾

八月は戦さの昭和思い出す

民の目は五輪永田は乱れ劇

朝顔も天下取りたいいつももあり

暑くても冬を思えば夏がいい

米子市 池岡 たけし

夕餉どき盥の水浴び懐かしい  
照りつけて裏通りには風もなく  
また一人幼馴染が先急ぎ  
この暑さ五尺に体どこに置く

米子市 加藤 正二

要る物は何もなくてだ命だけ  
この暑さ手加減たのむ八十路  
熱帯夜泥棒きても開けて待つ  
猛暑でも柱時計は時を打つ

米子市 後藤 宏之

ほめられて俄然ファイトが湧いてくる  
ギリギリでないとなかなか手につかず  
毎日が白紙のままの予定表  
この暑さみんなの顔がゆがみ出す

米子市 見山 温子

里山を飲みこむように霧が湧く  
断捨離は無縁拾つてまたしまう  
言わ猿になる誓いはすぐ破れてる  
祭りずし母の味には届かない

鳥取県 飯野 菖子

米になる苗は生き生き陽に光る  
苦くても私の好きなゴーヤです  
チョッピリとはやしたヒゲがシンボルド  
名水も豊かな雨の妖精か

鳥取県 大塚 美代子

宇宙まで届けと花火打ち上げる  
石地蔵遠回りして花を挿す  
笹舟を作り走ったランドセル  
仕事した証しを見せる指のタコ

鳥取県 岡村 孝明

猛暑続き八十路の爺は読書する  
チラシ並べ裏方苦勞思いやる  
師の筆をまねるが色が生きて来ぬ  
老いた父ばけ防止にとポチまかせ

鳥取県 田口 清帆

食足りて今日の感謝の箸を置く  
いよいよの出番ゆつくり眼鏡拭く  
あれこれと思いが加速する余生  
肩もんでほしい程度の絆です

鳥取県 吉野 いさお

復興に必要悪の原子力  
オアシスの実家に妻は行ったきり  
濁つたら勢いの出る雑魚の群れ  
ご先祖を人質に取る寺の布施

松江市 相見 柳歩

点数をもらえた頃は楽だった  
光らせる自分に投げる言葉こそ  
青春の大きな夢が走りだす  
来世でも青い地球に住む予定

松江市 武島 ちよえ

初対面馴れぬ敬語に舌を噛み  
ジープの破れ具合が涼しそう  
アスファルト土の感触忘れかけ  
約束が重たくなった今日のウツ

安来市 原 煩惱児

故郷に蛍が消えた淋しさよ  
含羞草施設の老婆いい笑顔  
七夕へ願いごともう無くなった  
独居爺の話し相手に蚊も愛し

岡山市 前田 恵美子

オルゴール聞けば心はお姫様  
病む友へ早く良くなり遊ぼうよ  
夏休みサイフ閉じずにあちこちへ  
蟬の声頭を染めて盆がくる

備前市 森 ふみか

1<sup>リットル</sup>の汗で稼いだコップ酒  
空遙か羽化した羽に宿る露  
捨てて来た筈の涙に尾行され  
大輪の陰で抜かれた草あまた

竹原市 六田 半徳

ホッチキス玉切れとなり小休止  
自画像の額に皺をもう一つ  
キュリオシティ火星の命事始め  
ロンドンの五輪終了次の夢

宇部市 高山 清子

褒め言葉探して若い芽を伸ばす  
下心かくし笑顔で寄つて来る  
さりげなく一般論にして返事  
建前を捨てたら肩が楽になり

高知市 三谷 待太郎

どうみてもユルフン列島気概死語  
猛暑だゾ原発稼働のおまけつき  
オスプレイどうでも飛べて落ちもする  
庭狭く蟬も激しく切ながり

福岡県 本田 さくら

原発はいらない列にわたくしも  
梅ちゃんのドジさわたしもどこか似る  
せつかなコスモス畦に咲き急ぐ  
ロンドンに努力の花が咲き誇る

佐賀市 清水 園實

来年は孫入学で籬をしめ  
眼前で障害者見て知る健康  
おもいやりいつでもほしい処世術  
日曜日笑点を見て笑い出す

唐津市 岩崎 實

バラ活けて部屋生き生きと二三日  
早朝の電線つばめ勢揃い  
蝶とんぼ庭の見回りおこたらず  
何もかもわかったような遠い耳

唐津市 吉 富 節 子

塩竈市 木 田 比呂朗

言訳を考えるより謝ろう

これしきが出来なくなつた歳を知る

夏ばてを知らぬ蔦の葉羨まし

屋上で淋しく花火独り占め

山鹿市 三 谷 たん吉

戦前の生めよ増やせよもう一度

嫁に行き子供育てる人に礼

金銀にこだわる五輪見る気なし

負けていい明るく笑つて帰つてこい

山鹿市 米加田 恭 代

珍しくほめる言葉はほめ殺し

持たされて心地良いもの花お世辞

はしよりも重いもの持ち苦労する

花よりも団子作つて設計図

弘前市 高 森 一 吞

親不幸盂蘭盆だけの墓もうで

酒好きな亡父へ供えるワンカップ

一族が列をなして墓参り

迎え火に新たな先祖入れておく

弘前市 肥 後 和香子

自分史のページに待つたをかけて夏

ひまわりも私を好きでいて下さい

秘密めく朝を泳いできたレモン

わたくしの空気清浄器はあなた

願いごと止めにしようか神無月

駅前で選挙のように赤い羽根

紺碧の空に合わせる白いシャツ

積ん読がノルマのように伸び掛かる

福島県 七ツ森 客 山

広辞苑枕ピツタリ夏の夜

紫陽花園贅沢ですぬ蛇の目傘

ムクゲ咲く亡母を迎えているような

この村の空気を運ぶ定期バス

東京都 大 竹 一 良

風鈴と左団扇で右ジョッキ

古文書を開いて眠る夏の夜

物好きと言われた遊び生きる糧

聞き飽きた検討します常とう語

東京都 高 岡 弥 生

感動が伝わる五輪ありがとう

今度こそ負けず嫌いに生まれない

こだわりは人に強制しちゃダメよ

たまにいる休日誰も相手せず

相模原市 赤 木 妙 子

熱帯夜ふと揺れたらし水中花

八十路まだ知らない事がたとある

語り継ぐ人なく遠くなる故郷

ダイナミックに日の丸背負うアスリート

静岡市 渡辺 芳子

オリンピックテレビ応援くたびれる  
時の無駄したくないけどのそのそと  
この命終り良ければすべてよし

今の今金魚になりたいこの暑さ

江南市 脇田 雅美

飾り気の無い妻だつて味がある  
箸使いやつと挟んだ豆ひとつ  
こまいから大金持ちになれるのか

知恵つける者が居るから示談揉め

愛知県 樺 嶺志

庭師来て荒れた住まいが生きかえる

孫さんか問うて後悔先立たず

節電で汗かきシャワー数増える

あわてると言いつつも言うのはやつてから

八幡市 今井 万紗子

大丈夫妻の一押し勇氣でる

マンネリに恵比寿の顔を貼り付ける

サングラス外せば澄んだ青い空

句が抜けた夕餉の膳の一品に

大阪市 安藤 なつこ

スーブさめない距離にある不満  
子の巣立ち乳離れの日思ひ出す

たらちねもブラでアンチエイジング

そこまでと知つてた昔のガキ大将

大阪市 浅井 公平

ワンマンになれば反対気にならぬ  
忘れない星のあかりで見た景色

年金で暮すためには智慧がいる

おきているつもりで寝ている年となり

大阪市 岡田 元

父母と泳いだ頃を偲ぶ海  
10メートル泳いだ孫の得意顔

来年は白寿祝いの泣き笑い

潮騒のざわめく浜辺焼けた肌

大阪市 太田 としお

案外と狭いトイレで良き思案

気に入らぬすぐに謝罪をする人は

健康の戦争ならば打ち勝とう

困つたらすぐに出てくる有識者

大阪市 木村 青生

蝉時雨よりも短かき盆読経

ペアルックもう愛妻のなすまま

愛妻の首輪代りのペアルック

旅プラン今年も予算を組んだだけ

大阪市 梅里 南天

場つなぎに思わず関係代名詞  
とび出してよろめく平行四辺形

茶屋町の雨は音符が降ってくる

五輪見る熱中症の長い夜

大阪市 平井露芳

河内長野市 渡邊修

寝た切りの一步手前で躓かず  
冷蔵庫ことと只今製氷中  
気配りは待合室にあるメガネ  
冷房は要らないお化けに肝冷やし

大阪市 松田聰

無駄遣いそれもいつかは花開く  
若者の政治離れが恐ろしい  
メダルの色に一喜一憂した猛暑  
同人と誌友の違い句に見える

大阪市 吉田知之

子供らの見事な習字頼もしい  
朝稽古蟬時雨背にはつらつと  
旗日には休み取つても旗出さぬ  
酉年ですぐに出しやばる癖がある

河内長野市 辻村ヒロ

知恵袋乱雑につめ出でこない  
子も孫も煽てに弱い家系かな  
ちよつぱりと不満はあるが夫婦箸  
シュレツダー私の秘密飲み込んだ

河内長野市 山本エミ

前かごに夕陽も入れてペダル踏み  
包丁で老舗を守る腕自慢  
万歩計歌う小鳥を追いにいき  
エコ会議ボトルのお茶に迎えられ

ロンドンには歴史絵巻のプロローグ  
ロンドンの白熱戦に熱中病  
丑の日を鰻もどきで誤魔化して  
夜叉面で一途悲願の金を取る

堺市 増田和幸

高三の夏が終つた甲子園  
先進国有為の青年職奪い  
政治家は離合集散民忘れ  
選挙とは美辞と麗句の競い合い

高槻市 田中由美子

子育ての不安が玩具箱にある  
今少し命もやして夢を買う  
人間に生まれて嘘がうまくなる  
ポケットを秋一杯にする園児

豊中市 貝塚正子

出がらしのような夫婦に残る味  
お祭の綿菓子孫の顔かくす  
小さな手粘土に夢中芸術家  
風鈴もはげしく鳴れば暑くるし

富田林市 古田千華

サッカー場までしこジャパン満開に  
一蹴りでもやもや消したゴール球  
そのままで生成りのままの君が好き  
ウクレレを奏でて五感休ませる



寢屋川市 小谷 滋彦

バス停の傘持つ母のこじんまり  
重量挙げ見ているだけで腰痛に  
コップ酒楽しく飲めと五つ星  
染め斑がしかと夫婦の仲をとり

羽曳野市 磯 本 洋 一

休肝日妻は旅中酒を燗  
夕立が案山子に涙付けて行く  
俄雨駅に出迎え居酒屋へ  
五輪見て共に欠伸を繰り返す

羽曳野市 安 本 美 喜

帰阪して鰻と鰻を所望され  
冷や汁の猛暑に負けぬ食欲を  
カナンの地平和の願ひ原爆忌  
夜空彩る流星群に息をのむ

東大阪市 西田 いくひろ

長屋住まいの絆が今も生きている  
外見が良いので信用してしまふ  
地藏盆来る子にお菓子うれしそう  
図書館で右脳の隙を埋めている

枚方市 河 田 洋 子

決まる迄頭悩ます贈り物  
あれこれと迷ひ今年も同じ物  
自分には値段気にせずプレゼント  
お裾分け家で食べてる不良品

枚方市 坂 本 ミヨノ

絵手紙に西瓜の種が輝いて  
沈む夕日水平線も火の玉に  
夏向きに薩摩切子で泡を飲む  
サボテンも深夜孤独に花咲いた

枚方市 松 原 保

この党も民の生活第二です  
この暑さ脳ミソまでに突き刺さる  
原発を止める責任だれが取る  
新聞は反対ごとが好きらしい

藤井寺市 田 付 絹 枝

古傷もいい湯に溶けた同期会  
札束が鬼になったり笑ったり  
計れないメダルに付いた汗涙  
大空に夢を託した青春譜

藤井寺市 肥 山 一 文

知らぬ人一杯飲めばすぐ仲間  
古希過ぎてすることすべて手遅れに  
安い酒飲んだばかりに二日酔い  
定年で古い衣を脱ぎ捨てる

松原市 市 川 雄 太

不信任案もはや年間行事です  
ツイッターで交流結ぶきつかけに  
白球が転がる夏のスタジアム  
一言に責任持つて物申す

箕面市 村田恵子

子ら帰省母の機能が再始動  
近頃は野菜も人も灰汁が出ぬ  
雑踏の中に私を置きにゆく  
仁徳帝スカイツリーに来て下さい

八尾市 田邊浩三

七夕の笹川無く哀れ燃えるゴミ  
ゴーヤ棚風鈴吊るし手に団扇  
クラゲまで反原発と叫んでる  
糠に漬けるナスの一切れ鈴虫へ

大阪府 坂口公子

謡いなど一寸いい気に独り風呂  
しなくてもいいけれどもという仕事  
ちぎり絵と組んで強か指の節  
娘らと何時も尽きない長電話

大阪府 高木道子

大西日にひまわり頭下げている  
前うしろ蟬のライブと経を聞く  
風鈴とのっそり触れ合う盆の風  
くま蟬のこの木と決めた一本気

大阪府 西川冷子

蟻でさえ食の備蓄に汗してる  
炎天下テレビ熱戦燃える夏  
日の出前露にぬれつつ句を選ぶ  
駆けて行く何を運ぶか蟻のみち

大阪府 畑中節子

収拾のつかない時は星を見る  
周囲山丸ごと浮かベダム緑  
蝉しぐれリズム軽やか鉄を振る  
ストレスが老いのハートに絡みつく

(前月分) 高槻市 原 洋志

不景気で副詞しばらく鳴りひそめ  
雨漏れを防ぎきれない接続詞  
あいまいな動詞が主役大阪弁  
感動詞食べて浦島生き延びる  
振込み詐欺片棒担ぐ代名詞

(前月分) 米子市 後藤宏之

言つてないことでも言つたように言う  
砂かぶり一度座つて見たいもの  
しがらみを抜けたところが今の場所  
もろ肌をむいで啖呵を派手に切る

川柳塔

(つづき)

(前月号) 黒石市 相馬一花

被写体が美しすぎてぞつとする  
見て触れて食べて初めて知る魚  
老人はとて買えない抱き枕  
以心伝心こっそり抜ける踊りの輪  
狸から見ると人間化け物だ

# 新川柳鑑賞 (8)

麻生 路郎

釣革を二つ握ってささぎげん

(涼月女)

夜遅く郊外電車などでよく見かける図である。ハタは迷惑かは知らぬが当人はすこぶる満悦である。極く平易に詠まれているが情景をそのままに描出している手際は捨て難い。

勤評をのしる酒を追加する

(俊江)

「要するに勤評なんて怪しからん」と云うことを、酒をのみながら、クドクドと罵りながら、いくら罵りしてもものしり足らぬのに酒の方が無くなった。もつと罵るために酒の追加をしたと云うのである。作者は先生も感情の動物であることを発見したのである。

酒が酒のみだした頃課長去に

(文庫)

上役がいつまでも酒席にいと、思いな

しか酒がはずまない。そこで課長は潮時を見て引き上げるのが定石なのである。その潮時を酒が酒のみだした頃と云ったので、この句のいのちはこの表現の巧みさにある。

牧水でなくとも沁みる秋の酒

(多久志)

歌人、若山牧水の「白玉の菌にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり」という酒を詠った名高い歌がある。この歌を巧みに引用してこの句が生まれたのである。

「牧水でなくとも沁みる」と云って秋の飲酒をたたえたところにしみじみとしたものを感じさせる。

酒の祖父今日の佳き日は大君の

(玲人)

「酒の祖父」は酒好きのじじという意である。酒好きのおじいさんが、何とか名目をつけて呑みたがることを詠んだものである。「今日の佳き日は大君の」生まれ給いし佳き日であると言って呑んだのである。おじいさんらしい雰囲気は句の上に漂うていて面白い。

酔っているのにまだついて行く腰をあげ

(良子)

愛飲家の心理をうまくキャッチしている。もう相当に酔っているのに、まだ二次会か

ら三次会へとついて行くという人たちは酒が飲みたいというよりも、その雰囲気をよくなく愛しているのである。酔うとすぐ眠くなるという人にはまだついて行くために腰をあげるといふ気持ちは想像出来ないかも知れないが、それこそ愛飲家の世界なのである。

酔えば出るあの小使の枯すすぎ

(五茶)

「酔えば出る」という唄が、野口雨情のおれは河原の枯れすすぎであるところに、小使の過去が偲ばれる。「おっさんは失恋でもしたんやないか」と聞いても、「へへい」と言ったきりで多くを語らない淋びしい男であることを詠んだもの、この場合下五の枯すすぎが非常によく利いている。

嫌いかと露骨な問も酒の席

(万古)

「僕は君が好きなんだが、君は嫌いか」と聞く。

「いいえ、嫌いじゃないわ」

「嫌いじゃないが、好きでもないというのだろうか」

酒席というのはこんな露骨な問をして、ちつともおかしくないものである。

(原文のまま)

平成二十四年度 路郎賞

路郎賞準優秀作第一席

羽曳野市 吉村 久仁雄

先見えぬあすへ縫いしろ広くとる

申し訳ないが幸せ顔に出る

生き恥をさらすと見える敵味方

鍵のない檻に人間しがみつく

抜けそうな釘に命がぶら下がる

路郎賞準優秀作第二席

米子市 竹村 紀の治

朗らかなになれる薬を持っている

昼間から飲んでいいよと言う桜

二度三度起きては朝を確める

厨房に男ひとりの具を刻む

強がりも淹れて珈琲ひとり飲む



和歌山市

牛尾 緑良

お座りもお手もしたのに笑われる

生き延びた使命で今日の飯を食う

ネジ巻けばまた道化師に蘇る

甘言を信じてみよう試供品

エピソードだろうか風があたたかい

昭和五十年は透析元年、この頃からの新聞投句で野村太茂津先生に誘われ入会しました。地元の上大輪・富湖御夫妻や木本朱夏氏等の作品に導かれて川柳を続けることが出来たのは、同じ時代の風を感じるからでしょうか。

柳 歴

昭和52年9月 川柳塔わかやま同人  
昭和54年5月 川柳塔社同人  
読売新聞和歌山版川柳選者

応援いただいた諸先輩や会員の皆様から感謝とお礼申し上げます。今後ともご指導いただきますようお願いいたします。

平成二十四年度 川柳塔賞

川柳塔賞準優秀作第一席

富田林市 山野寿之

紀の川市



辻内次根

味噌ラーメン男ひとりの封を切る

ひたすらに耐える形になる猫背

イメージは花野胃壁を補修する

迷ったら鏡の前に立ってみる

冬に咲く花の図鑑をあけて見る

川柳塔賞準優秀作第二席

米子市 生田寒之

男一人こんにやく甘く辛く炊く

伸び代があつた昭和も遠くなり

やれやれと愚痴こぼしても仕事好き

間食に手の出るうちは死ねません

用もなく行くこともない元職場

柳歴

平成4年12月

三幸川柳教室入会

川柳塔わかやま誌友

川柳塔杜誌友

川柳展望誌友

和歌山三幸川柳会友会員

川柳塔賞に選んでいただきまして誠にありがとうございました。とても感激です。応募する時はもしかしてと考えていました。しかし現実には無理だとの自制もありました。入選の知らせを聞いた時信じられませんでした。電話機の録音で確かめ動揺、さあ大変、訳が分からないくらいうれしいが、待てよ最近取りとめのない夢を見るので、夢かもしれないと。  
長年の夢が叶い感激です、ありがとうございます。

# 路 郎 賞 得 点 表 (応募総数 153名)

1 位 = 5 点    2 位 = 4 点    3 位 = 3 点    4 位 = 2 点    5 位 = 1 点

(表の数字は得点)

| 選者 \ 作家 | 1   | 2     | 3    | 4   | 5     | 6    | 7    | 8    | 9     | 10    | 11   | 12   | 13    | 14   | 15    |
|---------|-----|-------|------|-----|-------|------|------|------|-------|-------|------|------|-------|------|-------|
| 小島 蘭幸   |     | 1     | 2    |     | 5     |      |      | 3    |       |       |      |      |       | 4    |       |
| 西出 楓楽   |     |       | 1    |     |       |      |      |      |       | 3     |      | 2    |       | 5    | 4     |
| 高瀬 霜石   | 2   |       | 4    | 5   | 3     |      |      |      | 1     |       |      |      |       |      |       |
| 早川 遡行   |     | 4     | 5    |     |       | 3    |      |      | 2     | 1     |      |      |       |      |       |
| 籠島 恵子   |     |       |      |     |       |      |      | 1    | 4     |       |      | 3    | 2     | 5    |       |
| 水野 黒兎   |     |       | 3    |     | 1     |      | 4    |      | 5     |       |      |      |       | 2    |       |
| 村上 玄也   | 5   |       | 4    |     |       |      |      |      | 2     | 1     |      |      |       | 3    |       |
| 山本希久子   |     |       | 2    |     | 3     | 4    |      |      |       | 5     | 1    |      |       |      |       |
| 居谷真理子   | 5   |       |      |     |       |      |      | 3    |       | 2     |      |      | 1     | 4    |       |
| 三宅 保州   |     |       |      | 2   |       | 1    |      |      | 5     | 4     |      |      | 3     |      |       |
| 竹治ちかし   |     |       |      | 2   |       | 1    |      |      | 5     | 4     | 3    |      |       |      |       |
| 仁部 四郎   |     |       |      | 4   | 2     |      |      |      |       | 3     | 1    |      |       | 5    |       |
| 牧野 芳光   |     |       |      |     | 2     |      | 1    |      |       | 4     | 3    | 5    |       |      |       |
| 計       | 12  | 5     | 21   | 13  | 16    | 9    | 5    | 7    | 24    | 27    | 8    | 10   | 6     | 28   | 4     |
|         | 吉岡修 | 森松まつお | 山田葉子 | 堀正和 | 山岡富美子 | 志田千代 | 安土理恵 | 乗原道夫 | 竹村紀の治 | 吉村久仁雄 | 中井アキ | 柏原夕胡 | 古久保和子 | 牛尾緑良 | 島田千鶴子 |

# 川柳塔賞得点表 (応募総数 74名)

1位 = 5点    2位 = 4点    3位 = 3点    4位 = 2点    5位 = 1点  
(表の数字は得点)

| 選者 \ 作家 | 1    | 2     | 3    | 4    | 5    | 6    | 7   | 8     | 9    | 10    | 11   | 12  | 13   | 14   | 15   |
|---------|------|-------|------|------|------|------|-----|-------|------|-------|------|-----|------|------|------|
| 小島 蘭幸   |      |       |      |      |      |      | 2   | 5     | 1    |       |      |     | 3    | 4    |      |
| 西出 楓楽   |      | 3     |      |      | 2    |      |     |       | 5    |       |      | 1   |      | 4    |      |
| 高瀬 霜石   |      | 3     | 2    |      | 5    |      |     |       |      |       |      |     |      | 4    | 1    |
| 早川 遡行   |      |       | 4    |      | 5    |      |     |       |      |       |      | 2   | 1    | 3    |      |
| 籠島 恵子   |      |       | 1    |      |      | 2    |     |       | 3    | 4     |      |     |      | 5    |      |
| 水野 黒兎   |      |       | 5    |      | 1    |      |     | 3     | 2    |       |      |     |      | 4    |      |
| 村上 玄也   |      |       | 5    |      |      |      | 2   |       | 4    |       |      |     |      | 3    | 1    |
| 山本希久子   |      |       | 4    |      | 3    |      |     | 2     |      |       |      | 5   |      | 1    |      |
| 居谷真理子   |      | 4     | 3    |      |      |      |     | 2     |      |       |      | 1   |      | 5    |      |
| 三宅 保州   |      |       | 3    |      |      |      |     |       |      |       | 1    |     | 2    | 5    | 4    |
| 竹治ちかし   | 2    |       | 1    |      |      | 4    |     |       |      |       | 3    | 5   |      |      |      |
| 仁部 四郎   |      |       | 1    | 2    |      |      | 4   |       |      |       |      | 5   |      |      | 3    |
| 牧野 芳光   |      |       |      |      | 4    |      |     | 2     | 5    |       |      |     |      | 3    | 1    |
| 計       | 2    | 10    | (29) | 2    | 20   | 6    | 8   | 14    | (20) | 4     | 4    | 19  | 6    | (41) | 10   |
|         | 湯浅久司 | 上田ひとみ | 山野寿之 | 市川雄太 | 白川淑子 | 谷久美子 | 國實力 | 工藤千代子 | 生田寒之 | 土屋起世子 | 木村忠義 | 高杉力 | 泉水冴子 | 辻内次根 | 脇田雅美 |

受賞作品

三田市 上田 ひとみ

おこつたり泣いたりとても忙しい  
娘が嫁ぎ家まるごとのモノトーン  
姑に似すぎていますうちのひと  
犬が逝き庭の犬小屋朽ちていく  
散り際は見事でなくていいんです

評 上田ひとみ：応募句すべて「今の自分の想いを詠う」という姿勢を貫いていて見事。日常茶飯事を素材にしても、自らの心情を見詰めることによって佳句を生んでいる。

澤井 敏治：「引き際の美学」や「死を意識したとき」などは、いわば「心理的な発見」であり、納得させられる。

山口 不動：「哲学も」や「ガレキなど」に見られるシリ  
アスな問題提起を評価する。「啓蟄に」のユーモアも秀逸。

石原 歳子：「顔隠していても」や「昼寝から」のように、  
心情を正直に述べている勇氣と自嘲を買う。（新家 完司）

準賞作品

堺市 澤井 敏治

引き際の美学二次会から逃げる  
死を意識したときからが人生だ  
左遷地と言うなよぼくの出身地

川西市 山口 不動

哲学もふっ飛んでゆく下の世話  
ガレキなど受け入れないという絆  
啓蟄におばさんが出て立ち話

三田市 石原 歳子

顔隠していても座席を譲られる  
昼寝から覚めると田植え終わってた  
夫のこと思つて今日も米を研ぐ

柳 歴

平成22年 川柳さんだ入会

平成23年 川柳塔誌友

平成23年 ふあうすと川柳社同人



上田ひとみ

この度はマイベースでのんびり川柳を楽しんでお  
ります私に愛染帖賞を頂き心よりお礼申し上げます。  
今後とも人との出会いを喜びに川柳と関わってい  
たいと願っております。

私の周りの皆様に感謝です。有難うございました。



受賞作品

和歌山市 古久保 和子

鳩尾のざわめくものが裁けない

評 喉元に落ちたのに鳩尾に燦ぶるものがある。今更、どうしようも無いのに自分の不甲斐無さだけが残る。準賞の句、終焉は寂しいものだが、そこへリボンを置くと楽しくなりそうだ。土を愛し、野菜を育む人の真摯な姿に好感が持てる。候補作品も一句残そうとする気構えが感じられる。(福士 慕情)

評 受賞作品、鳩尾でざわめくものはきつと意のままにならない自分の中のジレンマなのでしょう。下5の裁けないがすべて。準賞、芳山さんの作品は何ごとにも感謝の念の深さに感動。毅さんは日日の暮らしの視野の広さと豊かさに…お人柄を見た。

(池 森子)



古久保和子

川柳と出合い指を折りながら始めてもう二十七年も過ぎたことに、私自身驚いています。不器用で煌めくような言葉は不似合いと、身の丈で川柳と対話をしてまいりました。このたびの、思いがけない嬉しい知らせを、新たな一歩として学んでまいりたいと思います。諸先輩また柳友に恵まれたことに感謝いたします。有り難うございました。

柳 歴

昭和60年 三幸川柳教室入会

昭和63年 川柳塔社誌友

平成7年 茴香の花賞受賞

平成8年 川柳塔社同人

平成9年 渺湖賞受賞

準賞作品

ピリオドの先に結んでおくリボン

石橋 芳山

中村 毅

人柄が見える野菜を買いに行く

候補作品

稲見 則彦

瓦礫から大樹たらんと発芽する

藤井 宏造

菜箸でかきまぜられて妥協案

受賞作品

鳥取県 西谷悦子

一番もどりもみな汗かいている

評 悦子さんの受賞句は、笑ってばかりでは済まぬこの世を頑張って生きる汗の尊さを柔らかな表現で、拍手まで聞こえて来そうな一句に仕立てられました。

準賞の松丘さんの句には、深い経験からにじみ出る個性が確たる自信になって控えぬ中に力強さを見ました。

婦美子さんは大風呂敷と言ふ意表をつくフレーズで、主婦の頑張り夫婦の大きな夢を現実のものにした喜びを感じました。

(北野 哲男)

評 一番もどりも結果はどうあれ努力の汗を積むことは素晴らしい。ロンドン五輪でも各人が全力で立ち向かう姿に感動しました。

みんないい汗かいている。

準賞松丘さんの句、経験を活かし自分らしい味を出す懐の広さを感じました。

婦美子さんの句、ユーモアがあり誰もが共感できるのではないのでしょうか。それぞれ奥の深さを感じさせる作品でした。(小川てるみ)



西谷 悦子

一路賞受賞のお知らせを戴き「え？何で私か」と青天のへきれきの感でした。未熟な私の句を選んで下さった川柳塔の先生方に感謝の念で一杯です。「続けていけば必ずいいことがある」と言って下さった先輩がありました。これを機にゆつくりと精進していきたいと思えます。有難うございました。

準賞作品

七曲り越えて私の味を出す

三島 松丘

大風呂敷かなり広げた後始末

山田 婦美子

候補作品

句読点打ってさらりと風の中

太田 扶美代

こめかみに笑いの種を飼っている

上田 紀子

東京で渋皮とれて帰らない

奥 時雄

チアガールのボンボン天を突く若さ

渡辺 富子

柳 歴

平成11年 郡家川柳会入会

平成16年 わかばの会入会

平成21年 川柳塔社誌友

平成23年 川柳塔社同人

受賞作品

高石市 浅野 房子

しんがりを行くわたくしに敵はない

評 受賞作品は、仮にしんがりでも決して敵は作らず、地道について行こうとする作者の屈託のない明るさと、前向きな姿勢に魅かれました。

準賞、恵子さんの句は、如何に長蛇の列であっても、臆せずついて行こうとする積極性を感じます。

無限さんの句は、人生の正誤表と言う表現の目付けに、川柳ならではの面白みを感じます。(太田 昭)

評 受賞作品は、しんがりを守るのは強い人と聞いています。人の後ろからゆったり構えて、流れに逆らわず徒らに敵は作らない人情味あふれる句に拍手を送ります。(政岡未延子)



浅野 房子

この度は本当にびっくり、青天の霹靂かと存じました。ほけ防止、趣味で始めまして、三十年、ただただ、しんがりをはつぽつ歩んで参りました。でもこんなに嬉しい事は、ございません。良い冥土のみやげが出来ました。本当にありがとうございます。厚くお礼申しあげます。

柳 歴  
昭和57年5月 川柳を始める  
昭和59年 川柳塔社誌友  
昭和61年 川柳塔社同人

準賞作品

出遅れぬために長蛇の列にいる  
人生の最後に出そう正誤表

龍島 恵子  
両川 無限

候補作品

てにをはの真ん中辺にある穿ち  
善人になる座布団が寺にある  
年輪を重ねてまるい人間味  
じっくり生きる句読点打ちながら

坊農 柳弘  
福西 茶子  
大内 朝子  
山本希久子

## 受賞者の皆さまおめでとう

小島 蘭 幸

平成24年度の六賞を受賞される皆さまに、心からお祝いを申し上げます。

毎年8月12日に本社事務所で行う一次選考、本年度から遠野さんに加わって頂きました。選考委員七名がそれぞれ佳句をチェックして候補を選出、その作品の中から私が最終の15名を選んで二次選考にお願いしました。

路郎賞の牛尾緑良さんは、私が川柳塔欄の選者になってからずっと注目している作家です。準賞一席の吉村久仁雄さんの作品はハツとしてほつとするユーモアがあります。準賞二席の竹村紀の治さんの生活の一齣を見事に詠んでおられます。川柳塔賞の辻内次根さんは現実と厳しく向き合っておられます。準賞一席の山野寿之さんは昨年の二席に続いての受賞で巧さが光ります。準賞二席の生田寒之さんの作品にはなる程と納得させられました。愛染帖賞の上田ひとみさんの作品はちよつととほけた中に味があります。檸檬抄の古久保和子さんは日頃の精進が実りましました。一路賞の西谷悦子さんの作品は優しくてあたたかいです。各地柳壇賞の浅野房子さんの作品にはベテランの作家の風格を感じました。今回は路郎賞川柳塔賞は男性、その他の賞は女性でした。受賞者の皆さまおめでとう。

## 二賞選考経緯

木本 朱夏

節電の夏、連日猛暑の続く八月十二日、

第一次選考委員（蘭幸主幹・楓楽理事長・大輪副主幹・完司副主幹・月子副理事長・遠野副理事長・朱夏副理事長）が集合。

路郎賞には一五三名、川柳塔賞には七十四名の応募があった。

今年は規定が変わり、二次選考は主幹・理事長と各地の選者十一名の計十三名である。主幹が最終で十五名を決定した。

二十二日、二次選考から返送された結果を、楓楽理事長と共に集計した。

路郎賞に輝いた牛尾緑良さんは、永年透析を続けながら命の詩を詠む、川柳歴35年の作家である。

昨年の川柳塔は比較的柳歴の若い方であつたが、今年の受賞者・辻内次根さんは、誌友歴が長い。ひたすらな精進がこのたび見事に結実したことに、お祝いを申し上げます。

今年の感想として例年より僅かながらも、応募者が増加したことを喜ぶ。また、一年間の総括として自分の作品を見直し、自選力をつけるためにも、路郎賞・川柳塔賞にチャレンジして頂きたい。

## 二賞候補者在住地

|      | 1     | 2   | 3    | 4   | 5     | 6     | 7   | 8   | 9   | 10   | 11   | 12   | 13   | 14   | 15  |
|------|-------|-----|------|-----|-------|-------|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|-----|
| 路郎賞  | 四条 畷市 | 松原市 | 長岡京市 | 三田市 | 河内長野市 | 堺市    | 橿原市 | 堺市  | 米子市 | 羽曳野市 | 富田林市 | 和歌山市 | 和歌山市 | 和歌山市 | 高槻市 |
| 川柳塔賞 | 米子市   | 三田市 | 富田林市 | 松原市 | 神戸市   | 河内長野市 | 竹原市 | 岡山市 | 米子市 | 和歌山市 | 神戸市  | 大阪市  | 西宮市  | 紀の川市 | 江南市 |

## 中島生々庵句抄

(句集『生々楽天』から 昭和五十一年発刊)

昭和三十五年

有頂天になった若さの妻とふけ

金屏風菊も晴衣も映え競い

いい時候に死にやはつたと菊を褒め

女賢うしてとつときふえてゆき

名曲に音痴もうなる撥さばき

夢の夢その夢のままゴールイン

手不足は手不足晩酌當かかすまじ

餅つきに餅を丸める母達者

大馬鹿の見本のようにさぎに合

昭和三十六年～四十年

おこた蒲団ちと派手すぎる母一人

ひっそりとこたつがぬるい妻の留守

負け癖を初日に負けたせいにする

責任を割り勘にして出ししぶり

家計簿に又妥協しておもちや買い

見栄だけで顔の小皺がかくされず

質屋でも大口さんをもてはやし

親分の見栄は刑事をねらみつけ

道草を大器晩成型とほめ

夜明け遠し坊やの熱が待ちかねる

# 誹風柳多留一篇研究 86

増田忠彦・山口由昭  
小栗清吾・伊吹和男  
山田昭夫  
清 博美

670 かん病にだいに迄出すやかましき

山田 どうもよく分からない。

「だいに」は内裏と代理が考えられるが、「代理」は比較的新しい用語のようで、管見の古語辞典などには見えない。故にこれは内裏とすべきと思う。女の子供が病気になる、家人の看病は勿論のこと、お内裏様までがお出ましになる騒ぎ、というのであろう。勿論、お内裏様は内裏難のこと。この病人、あるいは痘瘡か。痘瘡には本人はもとより看病人も赤い衣を着る風習があり、お雛様の女官などは赤い衣を着ている。

太神楽赤い姿に見つくされ

宝日智一

増田 賛。毛氈も赤いし。  
清 賛。

671 ほへついた犬へ百両ぶつつける

増田 浅草寺境内など、正月用品を売る歳の市の句。帰り道で犬に吠えられて、縁起物に買った土製の百両小判を投げつける。市帰りには桶や箆を頭にしたりすりこ木を腰に差したりと異様な形で、犬が吠えるのであろう。市帰り大戸上げるとしよつて居る 五

小栗 賛。縁起小判。  
清 賛。

672 二代目八つき屋に門をたゝかれる

増田 搦屋は白を持って各戸を回る米の賃搦き。前日に予約をしていたのであろう、早朝に回ってきた搦屋に、二代目が表戸をたたかれて起こされる。精励で身上を興した初代との様変わり。

二代めハあしふみもせぬふくの神 三  
山口 賛。三代目になると店がなくなっている。

清 賛。

673 越手代せいしに夜具をねたられる

増田 昔唐の国では、越王勾踐が呉から贈られた美女西施に溺れて国を亡ぼした。今江戸では、越後屋の手代が吉原の美形にはまりこんで、三ツ布団をねだられている。

遊女の三ツ布団は越後屋などの呉服大店で仕立てるのが一般。それを店員が背負い込むおかしみ。やがてこの手代も身を滅ばしかねないというのであろう。

番頭も外でハおもしろいおとこ 二  
清 賛。

674 川留とおぬけなんしと女郎いふ

**増田** 旅戻りの品川宿での逗留。帰宅予定の日数が過ぎた、と腰の落ち着かぬ客に女郎が、「大井川の川留めで何日も暇をくつたと言ひ抜けなさい」と知恵をつけている。

品川に居るにかけせん三日すへ 九27

清 賛。

675 かんさしハかゆい所へすぐにさし

**増田** 簪は髪を縫うように差しているが、頭皮を搔く時は直角につっこんで使用する。

**山口 賛。** 縦横の面白さだけなのだろうか。

清 賛。

676 せみ折を宮六度まで明けてみる

**増田** 蟬折は『平家物語』などに書かれる宮中に伝わる名笛。源三位頼政の蜂起にのつた高倉宮は、謀が露顕して奈良に落ちる途中宇治への道で居眠りをして六度も落馬したとされる。(謡曲『頼政』)

宮は落馬のたびに、持参した笛が折れはしなかつたかと袋を開けて確かめたことであろう。

蟬は笛の吹き口背面にはめ込まれた部品で、名笛「蟬折」はかつてこの蟬が折れた

ことにより名付けられたとされる(『平家物語』)。句は、そのような故実までも考えろというのであろうか。なお、関西の先人の略解では「楽家録」を引いて、「古くは笛は鞘に入れたもので、袋に仕舞うのは近世になってからのこと」と、注釈されている。

清 賛。

677 扱よくしやべるやろうだと源三位

**増田** 前の句と同じく源三位頼政の蜂起にかかわる句作。『平家物語』巻四「橋合戦」の場面。都を落ちる頼政は宇治橋の橋板をはずして平家の追つ手をくい止める。平家の侍・足利又太郎が、郷里の利根川で馴れているといつて先陣をきり、また向こう岸に控える後陣に大音声で渡川の要領の注意をうながす。敵陣近くに先陣したばかりだというのに、『平家物語』ではこの時の又太郎の口上が実に長い。頼政は「さてもよくしやべるやつだ」と、長口上を聞いたことであろう。

**山口 賛。** 又太郎は無位無官の十七歳、売り込みがきついのだろうか。

清 賛。

678 舞の内弁けい八出て船の世話

**増田** 軍記物の逸話がづく。頼朝の勘気をうけた義経の都落ち、大物浦から船を出す場面。弁慶の注進で後に残されることとなった静は「旅の船路の門出の和歌、ただ一さしと勧めれば」と乞われて名残の舞を舞う。その舞の内、弁慶は場をはずして出船の仕度で忙しかつたことであろう。謡曲『船弁慶』による句作であろう。

清 賛。

679 それみたか引けたとしらふはらを立ち

**増田** 「いつまでもぐずぐずと飲んでいるから、それみたことか。やつぱり引け四ツ(吉原の見世を仕舞う十二時)になつちつたじゃないか」と、素面の下戸が飲んべえたちにくつてかかる。

**小栗 賛。** 「下戸」ではなく「素面」なのは、何か含意があるのか?

**山田 賛。** 飲んで遅くなつたその上に歩きが千鳥足、「下戸は」と「素面」、特に意味はないと思いますか? ……。

**清 賛。** 「下戸」は酒が呑めないが、「素面」は呑めるにもかかわらず、呑まずに居て次の行動に備えている。

# 愛染帖

新家 完司選

堺市 加島 由一  
私の長所三つも浮かばない

(評)二つも浮かべば上等ではないか。視点を変えると、長所は短所であり、短所は長所である。今度は短所を数え上げてみよう。

京都市 榊本 宏子  
冷たいのかシャイかわからぬ人という

(評)冷たいのなら長くは一緒にいられない。温かく優しいところを素直には出しにくいタイプ。口先だけの男より格段に好ましい。

富山市 有澤 嘉晃  
ジョークでも顔の話はよしでしょう

(評)体型や顔つきは受け継いだDNA。本人の努力では如何ともし難いこと。冗談には本音が含まれているので絶対に言ってダメ。

藤井寺市 太田扶美代  
打開策棚の上など見てごらん

(評)頭を抱えてウンウン唸っていても名案は浮かばない。こころを広げ視点を変える。と、案外なところにヒントが転がっている。

堺市 大隅 克博  
おばちゃんと電車だんだん派手になる

(評)もちろん(と言えば失礼だが)大阪のおばちゃん。電車の横つ腹にド派手に描かれたイラストと勝負しているのかもしれない。

倉吉市 野口 節子  
肩書きを取ると隣のおじいさん

(評)会社社長、銀行頭取、病院長、国会議員など等の肩書きで威張っておられるのも現役時代だけ。裸になるとただのお爺さん。

堺市 村上 玄也  
スーツ着て出ると何ごとかと聞かれ

(評)「オッサンと言ふなよ今日はモーニング」は、土居耕花。たまに改まった格好をする。とこ近所が「おや」と驚くのは何処も同じ。

岡山市 藤成 操江  
クーラーがなかった頃を考える

(評)便利で快適ではあるが、膨大なエネルギーを消費し、地球温暖化の一因にもなっている冷暖房機器。少しは反省しなければ。

岩出市 村中 悦男  
電球が節電ですと切れたまま

(評)一つの灯りに家族が集まるのが団欒。電球の数が増えると共にみんなバラバラになった。一個や二個なくても平気ではないか。

江南市 脇田 雅美  
三年目はじめて抜けた檸檬抄  
(評)内輪の者にしか分からない「楽屋句」。

この愛染帖にも「なんぼ出しても没ばっかり」と苦情をいただいている。ご勘弁願いたい。

田辺市 岡本 昇  
涼み台節電談に花が咲く

熊本県 高野 宵草  
節電に我が忍耐を自讃する

大阪府 米澤 俣子  
節電を言うアナは背広着て

枚方市 二宮 山久  
節電へ扇子取り出す妻の客

紀の川市 楠原 富子  
節電に励み心身くたびれる

箕面市 広島 巴子  
暑さばけこれで創作無理ですな

海南市 堂上 泰女  
風蘭になぐさめられている炎暑

堺市 遠山 唯教  
鰻井を豚井にして暑氣払う

大阪市 谷口 義  
罰ゲームしているようなこの暑さ

鳥取市 有沢せつ子  
ご近所と暑さ勞りすれちがう

堺市 矢倉 五月  
一杯の水真剣に飲む盛夏

熱中症予防に飲んで水太り  
藤井寺市 若松 雅枝  
家事を終えエアコンをつけ大の字に  
大阪市 栃尾 奏子



川西市 山口 不動  
蟬七日神が許したエクスタシー

大阪市 榎本 舞夢  
寝不足と猛暑に耐えて五輪見る

神戸市 白川 淑子  
種目ごと違う筋肉アスリート

大阪市 小谷 集一  
アルバムに貧しい頃のいい笑顔

尼崎市 小池 幸子  
草に庭取られ気合いで取りかえす

大阪市 高杉 力  
昼間から呑んでますねん天王寺

藤井寺市 田付 絹枝  
慣れたのにまた新機種のATM

豊中市 水野 黒兎  
古稀過ぎて次第に延びるひと休み

三田市 上田ひとみ  
暑いからやめときなさい怒るのは

息子にはやっぱり肉を食べさせる

高槻市 初代 正彦  
遠慮なく本音でわめく庭の蟬

奈良県 渡辺 富子  
悠然と泳ぐクラゲに癒される

堺市 奥 時雄  
三十年も前にはやった服着てる

スプーンで食うスイカそんなにうまくない  
献血はしないが蚊には与えてる  
ゴキブリがモデルに見えるムスタング

大阪市 古今堂蕉子  
今日の胃をそうめんつゆに預けよう

鳥取市 近藤 秋星  
サルスベリ満開花見酒如何

大阪市 神夏磯典子  
新薬を試す可愛いモルモット

泉佐野市 稲葉 洋  
献体になる部位が無いわがむくろ

西宮市 泉水 冴子  
いい人をやめてさっぱり梅茶漬け

弘前市 稲見 則彦  
救急車速い記憶の海の底

貝塚市 吉道あかね  
閉院の知らせに上がる血糖値

好みではないがほっそり見える服  
また来てと割引券を贈られる

八尾市 田邊 浩三  
メモ要らぬスマホを抱いて作句する

ベランダへ逃げた鈴虫今日も鳴く

佐賀県 真島久美子  
灰皿を洗う自己嫌悪を洗う

今治市 渡邊伊津志  
いい風を待つて終わってしまう夏

傷ついて傷付けて来たことを知り  
潮風が漁師の顔を彫り上げる

誘蛾灯また殺されに行きますか  
アンクレット足首だけは自信ある

喜屋川市 平松かすみ  
朝夕にやんわり洗う喜寿の顔

年々に意地悪顔になってきた

弘前市 高瀬 霜石  
飲むために生きてるわけじゃないが飲む

もてなしはキリリと冷えた瓶ビール

苦勞なんてしてきたようなせんような  
ハムレットそりやあやつぱり生きるべき

河内長野市 村上 直樹  
ひたすらにポツクリという狭き門

というがやはり酒より命です

豊中市 松尾美智代  
お参りをしたから今日は元気です

やさしさも意地悪もみな私です

三田市 堀 正和  
京都府京都市と丁寧なテレビ

カツラだと一目で分かるから許す

催促はされないけれどお中元

六歳が昔と言っている去年

鳥取県 吉野いさお  
これからはかけ声抜きで立ち上がる

満員の介護のバスに葬儀社名

つっぱった気持ち緩んで明日は晴れ

冬ならば体の線はごまかせる

海南市 小谷 小雪

備前市 森 ふみか  
苦勞した母へ痴呆はきつと加護

大阪市 太田としお  
ご近所の犬もめつきり老けました

鳥取県 平木 公子  
証明書無くても歳に見てくれる

唐津市 樋口 輝夫  
口も手も出さぬと決めた老い達磨

岡山市 工藤千代子  
母の名を金魚に付けて偲んでる

松江市 石橋 芳山  
パスタとかコジャレなくても焼きうどん

香芝市 大内 朝子  
使わない介護保険に感謝する

香南市 桑名 孝雄  
酒で充電CO2は出してない

瀬戸内市 東横ますみ  
誤字脱字ばかりの脳をもてあます

八尾市 吉村 一風  
目として時どき見たいものがある

和歌山県 森下よりこ  
にわとりにせて冷たい水をやる

奈良市 辻内げんえい  
少しなら太めの方がボクは好き

高知市 小川てるみ  
宗教が人の不幸に入りこむ

高槻市 片山かずお  
真剣な顔は誰でも美男美女

高槻市 富田 保子  
まだ暑い地下鉄ばかり乗り継ぐ日

鳥取県 西谷 悦子  
二十五度寒く感じる猛暑あと

河内長野市 穂口 正子  
怒鳴ってる亭主も老いた風呂上がり

米子市 高田 振作  
ゆつくりと母を偲べる家族葬

京都市 高島 啓子  
足の甲轢かれて自転車が怖い

篠山市 遠山 可住  
父の汗タバコやめなと言いつせす

鳥取市 岸本 孝子  
防災無線熱中症のことばかり

河内長野市 梶原 弘光  
この頃のアナウンサーはよくとちる

枚方市 小林 わこ  
持ち前の度胸で弾む英会話

池田市 上山 堅坊  
ポケットの小銭確かめ牛井屋

河内長野市 藤塚 克三  
鰻重を横目で睨み穴子丼

和歌山市 古久保和子  
若いっていいな寝ぐせまでも元氣

和歌山市 平田 元三  
テンブラの厚い衣は母の知恵

三田市 田中 章子  
母さんの味が育てたアスリート

鳥取県 竹信 照彦  
人間は立って歩いてまだ飛べぬ

唐津市 坂本 蜂朗  
災害の多いニッポンだけど好き

松山市 神野きつこ  
死んでから来るお役所の請求書

松江市 三島 崧丘  
まだ遊ぶ友あり老いの縄のれん

和歌山市 福井 菜摘  
先々と気配りされて落ち着かぬ

和歌山市 喜田 准一  
損得の絡む話に耳が立つ

鳥取県 斉尾くにこ  
長電話隅のほこりに手が伸びる

堺市 澤井 敏治  
欧州の極東わたしの中心

岡山市 永見 心咲  
一発屋でも良い高く高く咲く

河内長野市 松岡 篤  
厄介だ非の打ち所ない男

和歌山市 武本 碧  
昼食はチンで済ませてエステ行き

茨木市 藤井 正雄  
目を閉じて奥の心の意向聞く

鳥取市 坂本とも湖  
墓を掘り古代文明暴き出す

篠山市 酒井 真由  
うたかたの夢あやとりも指切りも

高槻市 安田 忠子  
 オスブレイ陸揚げされて暑い夏  
 枚方市 松原 保  
 オスブレイスリルを乗せてサァー離陸  
 羽曳野市 徳山みつこ  
 ビッグベン体内時計狂わせる  
 和歌山市 田中 みね  
 夏バテをしている間が無い多忙なり  
 島取市 津村 律子  
 熱中症トマトピーマンかばちやまで  
 大阪府 羽山 隆盛  
 八月の記憶に残るマツカーサー  
 加西市 金川 宣子  
 ばあちゃんと同じ年だね原爆忌  
 シドニー 坂上の子  
 鳥の朝食だったのだろう消えた花  
 芦屋市 黒田 能子  
 赤ちゃんと猫に好かれてゐるわたし  
 大阪市 江島谷勝弘  
 綿菓子を買わせて半分こ  
 三田市 雑賀 一泉  
 パソコンを錆びた頭で追っ掛ける  
 四條畷市 吉岡 修  
 週刊誌とこの表紙も笑つてゐる  
 屋川市 森 茜  
 電灯の傘を洗つておひっこし  
 高槻市 富田 美義  
 妻逝つて緩んだネジの後始末

島取市 吉田 弘子  
 死ぬ順番ないから強く生きられる  
 羽曳野市 永田 章司  
 出来た人飼ひ馴らしてゐる腹の虫  
 東大阪市 北村 賢子  
 ふと見れば継ぎ接ぎだらけ影法師  
 藤井寺市 高田美代子  
 仮縫いのままでマネキン着せられる  
 河内長野市 黒岩 靖博  
 つんつんの女将諭吉に跪く  
 八尾市 村上ミツ子  
 ファンという名の監督がたんといふ  
 三田市 福田 好文  
 腹立てて磨く食器が良く光る  
 高槻市 島田千鶴子  
 ペンペン草自由を求め屋根の上  
 大洲市 中居 善信  
 お互いに一目を置きたい友で  
 和歌山市 土屋起世子  
 最後には帳尻ゼロに使い切る  
 寝屋川市 鈴木 楽鬼  
 意地がある損と知つても進む道  
 河内長野市 辻村 ヒロ  
 これ誰と古い写真を孫が聞く  
 大阪市 松尾柳石子  
 十五夜を少し眺めて窓しめる  
 堺市 宮本かりん  
 変わりない月をしんみり見てしまふ

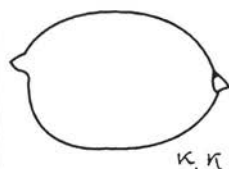
三田市 北野 哲男  
 乾杯が済んで何でも良いお酒  
 奈良市 尾畑なを江  
 一匹の藪蚊と風呂で格闘す  
 大阪市 板東 倫子  
 持つて死ぬつもりは無いが貯めてゐる  
 寝屋川市 富山ルイ子  
 貯めることやめて年金使ひ切る  
 大阪市 奥村 五月  
 泥船も愛さえあれば沈まない  
 西宮市 緒方美津子  
 汚いなあうまそうやなあラーメン屋  
 和泉市 横山 捷也  
 父の歳越えこの先はロスタイム  
 堺市 志田 千代  
 町内に平成の井戸掘りましよう  
 豊中市 藤井 則彦  
 憔悴がホットミルクに溶ける朝  
 奈良市 大久保真澄  
 アホなとこばかり見せて子を育て  
 橋本市 石田 隆彦  
 千人で世論とみなすマスメディア  
 河内長野市 水谷 正子  
 古いけど浴衣やつぱり白に藍  
 松原市 市川 雄太  
 強くなれと心に誓ひ生きる日々  
 島取市 春木圭一郎  
 追ひこんで少ない知恵を絞り出す

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

(投句 756句)



「限 界」 奥 田 みつ子 選

限界に挑み掴んだ金メダル  
 限界の山越えしたらユートピア  
 限界と喘ぐ地球の音がする  
 老いらくの恋限界の影法師  
 限界はないと前向くバイオニア  
 人類の限界決める放射能  
 地球儀が限界だよと転げだす  
 限界を知ってる花のいさぎよさ  
 白旗を掲げ昼寝をしています  
 辛抱の限界越えた政治愚痴  
 政治への怒り限界を越える  
 限界に挑んだ汗は美しい  
 限界を跨いででかい虹が立つ  
 子へ注ぐ愛へ限界などはない  
 晩学に限界はなし電子辞書

大阪市 岩崎 公誠  
 倉吉市 野口 節子  
 神戸市 能勢 利子  
 藤井寺市 鴨谷瑠美子  
 豊中市 藤井 則彦  
 豊中市 源田 啓生  
 河内長野市 辻村 ヒロ  
 鳥取市 倉益 一瑠  
 藤井寺市 高田美代子  
 橋本市 石田 隆彦  
 藤井寺市 鈴木いさお  
 西宮市 緒方美津子  
 松江市 三島 崧丘  
 宇部市 平田 実男  
 尼崎市 長浜 美龍

「限 界」 森 山 盛 桜 選

危険値を越えてその気になる禁酒  
 限界を知れと診察券の数  
 限界のひと踏ん張り物が言う  
 もう限界蟬がバタバタ落ちる夏  
 まっしぐらが開く限界のとびら  
 やりくりももう限界と冷奴  
 勇退という名で限界を飾る  
 限界に家事分担は容赦なく  
 限界の向こう一番星ひかる  
 限界が解れば何も無理はせん  
 鬼が探しに来ぬかくれんぼ限界だ  
 限界は松田聖子の辞書に無い  
 通勤の限界超えた地に我が家  
 寝められて限界一つ越えました  
 これ以上は無理だわたくしを許す

可児市 板山まみ子  
 尼崎市 軸丸 勝巳  
 鳥取市 西川 和子  
 箕面市 寺井 柳童  
 生駒市 飛永ふりこ  
 和歌山市 古久保和子  
 藤井寺市 太田扶美代  
 鳥取市 吉田孔美子  
 大阪府 栃尾 奏子  
 宝塚市 丸山 孔一  
 八尾市 宮崎シマ子  
 鳥取県 斉尾くにこ  
 堺市 村上 玄也  
 大阪市 田浦 實  
 羽曳野市 徳山みつこ

限界を背の日の丸と共に越え  
 限界を超えた鉄棒神の技  
 勇退という名で限界を飾る  
 年金に限界があるのし袋  
 限界を知れと診察券の数  
 愛あれど限界きます介護の手  
 限界を悟ってからマイベース  
 我慢にも限界があり顔に出る  
 悟りより痺れが先に来る座禪  
 忍耐の限界のろし上げている  
 一本の釘に限界教えられ  
 幸せに限界不幸底が無い  
 三猿も限界と知る割烹着  
 限界の命に灸をすえながら  
 まだともう限界線が揺れ動く  
 限界のソプラノ澄んだプリマの目  
 ベスト尽せば天も味方をしてくれる  
 極限で勝利の女神微笑んだ  
 限界と何度思ったことだろう  
 若者に限界線の文字は無い  
 限界を知っているからできる無茶  
 まだまだと強気限界まで挑む  
 限界を越えた我慢が発火する

|      |       |
|------|-------|
| 出雲市  | 竹治ちかし |
| 京都府  | 清水 英旺 |
| 藤井寺市 | 太田扶美代 |
| 大阪市  | 津村志華子 |
| 尼崎市  | 軸丸 勝巳 |
| 富田林市 | 中崎 深雪 |
| 芦屋市  | 黒田 能子 |
| 府中市  | 藤岡ヒデコ |
| 唐津市  | 樋口 輝夫 |
| 大阪市  | 寺井 弘子 |
| 鳥取県  | 石谷美恵子 |
| 鳥取県  | 竹信 照彦 |
| 紀の川市 | 宇野 幹子 |
| 松江市  | 松本 文子 |
| 香南市  | 桑名 孝雄 |
| 京都市  | 坪井 孝一 |
| 枚方市  | 海老池 洋 |
| 富田林市 | 関 よしみ |
| 大阪市  | 谷口 義  |
| 芦屋市  | 竹山千賀子 |
| 大阪市  | 井丸 昌紀 |
| 寝屋川市 | 富山ルイ子 |
| 奈良県  | 渡辺 富子 |

限界は笑って越えてきた財布  
 人の世の限界皺が深くなる  
 まだいけるもつといけると克己心  
 限界を知ってる花のいさぎよさ  
 限界を知ってばつばつ身繕う  
 昼ごはん思い出せないほど暑い  
 不可能を可能に換える人類史  
 限界に挑む自分を試すため  
 晩学に限界はなし電子辞書  
 死んだふりできなくなつた熱帯夜  
 懸垂は二回で無理と引き下がる  
 不老不死いいや人間死ぬるもの  
 これ以上どうしろと言うのでしょうか  
 限界を棒高跳びで超えてゆく  
 齢ですねスマホに従いて行けません  
 その時は歯向うつもり貴方でも  
 こここまで決めて始めた事なので  
 あの世へはまだまだ行かぬ歯を磨く  
 溜め込んだ限界点のゴミの山  
 後期です頑張れなんて言わないで  
 半額で買われてゴミにならなんだ  
 限界のあたりに落ちているドラマ  
 限界の荷物捨てたら一人ばち

|       |       |
|-------|-------|
| 京都市   | 榎本 宏子 |
| 大和高田市 | 鍛原 千里 |
| 京都市   | 清水 英旺 |
| 鳥取市   | 倉益 一瑠 |
| 尼崎市   | 春城 年代 |
| 堺市    | 加島 由一 |
| 枚方市   | 丹後屋 肇 |
| 芦屋市   | 黒田 能子 |
| 尼崎市   | 長浜 美籠 |
| 貝塚市   | 吉道あかね |
| 弘前市   | 稲見 則彦 |
| 鳥取県   | 竹信 照彦 |
| 和歌山市  | 柏原 夕胡 |
| 松江市   | 相見 柳歩 |
| 西予市   | 黒田 茂代 |
| 和歌山市  | 田中 みね |
| 大阪市   | 坂 裕之  |
| 高槻市   | 原 洋志  |
| 竹原市   | 六田 半徳 |
| 三田市   | 堀 正和  |
| 橿原市   | 居谷真理子 |
| 出雲市   | 竹治ちかし |
| 大阪市   | 川端 一步 |

笑いながらとことんガマンしてました

和歌山市 柏原 夕胡

限界と言われてからの底力

大阪市 大西 晴雄

ぎりぎりのところで無口が言う重み

米子市 政岡未延子

限界で脳のシグナル冴えて来る

和歌山市 堀 富美子

伸び過ぎた頭のゴムは戻らない

川西市 西内 朋月

限界を過ぎて抛物線になる

京都市 高島 啓子

青い地球にも限界があるだろう

さいたま市 星野 育子

限界を支えてくれた父母の汗

海田市 堂上 泰女

若者の一途限界など見えぬ

大阪市 升成 好

限界がわからないから夢が沸く

米子市 加藤 正二

衰められて限界一つ越えました

大阪市 田浦 實

限界と思えば止まる思考力

大阪市 大川 桃花

限界と知っても母は願かける

大阪府 米澤 俣子

子育てに母の限界ありません

三田市 尾崎 一子

限界のない母の海父の空

大阪市 梶尾 奏子

限界をいくつも呑んだ人間味

寝屋川市 森 茜

生きることの限界月に聞いてみる

吹田市 大谷 篤子

限界はきつとちちは待つ花野

西宮市 亀岡 哲子

限界に挑む姿に立つオーラ

和歌山市 福井 菜摘

秀 句

限界に挑戦土に帰るまで

大阪市 小谷 集一

限界をやんわり告げる大きな掌

西宮市 秋元 てる

金メダル限界説をふっ飛ばす

枚方市 丹後屋 肇

安ければ賞味期限を問いません

枚方市 寺川 弘一

手に取って見れば極限こんなもの

高槻市 富田 保子

限界に見えない石が置いてある

長岡京市 山田 葉子

今夜こそ言わねば続く不眠症

東かがわ市 川崎ひかり

酸性になるまで泣いてみるつもり

佐賀県 真島久美子

限界の手前ブランク故障する

長野県 丸山 健三

どこまでが限界雲は突き抜けた

松江市 石橋 芳山

限界のキリトリ線で生きている

高石市 浅野 房子

限界と言えぬ昭和のまだかまり

藤井寺市 鴨谷瑠美子

これ以上膨らませたらパンと鳴る

泉佐野市 稲葉 洋

哀しみの限界までは生きられる

松江市 松本 文子

限界の余りの中にある予感

松山市 高橋 宏臣

切られたり煮つめられたり人件費

弘前市 高瀬 霜石

限界のたびにふくらむ竹の節

堺市 志田 千代

これ以上燃えさせないで焦げるから

鳥取市 前田 楓花

限界の見えぬ寿命のミステリー

尼崎市 藤井 宏造

ぎりぎりの同心円の上に住む

堺市 澤井 敏治

限界へ控える私の可能性

海田市 小谷 小雪

才女魔女その限界につけ睫毛

八尾市 宮西 弥生

秀 句

限界の綾織り成して生きものよ

唐津市 仁部 四郎

手や足が生えて鯨を諦める

黒石市 佐藤 古拙

限界を過ぎて抛物線になる

京都市 高島 啓子

## 英語 de Senryu ⑩

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代

(岐阜保健短期大学)

もしひよつと 妻が死んだらなと思ひ

*a thought*

*strikes me,*

*my wife's sudden death*

女のいない酒はさびしき

*on the back of chair*

*my youth*

*already disappears*

### ～リバーウィローのため息～ (R・H・ブライスの仕事2)

ブライスの初めての著書は、『*Gen in English Literature and Oriental Classics*』(北星堂1942)です。シェクスピア、ダンテ、ホーマー、中国の詩人の作品に禅の精神がみなぎっていることを比較・対照して示しました。さらにこの著書は日本の俳句、川柳は世界文学の中で語らねばならないとしたブライスの文学観を表したものでした。しかし著書のほとんどは英語で書かれていて、一般の日本人読者を獲得するには時間がかかりました。しかし日本人の研究者らはブライスの存在に瞳目しました。第二次世界大戦が始まると、英国帰還の勤めにもかかわらず日本に残りました。神戸の対戦国民間人収容所で、ブライスは日本文学、特に俳句の執筆に取りかかります。彼は俳句や川柳を愛すれば愛するほど自分の生き方の根本が日本の文芸の真髄とつながっていると確信するのです。終戦後、ブライスはGHQに勤務するか、学習院で皇太子の教育を担うかの選択肢を前にして後者を選びます。学習院での教育こそ日本文化の根本に接することが出来ると思ったからです。その後、ほぼ毎年、俳句と川柳の英訳書、そして学生用英文学テキスト、禅エッセイを出版します。まだ戦後の混乱が続き、日本人の生活意識がアメリカ文化に傾斜していく1949年(昭和24)に、『*Haiku 1, Senryu*』を出します。『*Senryu*』は谷脇素文の漫画入り英訳川柳書に仕上げています。『*Haiku 2*』(1950)、『世界の諷刺詩川柳』(1950)、『*Haiku 3*』(1952)、『*Haiku 4*』(1952)、『*Japanese Humour*』(日本交通公社1957)、『*Oriental Humour*』(1959)、『*Japanese Life and Character in Senryu*』(1961)、『*Edo Satirical Verses Anthologies*』(1961)、そして『*A History of Haiku*』(1963)を出版した一年後にブライスは旅立ちました。

# 「平 氣」

小 谷 集 一 選



忘れ癖平気になってきた怖さ  
小物です平気で嘘がつけません  
平気ですどこへ行くのもノーマイク  
優先席占領している長い脚  
甘えん坊平気で他人を振り回す  
引き出しはどれも施錠はしてません  
消費税アップ平気でいられない  
平気ではおれぬ年金目減りする  
福島をどこ吹く風と再稼動  
借金が一千兆もあるお国  
過去隠し平気な顔で輪に入る  
かる鴨の列アクセルを気にしない  
明日は明日泣くだけ泣いてもう平気  
エアコンは無しでも平気戦前派  
訓練の成果地震に慌てない  
ロボットの妻は平気で舟をこぐ  
平気ではおられぬ妻の厚化粧  
特価品でも平気で値切る年齢になる  
迷わずに困った時の死んだ振り  
石段の数へ平気な土踏まず  
平気ではないけど腹は立てぬ主義

|      |     |     |
|------|-----|-----|
| 京都府  | 岸本  | 宏子  |
| 鳥取市  | 永原  | 昌鼓  |
| 鳥取市  | 米澤  | 俣子  |
| 大阪府  | 池田市 | 上山  |
| 池田市  | 吉村  | 一風  |
| 大阪府  | 寺井  | 弘子  |
| 大阪市  | 脇田  | 雅美  |
| 江南市  | 藤田  | 千休  |
| 豊橋市  | 江島  | 勝弘  |
| 大阪市  | 横山  | 捷也  |
| 和泉市  | 佐藤  | 古拙  |
| 黒石市  | 関本  | かつ子 |
| 大山市  | 森本  | 弘風  |
| 交野市  | 村上  | 玄也  |
| 堺市   | 田中  | 章子  |
| 三田市  | 伏見  | 雅明  |
| 大阪市  | 鈴木  | いさお |
| 藤井寺市 | 板東  | 倫子  |
| 大阪市  | 吉野  | いさお |
| 鳥取市  | 三島  | 淞丘  |
| 松江市  | 片山  | かずお |
| 高槻市  |     |     |

動じない人はお金を持っている  
赤信号ゆうゆうと行くおじいさん  
我慢して平気平気と子には言う  
何事も平気な妻で楽なボク  
平気ではないからそっと目を閉じる  
二枚舌覗かれたって慌てない  
セシウムが溢れ平気でいられない  
くつついたり別れたりしても五度目  
弱そうに見えてるわりに動じない  
穏やかな平気を装うデスマスク  
逢って来て平気よそおいねぎ刻む  
見る方も平気になって来たおへそ  
期待などしてないから平気です  
負けたって客は減らない甲子園  
後世に平気で残す国の付け  
佳

支持率に平気な総理突っ走る  
平気げに見える女の負け惜しみ  
繕うた平気な顔にだまされる  
指切りも平気で破る赤い爪  
陰口を平気で無視の肝っ玉

人  
売れぬ日も平気な顔の時間給  
地  
たいていのことは笑って受け流す  
天  
五十年聞けば軒も子守唄  
軸  
真つ直ぐに歩けば怖いものはない

|       |     |     |
|-------|-----|-----|
| 備前市   | 森   | ふみか |
| 奈良市   | 大久保 | 真澄  |
| 大阪市   | 笠嶋  | 恵美  |
| 京都市   | 坪井  | 孝一  |
| 高槻市   | 島田  | 千鶴子 |
| 高槻市   | 富田  | 美義  |
| 堺市    | 遠山  | 唯教  |
| 四條畷市  | 吉岡  | 修   |
| 東大阪市  | 北村  | 賢子  |
| 大阪府   | 初山  | 隆盛  |
| 奈良県   | 渡辺  | 富子  |
| 堺市    | 矢倉  | 五月  |
| 貝塚市   | 吉道  | あかね |
| 三田市   | 堀   | 正和  |
| 河内長野市 | 渡邊  | 修   |
| 神戸市   | 伊勢田 | 毅   |
| 香芝市   | 大内  | 朝子  |
| 寝屋川市  | 富山  | ルイ子 |
| 茨木市   | 藤井  | 正雄  |
| 豊中市   | 水野  | 黒兎  |
| 和歌山市  | 福井  | 菜摘  |
| 弘前市   | 高瀬  | 霜石  |
| 三田市   | 福田  | 好文  |



# 「札 束」

小 川 て る み 選



札束に縁なく生きて恙無い  
庶民には縁のなかつた億の束  
帯といて散らしてみたい札の束  
札束が命の次である不幸  
札束に触らなくても生きられる  
札束を持てばおのずと急ぎ足  
札束と愛天秤にかけた悔い  
ブライドが札束なんか気にしない  
札束じゃホントの愛は買えません  
札束を溜めてあつさり逝かはった  
札束の顔を見ぬ間に減る預金  
総選挙鍊金術のボスがいる  
商談へ札束胸で指図する  
札束がタンスの奥であくびする  
金策中夢にまで見る札の束  
札束を見せられ乗った口車  
札束より愛を信じていた不覚  
札束で買えぬ子の愛親の愛  
札束が不気味に泳ぐ選挙戦  
札束の諭吉に恋をしています  
私財投げうつ札束に有る誇り  
札束を入れるサイフが見つからず

和歌山市 喜多 准一  
豊中市 松尾美智代  
備前市 森 ふみか  
篠山市 酒井 健二  
枚方市 寺川 弘一  
堺市 志田 千代  
大山市 金子美千代  
大阪市 榎本日の出  
鳥取市 永原 昌鼓  
大阪市 津村志華子  
高槻市 初代 正彦  
黒石市 佐藤 古拙  
大阪市 神夏磯典子  
堺市 矢倉 五月  
唐津市 井上 勝視  
大阪府 桑田ゆきの  
篠山市 遠山 可住  
大阪府 畑中 節子  
池田市 上山 堅坊  
和歌山市 柏原 夕胡  
大阪市 寺井 弘子  
河内長野市 谷 久美子

復興へ札束欲しい震災地  
札束で叩く原発再稼働  
札束が絡み友情罅が入り  
札束がゴミの中から出たニュース  
寄進の名札束順に並べられ  
札束の匂いに寄つてくるヒト科  
札束に媚は売らない父ゆずり  
すれ違いが続く札束とのご縁  
札束に揺れた心を戒める  
札束によろめきそうな正義感  
札束のエサに金魚が寄つてくる  
原発の陰で動いた札の束  
神の死角で札束が喋り出す  
札束に包まれ気付く孤独感  
札束へあつさり曲げた主義主張  
住  
札束を積んでも買えぬ母の愛  
札束が並ぶと風の向き変わる  
札束を積んで宇宙へ行く準備  
脱税の札束地下でカビ臭い  
札束を積んで黒から白になる  
人  
札束はいつも対角線にいる  
地  
人間のもろさを喰う札の束  
天  
札束を積んで愛には飢えている  
軸  
札束をどんと積まれりゃ気もかわる

弘前市 岡本 花匠  
大州市 中居 善信  
唐津市 山口 高明  
札幌市 佐藤登美子  
三田市 北野 哲男  
松江市 三島 湊丘  
東大阪市 北村 賢子  
紀の川市 工藤千代子  
岡山市 楠原 富子  
鳥取市 福西 茶子  
弘前市 福士 慕情  
鳥取市 岸本 宏章  
西予市 黒田 茂代  
高槻市 富田 保子  
奈良県 渡辺 富子  
大阪市 板東 倫子  
茨木市 藤井 正雄  
横浜市 菊地 政勝  
香南市 桑名 孝雄  
高槻市 吉道あかね  
弘前市 高瀬 霜石  
和歌山市 福井 菜摘  
香芝市 大内 朝子

「おっとり」

関 本 かつ子 選



おぼっちゃま育ちですかと聞かれます  
おっとりできる時間の小宇宙  
おつとりの筈の老後がまた目減り  
おつとりがすぎて歯車かみ合わず  
煎り豆をおつとりの子にまた頼む  
ぬるま湯に籠がゆるんできた日本  
おつとりと時代に合わぬ子を案じ  
おつとりの妻にいらいだまだ化粧  
病人の介護おつとりなど出来ぬ  
つい手出ししたくなるよなのろい所作  
午後池おつとり亀の甲羅干し  
成るように成るさと明日を疑わず  
平成のトラは野性を見失う  
一日がおつとり廻る老夫婦  
おつとりやおまへん私慎重派  
おつとりが本気で怒るとき怖い  
ゴム伸びておつとりしすぎではないか  
おつとりと生きてふくらしたまふま  
おつとりと活断層の上に住む  
おつとりとしていて語尾が乱れない  
財はなし欲も捨てて卒寿越え  
世の中が人がどうあれ慌てない

弘前市 稲見 則彦  
高槻市 初代 正彦  
高槻市 富田 美義  
和歌山市 福井 菜摘  
可児市 板山まみ子  
奈良市 米田 恭昌  
大山市 金子美千代  
松江市 小川 注湖  
鳥取市 永原 昌鼓  
堺市 村上 玄也  
泉佐野市 稲葉 洋  
津市 北村 松風  
紀の川市 宇野 幹子  
鳥取市 高浜 勇  
大和郡山市 坊農 柳弘  
鳥取県 西谷 悦子  
松江市 石橋 芳山  
堺市 奥 時雄  
明石市 桃谷 和郎  
唐津市 仁部 四郎  
唐津市 井上 勝視  
和歌山市 平田 元三

おっとりとしてはおれないタイガース  
定年後目覚し時計使わない  
おつとりと落ちる点滴早めてる  
おつとりと構えて天に逆らわず  
任せたら時間内には仕上がりぬ  
おつとりと待っていたのでまだ一人  
番犬はおつとりどなたにも懐く  
おつとりの人とは行かぬバスツアー  
お育ちの良さがおつとりさせている  
半開きの眼でおわす村地蔵  
おつとりへアイスクリームとけだした  
おつとりと構え笑っている無口  
信楽の狸おつとり俺を見る  
おつとりの妻の笑顔に救われる

住

ジョークだと一晩たつてから気付く  
ひとしきり笑った後で笑う人  
切り札を持つておつとり構えてる  
おつとりの子の特急に乘せたがり  
おつとりと流れて川が生むドラマ

人

騙されたまんまできっと天国へ

地

瀬戸際を生きておつとり身につける

天

いい処褒めてゆつくり待つてやる

軸

まあいいさずと付き合うこの持病

枚方市 二宮 山久  
松山市 神野きつこ  
鳥取市 夏目 一粋  
鳥取市 岸本 宏章  
和歌山市 柏原 夕胡  
富田林市 中崎 深雪  
鳥取市 福西 茶子  
岡山市 工藤千代子  
東大阪市 北村 賢子  
弘前市 今 愁女  
八尾市 村上ミツ子  
堺市 遠山 唯教  
弘前市 福士 慕情  
江南市 脇田 雅美  
香芝市 大内 朝子  
三田市 堀 正和  
奈良市 大久保眞澄  
貝塚市 石田ひろ子  
池田市 上山 堅坊  
羽曳野市 徳山みつこ  
弘前市 高瀬 霜石  
京都市 榎本 宏子  
大阪市 坂 裕之



## 追悼

# 森井 菁居さんを偲ぶ

竹原川柳会 岩 本 笑 子

「菁居<sup>せいいきよ</sup>」という呼名を聞かなくなつて、  
久しい。あの笑顔一ぱいの声で高らかに  
呼名されていた菁居さん。いつか必ず、  
句会に戻つて来てくださると、信じてい  
たのに……

長い間川柳に親しみ、川柳句集『愛す  
れば』を発刊され、また書家として活躍  
されていた菁居さん。竹原の大会ではそ  
の腕を発揮され、立て看板や舞台の垂れ  
幕など気軽に引き受けられ、大会の縁の  
下の力持ちでした。

平成九年六月には台風8号の中、蘭幸  
会長と菁居さん、笑子の三人で、四師の  
追悼川柳大会へ参加したのも、今では思  
い出となりました。町でお逢いしても、  
「よっ」と片手を上げてにこやかに話し  
かけて下さいました。

去る六月二十八日、菁居さんは帰らぬ  
人となりました。享年七十五。あまり  
にも早いお別れでした。

### 頂点に佇つてもついて来る昔 菁居

式場の遺影の横に立ててあり、自筆の  
句でした。奥様にお聞きすると、この句  
が好きで、何十枚も書いてあった内の一  
枚ですと言われました。竹原川柳会を代  
表して、小島蘭幸会長が、弔吟を拝読さ  
れると、どこからか菁居さんの声が聞こ  
えたような気がしました。

愛妻家だった菁居さん  
子煩悩だった菁居さん  
安らかに眠り下さい。

合 掌

## 遺 句 抄

愛すればこそこの冬をこの坂を  
生き方の違いを敵のように言う  
仕送りが済んだらなんと適齡期  
しゃんとせんかいとふるさと夕焼ける  
柿一つ残つて冬の庭ならん  
終止符が欲しく夜中に墨をする  
無位無冠よろしみのりの風とい  
る世渡りが下手で本音が出てしま  
う男坂軌道修正考えぬ  
レイアウト変えてもやはり二人きり  
萩が散る何も無かったように散る  
喝采も知らずにジャガは咲いて散り  
子育てに正解という文字は無い  
セールスに向く童顔に生まれつき  
日々好日妻の寝息があなたかし  
木のぼりをする少年がいた安堵  
無視された一人が正論かも知れぬ  
頂上に佇つてもついてくる昔

# 初より教室

題 — ぼろぼろ

鈴木公弘

紛らわしかったのか、課題を「ぼろぼろ」「ちほち」と読み間違えて作られた方がありました。題詠の場合には題を間違えると致命的になることがあります。まずはしっかりと読むことから始めましょう。

## 【課題を読み間違えた句】

原 ぼろぼろで縦横糸が絡み合い  
添 縦横の反論からみほろぼろに

原 句からは何の糸が絡み合っているのか読み取れません。仮の話ですが「自己主張に対する反対意見」という糸にしました。

原 ぼろぼろのグロープ温い息をかけ

原 大阪人ぼちぼちでんな御挨拶

原 ぼろぼろになつても夢を追いか求め

原 すり切れたジーンズ履いて若がえり

原 気がゆるみポロポロミスが顔を出す

以上の五句はいずれも一句立ちしています。課題の取り違えがなかったら入選も可能でした。

原 ぼろぼろに心の窓を割る悪魔  
添 ぼろぼろに心の窓を割るいじめ

悪魔という実態の抽象的なものを使うと相手（選者・読者）に真相が伝わりにくくなります。具体的な事物を用いて書くことを勧めます。

## 【少し手直しした句】

原 砂の城ぼろぼろ嘘の出る民主

律子

添 民主党ぼろぼろ嘘がこぼれ出す

添 砂の城からぼろぼろ嘘を吐く政治

「砂の城」「嘘」「民主党」といった重量感のある語彙を一句の中に並べると処理がかなり難しくなります。一番言いたい事に絞って描くべきでしょう。

原 高三の夏が終わった甲子園

和幸

添 甲子園涙を吸った夏が近く

原 酔った口本根ぼろぼろ弾けさせ

道子

添 酔った口ぼろぼろ本音弾けさせ

誤字の有無を提出前に確認しましょう。

原 内閣府ぼろぼろ洩れる人事案

勝治

添 内閣府ぼろぼろ洩らす人事案

原 古稀過ぎてぼろぼろ語る悔いた過去（渡）修

添 年取ってぼろぼろ語る過去の悔い

古稀は節目ですが、それにこだわる必要はありません。悔いをぼろぼろ語る理由が過去の時間のほうが長くなったこと、自省の念が強くなってきたことによるものだと

読み手に理解してもらえばいいからです。

原 までしこが銀の涙をぼろぼろと 秋 星  
添 までしこの銀の涙を見てぼろり

テレビ・新聞その他みたことを川柳に描く場合、もつとも注意しなければいけないのは、映っている・書いてある場面をそのまま写生するのではなく、そうした事物を自分の手にとり、できれば感動や悲しみ等を添えて作品化することです。

原 カード明細帰宅時間が告げる嘘 利子

添 帰宅時間がカード明細からバレる

原 大樹の肌日焼けで捲れぼろぼろだ とも湖

添 日焼けした大樹の肌がぼろぼろと

原 ぼろぼろと嘘の皮剥げ心闇 紀美恵

添 ぼろぼろと嘘はげてゆく闇の中

原 食へるたび麻の口から出るご飯 登美子

添 食へるたび麻痺の口から洩れるめし

●には「痺」の病タレのない文字が書いてありました。再確認してください。また麻痺という状態から考えて、「ご飯が「出る」というより「洩れる」ほうがふさわしいのではないでしようか。

原 ぼろぼろの煎玉子にも有る主張 心 咲

添 ぼろぼろの炒り玉子にもある主張

原 敗てぼろ勝てぼろぼろなお激し 元 三

添 負けてポロ勝ってぼろぼろ止まらない

原 悔しさに涙ぼろぼろ遺瀧ない

ミヨノ

添悔しさに涙ぼろぼろ遣る瀬ない  
原落花生よく出き掘るとぼろぼろと (山) 久子  
添落花生むけばぼろぼろ飛んで出る

「ほり」と「ほる」の漢字表記は異なり  
ます。「ほり」(名詞)は「堀」、「ほる」(動  
詞)は「掘る」と書きます。

原過去思い涙ぼろぼろ流す過去 開子  
添過去思ふ涙ぼろぼろ出て困る  
原ぼろぼろと愚痴が出たカウター 絹枝  
添ぼろぼろと愚痴って止まり木を漏らす

### 【入選句】

ぼろぼろとし出した予報通りの日 (坂) のり子  
合歓の花夏帽に受け坂登る 冷子

隣りから奥さんのグチぼろぼろと 一文  
ぼろぼろと隠した機密洩れだした 憲

「隠した機密ぼろぼろと漏れている」

ぼろぼろと鳥の世界もラブコール 眞砂子  
庭石にぼろぼろこぼす夏の萩 俊子  
ぼろぼろと音を残して雨は止む こすえ

口元から溢れる老いを止められず 友子  
ぼろぼろと雨降り出して居座る気 青生  
おしん観てみんなぼろぼろ泣く茶の間 晴雄

言い出すとぼろぼろ文句止まらない (高) 弥生  
ビール泡ぼろぼろ本音吹き出した 安子  
ぼろぼろとパン屑こぼし児に戻る (山) 妙子  
ぼろぼろと愚痴出ぬ内に話題変え 秀子  
ひまわりの涙ぼろぼろ溶けて秋 和香子

ぼろぼろと過去が手の指抜けて行く 孔一  
ぼろぼろと流す涙も芸のうち 一泉  
「・・・も芸のうち」の多作を避けてく  
ださい。流れ句になっていきます。

デート中ぼろぼろ落ちる付け焼き刃 宏造  
ぼろぼろが感極まって号泣に 宏之  
更年期ぼろぼろ落とすご飯つぶ きっこ

むしろ「老年期」のほうがよいかもしれ  
ませんが、更年期にこだわった理由を推察  
して、変えませんでした。

ぼろぼろと愚痴を吐いても夫婦する 温子  
ぼろぼろと嘘が剥がれて苦笑い 正子  
ぼろぼろと嬉しい便り金・銀・銅 洋一  
金メダル決まりぼろぼろ貴い泣く 孝明  
幼児ぼろぼろこぼす涙に嘘はない 利夫  
アスリート流す涙に嘘はない 志津子

「アスリート涙ぼろぼろ嘘はない」  
失言もぼろぼろ出ます旅の宿 美紗子  
火葬場の涙ぼろぼろ戸が締り 松風

目付けの良さを買いましたが、このまま  
では戸締まりという意味になりますので  
「戸が締まり」のほうがよいでしょう。

両手からぼろぼろ落ちる欲の種 (株) 玲子  
手の中からフライド落ちて軽くなる (備) 富子  
ぼろぼろの涙に弱い男たち 裕美

瘡蓋がぼろぼろ過去を消していく (前) 洋子

ぼろぼろと失言をする気の緩み 治子  
パン菓子がぼろぼろ逃げる歯の隙間 ふみか  
子の涙ぼろぼろ許す気にさせる 義雄  
アンケートにいじめぼろぼろ露見する 寒之

隠す程ぼろぼろ零れ出る秘密 ひろ子  
リベンジを誓う涙だぼろぼろと 美知江

【今月の推せん句】  
ぼろぼろと森のドラマになる木の美

山本 エミ

木の実の落ちる様を「森のドラマ」ち表  
現したことによって人間との共通性が強ま  
り、深みのある作品になりました。

ぼろぼろの飯元氣に踊るフライパン

宇賀 史郎

着眼と省略の程よさがすべてです。ただ、  
この状況を作者に引き寄せて、たとえば「ぼ  
ろぼろの飯を躍らすフライパン」と書いて  
いたら、もつと凄味が出たと思います。  
生前がぼろぼろ浮かぶ形見分け

藤塚 克三

形見分けという複雑な心境が交錯する場  
面を上手くまとめきっています。

### 【私の句】

羊ぼろぼろ親の後ろを見て歩く  
里山のみんなぼろぼろ逝くんだね  
(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

# 秀句鑑賞

同人吟 村上玄也

— 9月号から

せめてもの余生のための株無慘

中村 穀子

鑑賞文を書くという事で日頃は流し読みしている句をじっくりと読んでゆくと、改めて深い意味を見出すことがあります。そして今回も素晴らしい句に沢山出会うことが出来ました。

川柳は発表された時点から「ひとり歩きする」とどこかで教わった記憶があります。一句の持つ意味が読む人によってそれぞれに違った意味を持つことがしばしばあると言うものです。今回の秀句鑑賞に当って作者の狙いは何かに気を配りながら、共感を覚えさせられた句を取り上げて頂きました。

ヤケ酒も発泡酒では気が抜ける

佐藤 忠昭

ヤケ酒ならどんな酒でも良いという訳には行かないのが酒飲みです。気分がくしゃくしゃして、気晴らしに飲む酒はやはりまがい物の発泡酒では気分が乗りません。ばあーと本物のビールを大ジョッキでやってこそ氣も晴れると言うものです。

老後のためと買っておいた株がリーマンショックで暴落して以降、引き続く円高で株価は一向に回復する兆しが見えません。余生を少しでもゆとりあるものにしたと思っていた夢が無残にも引き裂かれた思いです。下の句の最後に持ってこられた「無残」がその思いを強烈に物語っています。

過不足のない一言が難しい

矢野 梓

人に意志を伝えるのに言いつぎたり、言いつりなかつたりして後でよく後悔をします。適切な言葉を使って明瞭に伝えることの難しさ、「過不足のない一言」は素晴らしい表現だと思えます。

身に覚えあるから使つゝ黙秘権

片山 忠

黙秘権は自己に不利な供述を強要されない権利で憲法が基本的人権として保護しています

す。身に覚えがなければ、きっぱりと否定すればよいものを、そうではないから黙秘権を行使しているのだと思ってしまう。

新しい靴履き潰すまで生きてやる

森本 弘風

この歳になると、新しい靴を買ってもそんなに履いて出る機会が多い訳ではありません。それだけに履きつぶすまで生きてやると言うのは、これからの力強く長生きしてやろうと言う決意の表明でしょう。

おたがいにぼやく相手の長電話

梶原 弘光

お互い何やかやと喋ってついつい長話になってしまふ。やっと電話を切って「あいつの話は長いからな」とお互いが相手のせいにして長電話の言い訳をしているのです。

口下手ですぐに同調してしまふ

江見 見清

口下手はご謙遜でしょうが、相手の言い分に上手く言いかえす言葉が見付からず、面倒になってしまつて同調しておくという事はあることです。

臓器移植子は散り散りに生きている

米田 恭昌

臓器移植法が改正されて、今年六月わが国で初めて十五歳未満の男児が脳死判定されて

臓器提供がなされました。ご両親やご親族の大変重い決断でいくつもの命が救われたのです。その時の親御さんの「何人かの人の身体の一部として生きる息子は私の誇りです」と言われた言葉が胸を打ちました。

### ケーキ買つて来たレントゲンの結果

太田扶美代

心配していたレントゲン検査の結果が、どこも異常がなかったと、その嬉しさで飲める口ならさしずめ一杯やろうという事でしようが、作者はケーキを食べて喜びをかみしめたと思います。

### 黄信号気付かず神に叱られる

竹治かし

健康もそうだし、仕事の面でもそうなんです。先行きに黄信号が点って注意を促してくれているのに、気付かず或いは無視をして大変な失敗をしてしまうことがあります。折角の神様の思し召しに反した天罰です。過信なのでしょう。事を甘く見てしまうからなのでしょう。

### もう十歳若かったらと逃げている

米澤 俣子

町内会を始め色んな会で役を仰せつかります。それをお断りするのにもう少し若ければお引き受けるのですがと、高齢を盾にする

のです。

### ケータイの一機能だけ知っている

森山 盛桜

私もまったく同じです。最近のケータイは色んな機能が付きすぎてとても覚えることはできません。そんな機能の百分の一も使っていないのが実態です。一機能だけ知っているは、そんな多機能のケータイを揶揄して発せられた言葉だろうと思います。

### 栄転に子は転校で苛められ

奥村 五月

サラリーマンには転勤はつきものです。子供が大きくなれば単身赴任と言うことになるのでしようが、小・中学生くらいだと一緒に移動して転校と言うことになります。その時子供にとって一番の問題は言葉なのです。土地土地での方言や独特の訛りなど、私の子も同じ経験をして苦労しましたが、これが苛めの恰好の対象になるのです。この句は親の栄転の陰でと表現して苛めを受けている子供を浮かび上がらせています。

### ベンギンのように並んだ新大臣

板東 倫子

毎年のように総理大臣が変わりその都度新内閣が出来て認証式の後の記念撮影。議員たちにとっての憧れのモーニング姿は傍から見

れば誠にベンギンが並んだごとくです。

### 責任を取るとは言わぬ評論家

岸本 宏章

政治評論家、経済評論家、スポーツ評論家等々評論家と称する方々が無数に登場して意見を述べます。どれも成程と思わせるのですが、さてそれが確実に当たっているのか、いわば言い放しで責任を取ると言う話はずいぶん聞いたことがあります。

### 思い出を捨てかねゴミの中で住む

岡本 昇

断捨離と言う新語が流行って身の要らないものを整理することを奨励されますが、いざ整理しようとするとき色んな思い出が浮かんできて捨てきれずまた置いておくと言うことの繰り返しをしています。他人から見ればゴミに等しい物を後生大事に仕舞っているのです。作者は男性ですが、どうやらこの傾向は私の周辺を見ても女性より男性に多く見られるようです。

### 物指しの違いが溝を埋めきれず

蘭田 獏香

会議や交渉事でいろいろな意見を述べ合う中で、どうしても折り合わないで行き詰まる事が起こります。結局は価値観の違い、物を見る尺度の違いが根本にあるからなのでしょう。



―水煙抄

# 秀句鑑賞

―9月号から

三浦 強 一

手を取ってホップステップとっこいしょ

菅 田 かつ子

高齢化が進んでいる。ここで大事なことは健康寿命を伸ばすことである。川柳で脳トレを、ウォーキングで筋トレをし、ご主人と今日も元気にスタート。思わず出る「どっこいしょ」のユーモアがいい。

ベン舘舘の指がスマホにそっぽ向く

平 野 あずま

ケータイからスマートフォンへと時代は進んでいるが、ベン舘舘を勲章としているあずまさんには関係のない話。友情は便箋でと今日もせっせとベンを握っている。

採算を考え止めたバイキング

木 村 忠 義

高齢者にはバイキング代金の元は取れない。欲張っても皿に余してしまう。ホテル側は採算上勧めたい客層ではあるが。上五が発見。

厳しくて煙たい父が子に戻る

辻 村 ヒロ

病を得て痴呆気味の父はめっきり老け込んで大人しく、従順になった。子供の頃の父はどこへ行ったのかと寂しくなる心境を詠んだ。

傘になるあなたは確か言った筈

池 田 純 子

「あなたの傘になってあげる」にこりり参ったあの日。「そんなこと言ったかな」ととほける旦那。ストーリーの展開は読者におまかせの一句。

煮こぼれる程にはしゃいだクラス会

松 本 秋 子

半世紀ぶりの友もたちまち昔のクラスメートとなつて話題沸騰。誰もが経験するクラス会の風景だが、上五が秀逸。

猛練習やつとふんわりオムライス

大 前 安 子

テレビ料理教室の通りやつても型がいまいち。夫や子供に褒められなくて猛練習。読者も食べてみたくなるオムライスが目につく。

ママの顔ダイナミックに描く園児

前 田 喜美子

園児の描くママは大体丸顔で髪はふつくら、目はパッチリ。似ていなくてもママはここに。ダイナミックが効いた。

つまりけば飛び込む深い胸がある

藤 井 寿 代

飛び込む胸は母親か、夫か、親友か、そんな人のいる幸せな寿代さん。だから失敗を恐れずに前向きにゴーゴー。

印籠のようにへその緒子に見せる

神 野 きつこ

へその緒は母と子の絆の証。子供に命の尊さ、絆の大切さを教えてください。「印籠のように」が面白い。

終章も未だ直球でする勝負

木 田 比呂朗

愚直と言われても一本道を歩いてきた人生。終章も直球で真つ向勝負しようというその意気やよしである。直球が効いた。

白内障術後は鏡見たくなし

三 谷 圭 角

私事で恐縮だが家内が最近白内障の手術をした。この句を見せたところ大きくうなずいた。すべてに満足とはいかないものですね。

皇室に畏れ多くも週刊誌

磯 部 義 雄

週刊誌には皇室に関する記事が毎号のように載っている。民主化の現われとしても昭和一桁にとつては誠に畏れ多いことである。しかし両陛下下のお写真には心とまされます。



# 民族の詩歌 (5)

## ―濁音について

### 三好 専平

「原点」も呉音。すべて、漢語で仏教とも関係がある。

また、語の中の濁音も避けられた。万

葉集、額田王の歌から

熱田津尔 船乗世武登 月待者 潮毛可

奈比沼 今者許藝乞菜 (卷一・八)

「にきたつに ふなのりせむと つき  
まては しほもかなひぬ いまはこぎいでな」

「こぎいでな」については、「こぎいてな」とする説もある。

付属語（助詞・助動詞）の語頭濁音は（ず・じ・べし・ごとし・が・だに・ばかり・ば・ども・がな・ばや）と豊富である。これらの言葉は、文や文節の頭にくることは稀なので多いのだと思われる。

オノマトベ（擬声語・擬態語）には、語頭濁音が多い。「ガラガラ・ジクジク・ドンドン・ベトベト」など、いくらでも創造が可能である。

東北方言は「ズーズー弁」と言われ濁音が多い。現代の東京においてもあんまり好まれない。東北も沖縄も母音が三つ

しかない。「あ」「い」と「う」の中間音。「え」と「お」の中間音。このために濁音化が進んだとも考えられる。

「方言撲滅運動」ともおぼしき学習指導要領が、平成になっても出る。共通語は良い言葉で、方言はよくない。大阪弁も一段低い言葉とされていた。

濁音を表す「濁点」は「チョンチョン」ともいわれる。僧侶によつて発明されたらしい。「チョン」が三つも四つもついた文献が残る。どう読まれたかわからない。大和言葉で文を書く人は、この「濁点」を使わなかった。むしろ忌み嫌った。助動詞の「ず」でも濁点を打たない。これが誤読のもとになり、ユーモアも作り出す。終戦の詔勅にすら「濁点」は使われていない。

「前省」世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レヨク朕カ意ヲ体セヨ」候文などの手紙（口語体）にも濁点を打たなかった。

次回は、「漣濁」などについて考えたい。（民族の詩は民族の詩歌に改題します）

古来の日本語には、濁音ではじまる自立語は存在しなかった。口蓋や喉、鼻などに力を入れて出す音が好まれなかったであろう。漢字が渡来し、仏教が広まるにつれて、「語頭濁音」が増えてきた。八月号酒井真由さんの巻頭句より

街路樹も私も雨で生きかえる

夏至の雨自動ピアノのノクターン

原点に帰ろう旅をしませんか

「街路樹」は慣用句。漢音はカイ。「夏至」は呉音で、この夏は「僧侶の安居する期間。」

「自動」の自はこれも呉音で起点を示す。

# 『麻生路郎読本』 余滴 (11)

## 神経衰弱の路郎 ①

栗原道夫

### 長男ロンドンの死

昭和2年3月1日(火) 午前0時45分、路郎(当時満38歳)は長男のロンドン(当時満7歳)をジフテリアで亡くした。

『川柳雑誌』4月号に、路郎は「哀傷篇」の題で次の五句を発表した。

おほきな事實 子が死んでゐる  
まだ弟があるやうにいふ悔み聞き  
だす入りの一つ缺けてもがたがたし  
被人のない帽子があるに気がつまり

学校の横に住みて

子を死なし學校に子の多いこと  
「だす入り」は、「タース入り」のことか。

告別式は兵庫県武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地の一(現・西宮市鳴尾町三丁目3番15)

号辺り。現住所は川端一步の調査による。以下同じ)の自宅で2日午後1時半から3時半まで行われた。葬儀委員長は、路郎の勤務先の桃谷順天館広告部長長野晴濱が務めた。『川柳雑誌』同号では、「悼故ロンドン君」と題して、当日の参列者の名前や弔電・悼句等に4頁、太田徹底郎の「ロンちゃん」の死」に2頁、計6頁も割いている。5月号では、井上剣花坊・井上信子の「可愛い魂」、川村花菱の「天國の子供」、亀井花童子の「噫!ロンドン君」の悼文が2頁掲載されている。悼句の一部と井上剣花坊・井上信子の「可愛い魂」を載せておく。

片假名の清書の遺墨いたましや

花岡 百樹

天國の方へ童謡消えて行く 安川久流美  
おやつ時ふと死んだ子の癖思ふ

前田 雀郎

砂手本さぞ勵むらん／＼ 關本 雅幽  
器から器へ移す水の量 川上 日車  
春いまだ寒し西風雨を呼ぶ 三條東洋鬼  
膝の上軽きが淋し炭をつぐ 林田 馬行

可愛い魂

ロンドン君が死去されたといふ黒梓ハガキを今川柳雑誌社から受取つてビツクリしました。信子は\*雑誌で御病氣のことを知つて御見舞を上げた次第ですが、剣花坊ははじめて知つたのです。うしろあたまを何かでガンとた、かれたやうに何ともいへない淋しさに囚はれました。あなた方は一度子を亡うた御経験はおありなさるが(筆者註一大正7年次女御世子を満2歳で、大正8年三女御幸を満1歳で亡くしている)、私共はまだ経験が無い。そんなことが有つたら迎もたまるまい。氣が狂うかも知れない、と思ふ。ことにあの藝術的な顔をして居たロンドン君がもうこの世に居ないといふことは、一度御目にかつたことのある剣花坊にはたまらない淋しさです。どうぞ御二人様、御氣落しなくおからだを大切にして下さい。其内弔句でも作つて、あの可愛い魂に捧げようと思ふて居ます。

純子君(筆者註一長女。当時満11歳)、アー

ト君（筆者註―次男。当時満4歳）はじめ多くの同胞の方がツラリと悲しさうな顔で、並んで御通夜をせられるのが目の先にちらつきます。

（三月五日）路郎宛

\*「川柳雑誌」3月号の「編輯後記」（塚崎松郎）に、（▲）一月以降風邪のために、悩まされてゐられた主幹路郎氏が殆んどよくなられたのでよこんである、間もなくその御家庭に引續いて四人のお子達が流感に罹られ、蔑乃夫人までが御介抱に疲れて居られる有様です。その中を路郎氏は、本號の編輯やいろいろな事務に忙しくされて居られるので、本號當欄は私が代筆することになりました。只今では他のお子達はや、輕快の様ですが、あの有名なロンちやんが七八日ごろから十數日の間絶食の状態をつづけられ、こゝ二三日は全く危険状態なので、昨日から看護婦や附添婦の人々やらで病床に詰め切つて居られる有様です。私は今お子さん達の枕邊で路郎氏や蔑乃さん等の御心痛をお察ししながら筆を執つて居ます。（二・二五・松郎生）とある。

4月号の「編輯後記」で、路郎はこう記す。（世は春になつた。けれども私のこゝろは長閑でもなんでもない。大正天皇が崩御され

てからこのかた私の家にも不愉快なこと、惨ましきことばかりがおとづれて、ほんとに心をひらいて談笑することがない。一月から二月へかけて家族が全部病臥した。アトがひきつけてから肺炎になり四十度の高熱が續いた。リリ（筆者註―五女。当時満2歳）が矢張り四十度の熱が續いた。他の軽いものうちに數えられてゐた、ロンドンが九日から病臥して絶食状態になり、三月一日にはジフテリアで遂に亡くなつてしまつた。亡くなつたからとて、あとの病人達を控へてゐては、がつかりもしてゐられない。只管病を養つてゐたが七日の地震（筆者註―北丹後地震M7.3。京都市や兵庫県洲本市でも震度5を記録）のあとから一層面白くなくなつて、遂に十五日には五女のリリが、大阪の大學病院に入院して手術をうけなければならなくなつた（筆者註―中耳炎が悪化して阪大病院で頭蓋骨を削り取る手術を受けた。アトも純子も病院へ連れて行つた。私と蔑乃と女中と總がかりである。幸ひ長崎醫學士（筆者註―路郎が指導していた阪大川柳会の長崎柳秀のこと）のト方ならぬ御盡力で兎も角も少しは落ちつきを見るに至つたが―葬式、入院と云つた引きつづく不幸に多くの知友が全力を盡くしての好意は忘れやうとしても忘れが

たいものとなつてゐる。ある親友のごときは\*神戸の五人心中などの眞似をやつてはいけなげと心から心配して呉れた。私の面白くないことばかりを申しあげてすまないが雑誌の方は私の家庭とは正反對に日に月に向いて來た。

\*昭和2年3月11日（金）東和汽船菊池吉造社長宅（神戸市北野町）で東和汽船支配人玉井辰三郎一家五人が心中した事件。辰三郎が、妻まつえ・長男篤・次男守・長女敏子（この年の正月に生まれた）に、猫いらずやカルチモンを飲ませ動脈を切断して殺し、自分は猟銃で心臓を撃つて死んだ。子供には白衣の死に装束を着せ、玉井夫妻の菊池夫妻へのお礼とお詫びの遺書が残されていた。（大阪朝日新聞）昭和2年3月13日の記事参照

### 路郎の入院と転居

このような不幸が重なる中、路郎も悪性の腸チフスで倒れ、4月9日（土）阪大病院に入院し、5月8日（日）退院した。一月後の6月8日（水）路郎一家は、鳴尾から大阪市西成区千本通五丁目七番地（現・西成区千本中一丁目16番21号）28号か、17番29号（36号辺り）に転居した。「川柳雑誌」

6月号「退院と轉居」に、次のようにある。原文は▲で改行しているが、それ以外の改行を／で示す。

▲私の入院は柳友の殆んど七分通りによつて悲觀されてゐたが幸にして黒杵を破棄して生還した。この生還は全く先輩や友人や醫者や看護婦や附添や其他の人々のたまものだと思つて只管感謝してゐる。五月八日に退院しておもむろに静養してゐる。今日の狀態では病氣に罹る以前よりも、もつとすぐれたからだになりさうな氣がするから御安心を乞ふ。▲憂鬱の家はロンドンの死によつて一層陰慘な空氣が漲つた。誰も彼も蒼い顔をしてゐるやうに思へてならない。熱が一寸出ても脅やかされる。それがためにほとんどの病氣を誘ひ出してゐるやうにさへ思へた。私が退院してからも容易にさうした冷めたい感じが去らない。それがために昨年来、ぼつ／＼頭を擡げてゐた宿替熱が急に高くなつた。それで急に引越すことになり、私と嫂乃とで家探しをはじめたが帯に短し襷に長しでなか／＼にい、家が見つからなかつたが、兎に角これなら辛棒が出来ぬこともなからうといふので取りきめたのが／＼大阪市西成區千本通五丁目七番地／＼で南北のあいだ今より狭いが明るい家である。南海線岸の里で下車して西北五

丁のところ。御來遊を乞ふ。(路郎生)

### 路郎の快復と有力同人退社

「川柳雜誌」5月号には、さすがに路郎の記事はない。6月号からは、「柳樽評釋廿四篇まで」の連載も再開。5・6月号の「編輯後記」は、路郎に代わつて塚崎松郎が担当。7月号からは路郎に戻っている。

7月9日(土)、路郎は橋本二柳子・庄萬よし・高橋かはるを伴ひ、夜行で川柳雜誌社松江支部(奈良井仙坊幹事)を訪れた。10日午前8時30分松江駅に到着し、松江支部柳人に迎えられ、下車せずそのまま出雲大社へ向かう。昼前に大社駅へ着くが、雨のため予定よりも早く2時過ぎに松江に到着し宍道湖畔の「なにわ館」に落ち着く。夜9時ごろから、松江市天神「みどり」で歓迎川柳大会。路郎は講演と兼題「花道」の選。三才と軸吟を載せておく。

(人) 花道へ一かたまりに捕手逃げ 天痴人  
(地) 花道は相合傘の巾に出来 かほる  
(天) 貰ひ泣き花道ばかり光つて居 蝶 朗  
(軸) 敵持ち又花道ですれ違ひ 同 路 郎  
花道の新派は客と間違へる

かはるの有名な句が、この時の作であることが知れる。句会のあと宴会が催され、午

前4時散会。翌日、昼前に松陽新報柳壇選者の米村あん馬を訪問。その後、根岸邸(小泉八雲旧居)・眞光寺(島根柳壇に重きをなした村穂珍馬の墓)を訪ね、午後8時過ぎの夜行に乗り、12日に帰阪した。

4月号に長男ロンドンの死を悼む「哀傷篇」五句を発表して以来、久しぶりに8月号に「白日句稿」十四句を発表している。数句載せておく。前書きの「ヘルン先生」とは、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)のこと。

鳴 尾

莓摘もろたばかりの嫁もある

岸の里

引越して變つた雲の出るところ

エプロンをかけると手紙ばかりかき

ヘルン先生の舊居を訪ふ(二句)

根岸邸刻みをのんだこともきき

蓮池へ今でも蔵のかげがさし

当時、鳴尾は莓を栽培する農家が多かった。

退院後ようやく快復してきた路郎の様子がうかがえるが、8月号の「編輯室から」で、有力同人の退社が報告されている。

〈新組織發表(筆者註)旧同人は特別社友

となり、賛助員・客員を本社<sup>の</sup>推薦によってお願いする」と共に、新に入社した人々と退社した人々とを左に掲げる。尤も退社した人々が必ずしも新組織に不平をいだいて出た譯ではなく、他の止むを得ざる理由によつて退社されたのであるから誤解のないやうに特に一言しておく。(中略)退社した人々では佐々木黙閣君、塚崎松郎君、石賀馬行君(筆者註)「川柳雑誌」昭和2年5月号「編輯後記」に、(同人馬行は今回「石賀」の姓を名乗ることになつた)とある、黒木英豆君、井上刀三君の五君である。松郎、馬行の兩君は從來本社<sup>の</sup>編輯部にあつて本誌のため大いに盡されたので、その勞を多とし退社送別會を開催(句報参照)したが生憎小生の勤務先に不幸があつた、め萬よし君に代つて司會をやつて貰つた。幸ひに兩君ともその意を諒として呉れたことをよろこんでゐる」とある。

「麻生路郎物語(同)同人の集散と橋本緑南」に、(松郎・馬行・鶴足(旧号英豆)・美乃作の連中、路郎の病後ある要求を持ち出し、訣別す(山雨樓メモ)とあり、「ある要求」とは何だったのか興味深い、今となつてはわからない。また、駒井美乃作(城南支部幹事)の名が、路郎の「編輯室から」にないのは、6月中には同人を辞退していた

からだろうか。7月号には同人名簿が掲載されていなが、6月号には、まだ駒井美乃作の名が見える。

庄萬よし「松郎馬行退社送別會」の報告を8月号に書いている。

七月十九日夕、道頓堀かき彌にて暑い濁つた道頓堀の水も、船べりから見る紅燈の影、ボートの往き來、シャツ一枚冷えたサイダーでくつろひた句會であつた。當日桃谷順天館主夫人逝去に付主幹路郎氏は出席されなかつた。選句披露後、馬行君は「前例なき退社送別會を謝し、主幹の意氣と熱とを目標として柳道に精進せん」ことを誓ひ、松郎君は「退社後も川柳雑誌のために應援するから同人諸君の奮闘を」望まれ、飯山君は「一日も早く兩君復活の日を見たし」と述べ萬よしは「兩君によつて同人となつた私が兩君のために送別會をする一人となつた人生」を語り柳談盡きずビール盡きて散會したのは十二時前。來會者は松郎、馬行の兩君と同人助六、かほる、三笑、飯山、ひろし、の諸君と私)

「川柳雑誌」昭和3年6月号「編輯後記」に、  
〈松郎、馬行、春魚、刀三、英豆の五氏は今回「使命會」なる結社を作り、川柳の指導啓發を行なひ、句集を發行されることになりました、會費は一ヶ月五十錢とのこと

です、健實に發展されんことを祈ります、(革郎記)とある。また、「改號と移轉」に、(河野春三氏は「春魚」と改號)とある。

昭和2年の一年間を振り返つて路郎は、「川柳雑誌」12月号の「編輯室から」に、次のやうに書いている。

〈三百六十五には決して短い日數ではないが雑誌を出したり、川柳の社會化のためにいろんな仕事をやつてゐると實に夢のやうに早い。夜が、日が飛ぶやうに過ぎる。回顧すれば本年は從來よりもより一層に悪戦苦闘とは云ひながらもよく闘つたと思つてゐる。私達の力の及ぶ限りのことをしたと思つてゐる。本誌もそれがために、うぬばれを抜きにしても一段とよくなつたことが知られる。多くの柳友の献身的努力が決して實を結ばないではおかぬことが知れる。來るべき昭和三年度のために一層の奮闘を祈つておく〉

「回顧すれば本年は從來よりもより一層に悪戦苦闘とは云ひながらもよく闘つたと思つてゐる」という言葉には、路郎の万感の思いが込められていてと感じる。昭和3年ロンドンの一周忌を迎える頃から路郎は神經衰弱になるが、次回に譲る。

■句集紹介

「風の彩」

黒田 能子 著

山本 義子

句集「風の彩」のご上梓まことにおめでとうございます。はつきり申しますと句集を発刊されますことは存じ上げませず、手元に頂戴いたしましてびっくりいたしました。「まあ可愛い」と思わず声に出しました。

能子さんは日ごろは、おしとやかな内に凛とされまして今は、西宮北口川柳会の重鎮として且つ、川柳塔本社ほか諸々の句会、勉強会にと大車輪のご活躍、まことにありがたうご存在でございます。

つらつら拝見いたしますに、この句集の根元はうるわしい家族愛からきていることがよく分かりました。カバーのデッサン、色合いの素晴らしさ可憐さに目をひかれしました。ご三女さんのお手になりますとか、パンザイを申し上げます。

この句集の紹介をさせていただくには門外漢の思い無きにも非ずですが、なにと

ぞお許し下さいませ。

句集は、年代別にまとめておられます。一章目の「遠い日」には、温かいお人柄のうちに健気なご様子が、句に浮かんでおります。

更年期信号無視で通過中

若い気であるのに歳を書かされる窓少し開けて考え直します

一つずつ飾りはずしていくも歳ばあちゃんも厳しいとはあるのです

二章目の「いのち」は、失礼ながら七年の歳月の経過と申しますか、今が旬という円熟な生きかたが十分、句に表現されていきます。

踏み台の高さ見通したてている  
大根を輪切りにしてる素直な日  
横道にそれた話がおもしろい

石ころもシヨックのたびに丸くなる  
髪染めず私はわたしらしくする

三章目の「いい笑顔」、この頃は私も西宮北口川柳会でお付き合いをいただき、温かい素直な句になるほどと頷いておりました。

いい笑顔美人でなくていいのです  
テーブルにみかん置いてるだけの幸

乾杯はいい汗かいてからにする  
折返し余力少し残しとく

七光りせつつかだから利用する

四章目の「花の種」、さすがこの辺りになると能子さんにも「アラ、マア、クスト」とする句がございまして嬉しくなります。

はすかにに座った方が見えやすい  
ふわふわと生きているのに草臥れる  
ほどほどのルールが二人暮らしにも  
いい人を演じすぎたかくたびれる  
てんでこ舞ハイハイと言いつぎたのか

最後五章目の「マイベース」、能子さんのおおらかさがご家族を友人を柳友を囲みこむ句の泉になつていと存じます。

目的は完走だからマイベース  
三時にはおやつ欲しくなる夫婦  
しよんぼりのあなたに点火してあげる  
じたばたと足音立てて生きてます  
志 奮のままで終らない

見当違いはご容赦くださいませ。この句集に接し、素直な心、作句の基本を教えてくださいいただきました。勉強に終点は無いと申します。

今後益々のご精進、お祈り申し上げます。



## 浅読み？ 深読み？

他人の作品を読むときは、先入観を持たず素直に向き合うのが礼儀です。そして、できるだけ作者の心情を正確に汲み取りたいものです。しかし、わずか十七音での表現であり、注釈もありませんので、時には的外れな鑑賞をしている場合もあります。私が最近「しまったな！」と思った例は、本誌七月号に掲載の「愛染帖」でのこと。ベストテンの中の、

礼状には使いたくないボールペン 藤井 則彦

という句です。この句の寸評に「ボールペンしか使ったことのない世代には理解できない句。それほど万年筆は廃れてきたが、やはり筆記用具の王様であろう」と記しました。七月号が届いてから読み返してみても、「あっ！」と思いました。「作者は毛筆を言っているのかも？」と気がついたのです。

再考しますと、年賀状などの改まった挨拶状には毛筆書きが主流です。最近パソコンが増えていますが、筆文字を使用しているのが圧倒的に多いようです。まして「礼状」ですから筆のことを言っているのは明白、と運まきながら気がつきました。これは、私が筆を使用する習慣がなかったので万年筆しか浮かんでこなかった、いわば、作者との生活習慣の違いから生じた「浅読み」です。もう一つ、

母の日の母はお経を読んでいる 原井 典子

という句について。あるカルチャー教室で、この句を含めた三十数句を「これは私が良いと思った句ばかりです。皆さんはどのように思われますか？ 良いと感じた句をチェックし

てその理由を述べてください」と配りました。いろいろな意見が出た中で、Mさんはこの句を挙げて、「作者の母にとって、母は亡くなっているの、もう何もしてあげられない。それでお経を上げておられる。その優しさにごろを動かされました」と言う意味の感想を述べられました。それを聞いて「えっ」と思いました。私の解釈とは全く違っていたからです。この作品は以前、川柳マガジンの「名句鑑賞」で取り上げ、「母の日なんて私には関係がないと言っても言うように、いつも通り仏壇に向かって私には関係がないとでも言うように、いつも通さんにお見せしていませんでした」

Mさんと私と、これほど受け取り方が違ってきたのは何故でしょう？ 掲出の句だけを読めばMさんの「読み」に無理はありません。同感の人も多いでしょう。しかし、私は同作者の「死ぬと言う母に死んだらいいと言う」という句を知っていましたので、「センチメンタルなことが嫌いな、ドライな親子関係」という先入観がありました。私の解釈はその情報によって「深読み」になったのかもしれません。また、私自身「母の日」などには無関心で、何もせずにきたものですから、その習慣が解釈の違いになったのでしょうか。

このように、作者と生活習慣や価値観が違うことによって、あるいは、作者に対する情報によって、浅読みになったり深読み過ぎたりすることがあります。作品を読んで楽しんでいくだけなら誰の迷惑にもならず、作者に不快な思いをさせることもありませんが、観賞文を書くとなると慎重に読まなければならない、と反省させられた例でした。



# 本社 九月句会

九月七日(金) 午後一時  
アウイーナ大坂

朝夕にほんの少し秋の気配が感じられるようになった七日、九月句会は123人(投句8人)により開催された。初出席は、大坂市の寺元実さん。

今月のお話は太田昭さん。「一茶と川柳」と題して、一茶の不遇な幼年時代、並々ならぬ苦勞を重ねた青年時代、更には乞食でさえ自分と見比べるという貧困の放浪生活の様子を紹介された。

メインテーマである、俳句と川柳の違いについては、次のように三つに区分して、例句を挙げて判り易く説明。

- ① これぞ俳句という句  
古池や蛙飛びこむ水の音
- ② 川柳の味わいを持った俳句  
痩せ蛙負けるな一茶是に有
- ③ これぞ川柳という句  
小笠原流ではい出るひき蛙

芭蕉 一茶

柳多留 (いさお記)

月間賞は木本朱夏さん(和歌山市)

(司会)美籠・善純(協取)真理子・蕉子

(受付)敏治・理恵(清記)まつお

席題「弾む」 松原 寿子 選

バラリンピック―途な汗が弾んでる 和夫  
逢える朝弾む形の卵焼 郁夫  
認知症の母スキップでデイクアヘ 保州  
ワクワクと都会の森へ消えたまま 志千代  
親友に逢う弾む心のまま徹夜 ルイ子  
スランプも雨に論され弾みだす 順子  
ラブレター貰い弾んだ青春譜 久美子  
弾みすぎた手鞠が涙ぐんでいる 扶美代  
マニフェストに弾んだ票が宙に舞う 和夫  
なでしこのボール世界でとお弾み 修  
弾む心押さえきれずに赤を着る 見清  
再会へ朝から赤い靴弾む 矢五  
この人なら弾んでやるうてんまり 求芽  
ひとりだけ弾まないからつまらない 月子  
昨日までは弾んでました蟬の殻 朱夏  
路郎賞もらった途端目が覚める 勝弘  
ボンボンと維新の口は弾み過ぎ 淳司  
ともだちと弾んだ海辺遠く見る 完司  
逆転のベンチで弾むハイタッチ 無限  
プロ野球弾むボールがやはりいい 勝弘

じいちゃんのお腹は孫のトランポリン 茂  
飯よりも熱燗二合胃が弾む 寿之  
一本のバラでこんなに弾む妻 矢五  
始発電車カレがいましたいい日だぞ 義子  
封を切るその一瞬にある動悸 柳弘  
体調を息の弾みに問うてみる 堅坊  
クラス会悪い噂でよく弾む 光久  
イレギュラーな弾み方する青い毬 楓楽  
弾みなど言うて赤子にすみません 篤  
出張の妻は弾んだ声を出す あかね  
退院の弾む気持ちへ医師の撒 シマ子  
懇親会いつも飲み過ぎ弾み過ぎ 完司  
佳 作  
乾杯と同時に弾みだすグラス まつお  
弾んだらしずまるまでの夢を見る 葉子  
弾みすぎ道を忘れた赤い毬 満子  
弾んだまま歌い続けて消えた毬 葉子  
人間の居ないところで弾むまり 扶美代  
人の句  
底までも磨いた靴がよく弾む 真理子  
地の句  
天の句  
隠しても心の音符跳ねている 昭  
軸 吟 (久)千代  
毬のような心で弾む夢の種 千代



兼題「要」 山田 耕治 選

桐と義理で要らない物を買う  
要点は何だ電話が止まらない  
必要とされておいしい飯を食う  
要件を満たした人にときめかす  
また増えた要観察と要治療  
要するに歳をとったと言うこちゃ  
この世からあの世行くにも要るお金  
要介護支え合ってる老夫婦  
要には肝の据わった妻がいる  
要するに年金あつての僕なんだ  
おつき合い要はころのあたたかさ  
これが肝心シェフが決め手の塩を振る  
要点をばかし問題先送り  
要するに酒さえあればいい男  
政界の要が揺れる永田町  
要求は却下しますと山の神  
要注意妻がご機嫌うるわしい  
長老がいて続ける村祭り  
勝負するお金でなくて要は愛  
一升瓶抱いて要の位置にいる  
甲子園キャプテン補欠でも要  
僕にとって妻もお金も要るのです  
退職後要緩んだままにいる  
要注意妻のあの声あの笑顔  
要するにこの世に未練あるお酒

准一 蘭幸 唯教 あかね 茂 久美子 宏子 完司 時雄 求芽 かずお 篤 義 野薫 蕉子 楓楽 千代 わこ 蘭幸 善純 武彦 美智子 まつお 和夫

ひとつしかない命です要です  
無口だが要点だけは突いて来る  
要注意財布がないと大騒ぎ  
母さんに聞けば全てが上手いく  
要になる人の器量は無限大  
要するに反対らしい生返事  
要石高倉健に似て寡黙

佳作

母さんが要になって家族の輪  
要するに金貸せという長電話  
ボス狼が要の位置で日向ぼ  
要するに論吉がものを言うだけ  
団らんの真ん中白寿笑ってる  
人の句

思いやり要はちゃんと子に教え

地の句

親と子の要に確と血の絆  
天の句  
大家族要にいつも母の愛  
軸 吟

独り住むわたしの心要介護

兼題「ドキドキ」 太田扶美代 選

ドキドキが何所へ行ったか戻らない  
オーラある人にドキドキしています  
ドキドキを企てている妻の留守  
突然のご指名胸が舞い上がる

好

靖博 能子 紀子 光久 黒兎 真理子

かずお 敏治 正雄 克己 富子

(不明)

好

菜月

選

美義 准一 遠野 靖鬼

見つめられて早鐘打った日もあった  
黒白を問われて嘘をつき通す  
熱い目が胸の扉へ触れてくる  
ドキドキがわたしのアンチエイジング  
面接の五分前にもトイレ行く  
ドキドキが続いて若くなっていた  
青春の欠片ドキドキの欠片  
女でもドキドキします袋とじ  
離陸直後引き返すとのアナウンス  
太つ腹財布ドキドキしています  
ドキドキが笑顔に変わる診断書  
ホラー映画ドキドキしない歳になり  
封を切る指をドキドキさせる文  
受話器置いてもドキドキが止まらない  
ドキドキとさせるあなたの側にいる  
奥様が出たらと思う電話口  
電気水道夏の請求書がくる  
仕掛け花火に位負けする胸騒ぎ  
月例会ドキドキさせる人がいる  
ドキドキに会わなくなつてから久し  
ドキドキを形に土を捏ねている  
ゴキブリと目が合い動悸止まらない  
失敗もあるという手術承諾書  
被災現場に線量計が鳴り響く  
毎日がときめいていた朝の駅  
鳥肌が立つ程好きな人という  
二人切りになりたい人と二人きり

進

公誠 寿子 富美子 宏子 蘭幸 恵子 満子 玄也 順子 善純 義子 好 蘭幸 順子 あかね 信子 弘光 完司 ルイ子 克己 楓楽 保州 唯教 実 野薫 由一

大トロの時価にドキドキする財布

好

佳作

裸婦像にドキドキ僕は正常だ

和夫

好きな人何を喋っていいのやら

勝弘

外人が地図を片手に寄ってくる

まつお

ドキドキと神の返事待っている

アキ

まれに死ぬことありという副作用

保州

人の句

素もぐりの兄をどきどき見てた夏

黒兎

地の句

格安航空ネジが一本落ちてゆく

堅坊

天の句

ドキドキは緩帳上がるまでのこと

(久) 千代

軸吟

はらはらとどきどき心臓ふたつ要る

兼題「浪費」 川端 一步 選

小さい窓たたき時間を浪費する

浪費癖止めんとえらいことになる

何故続く命を浪費する戦

浪費して今日の気分けりつける

歳月を浪費してきた二重額

浪費だと気づいた時が遅すぎた

浪費など無縁ブータンの幸せ

探し物今日も浪費に小半日

浪費する楽しさ恐さ知ってます

浪費する時間はあるが金はない

弘風

優柔不断少し時間を浪費する

扶美代

一度だけ着た服があるわんさある

哲男

商戦の御輿をかつぐ癖がある

富美子

健康で浪費出来ればバンバンザイ

日の出

飲む前はいつも浪費と思わない

敏治

浪費する元気を惜しむ傘寿すぎ

ルイ子

浪費家が小遣い手帳付けている

弘之

会社ならとうに倒産してる国

保州

浪費にも限界があるやがて冬

森子

被災者に消費増税浪費です

紀雄

文楽を観る浪費とは思わない

(志)

千代

不経済学部卒業した夫

敏治

青春の浪費恋せず読書せず

楓楽

バーゲンでつい安物を買っちゃった

光久

飲み残す酒にも払う消費税

好

極め付け政党助成浪費です

紀雄

空転の国会税の無駄遣い

まつお

奥方が浪費するほど稼げない

時雄

浪費かと思えば妻は寄付してた

シマ子

句会後のちよつと一杯やめられぬ

勝弘

浪費した時間を嘆く拉致の海

無限

美しい浪費夕焼け見る時間

楓楽

佳作

手書きする時間の浪費いとわない

克己

テープカット盛大にやり閉古鳥

耕治

あの人が買うから負けず買いました

あかね

年金で無駄遣いなどできゃしない

淳司

月イチの浪費を妻とする至福

見清

人の句

命まで浪費さす気の再稼働

たもつ

地の句

魂の浪費たつぷり読むヴェルレーヌ

アキ

天の句

金持ちになると浪費はしなくなる

由一

軸吟

あのダムの建設中止何だった

兼題「髪」 矢沢 和女 選

我が髪の歴史知ってる散髪屋

雅明

ポニーテールが揺れるコスモスが揺れる

蘭幸

髪切つて出直す所存です

朱夏

髪切つてケータイ切つて逃避行

富子

髪切つても胸の熱さは抱いたまま

葉子

髪を切るゼロにもどるという決意

隆彦

黒髪に感謝しながら明日の夢

堅坊

黒髪を風にさらせば恋離く

弘之

黒髪一本ずつにある思い

美智代

黒髪に埋めたドラマを掘り起こす

寿子

言い訳の度に白髪が増えてゆく

アキ

白髪は優先席のバスポート

実

白髪になって優しい顔になる

大子

髪型を変えて出直す始発駅

久美子

髪型を変えて小さい秋探す

満子

髪型で女はさりげなく化ける

富美子

髪型を変えて昨日と縁を切る

みつ子

恋破れ出直す長い髪落とす

一風

歳月と一緒に髪の毛も消えた

完司

大文字が奇麗な髪も赤くもえ

わこ

髪束ね終着駅が近くなる

郁夫

迷いから醒めてころがる髪飾り

朱夏

シャンブーの香に溶けていく髪と鬱

黒兎

メドウサになるまい黄楊の櫛で梳く

真理子

ひたすらに折り届かぬ髪の高

(久) 千代

さりげなく髪的话题を避けて秋

楓 楽

発酵した頭に髪を不用説

蕉 子

哀しいほど迷う女の朝の髪

扶美代

髪染めて苦労などない顔創る

(矢) 五月

心機一転ショートカットで三幕目

森 子

髪洗う脳の掃除をするように

千恵子

錆が浮く背骨に白髪をのせる

完次

佳 作

後れ毛が別れの余韻引き戻す

ふりこ

髪染めて脳にも若さ添加する

和 夫

髪抜けてやおら始める冬支度

黒 兎

落日よ嘘にまみれた髪を梳く

繁 夫

逢つて来た髪が慕情にまとい付く

富 子

人 の 句

モヒカンのでつぺん辺りから炎

楓 楽

地 の 句

忘恩の罪にまみれた髪洗う

繁 夫

天 の 句

こんなに軽い一日なのに髪伸びる

瑠美子

軸 吟

わたくしの愚かを黒髪に宿す

兼題「集う」 小島 蘭幸 選

国境が消えたと思う五輪村

郁 夫

時時は集い悪口言っている

房 子

趣味多彩集つて元氣古希米寿

久美子

選挙戦勝つただけに徒党組む

玄 也

何の日かと聞く母さんを取り囲む

耕 治

仁義なき集合体の縄電車

ア キ

情報をもらいに朝の喫茶店

まつお

父の忌に父の知らない顔並ぶ

武 彦

再稼働反対集う肩ぐるま

肇

虫すだく神がタクトを振るように

武 彦

評論家が集う大衆の酒場

隆 彦

上機嫌で集る三十三回忌

義

同窓会スカート少し短めに

千恵子

集まると飲むわ飲むわの熟女たち

月 子

もう四畳半で間に合うクラス会

保 州

みな来てる今日は河原のゴミ拾い

耕 治

寄つてたかつて冠婚葬祭は絆

森 子

平服で来たのは私だけだった

(志) 千代

同じ顔になって宴はおひらきに

真理子

地域みな集う運動会の旗

紀 乃

集うのは大好き群れるのはイヤ

(矢) 五月

人集うところにあった玉手箱

(久) 千代

ファン同士意気投合のコンサート

紀 子

シルバーが集う昼間のフィットネス

雅 明

おばさんが十人集う凄いです

一 風

師を慕う我も我もと集うなり

みつ子

楽しみは月一友と飲むお酒

勝 弘

廃校のけやきに想い出が集う

繁 夫

しゃべって笑うバリアフリーのついでです

蕉 子

女子会は毎年パワーアップする

信 子

酒の匂いに集まる淋しがりばかり

扶美代

近いうちにと言うては集う金パッジ

則 彦

佳 作

先達が高野に集う秋日和

いさお

女子会は年齢問わぬものらしい

由 一

秋天に昭和が集う菊花展

和 夫

負けても負けても甲子園に集う

完 司

文豪を集めて遊ぶ秋夜長

一 歩

人 の 句

一本の大樹の下の祭りかな

和 女

地 の 句

パラリンピック英雄達が集まった

真理子

天 の 句

合飲の木に集う妖精たちの午後

木本朱夏

軸 吟

いい顔をして一本の樹に集う



## (カ) 入江・亀戸をゆく

地下鉄住吉駅から数分後で豎川跡に着く。

豎川跡に架かる四つ目橋は車専用なので、公園になつてゐる川底を歩いて本所に戻る。真つ直ぐ行けば錦糸町駅だが左に折れて、鬼平こと長谷川平蔵が若いときに住んでいたという入江町をめざす。

途中の柳原町は、歓楽街で居酒屋やスナック店がひしめいていた。

江戸切絵図に記された長谷川家はパンとケーキの製造所になつてゐた。平蔵は四百石の御先手組であつた。御先手組は鉄砲組と弓組のことだが、平蔵の時代は町奉行とは別に江戸市中の特別警備に拘わつたという。鬼平こと長谷川平蔵は若いときは鉄三郎という名で、またの名は入江町の鉄と言われ、相当の放蕩者であつたと池波正太郎は描く。

### 掘割も下水の方がよござんす (俳風柳樽より)

入江町の一角をぐるりと回つて、両国から横十間川までの東西にあつた堀割の下水道であつた南割下水をめざして北に向かう。埋められた大横川の公園に沿つて歩き、JR総武線の鉄橋をくぐつたところが南割下水があつたところだが、これも埋められていて、なぜか北斎通りという名になつてゐた。北斎通りを東に向かつて亀戸天満宮をめざし、JR錦糸町

駅の北側を歩く。この辺りは津軽、柳沢、酒井、水野、牧野などの中屋敷や下屋敷と旗本の御家人の屋敷などがあつたところだ。

「……左右に武家屋敷がならぶ道は松、杉、椎、それにいま花ざかりの李、辛夷の大本などが北堀の外からも見え、一部は堀越しに道の上まで枝先をのぼしてゐる。どこの家にも梅があると思へ、春先のもつと早い時期は、このあたりに息苦しいほど濃密な梅の花の香がただよっていたものだが、いまは若葉の匂いがそれに代わつてゐる。木々の若葉もさざまなど、若葉の香は、生くさいほどの精気に溢れて鼻を刺して来た」(『漆黒の霧の中で』新潮文庫)と藤沢周平は武家屋敷の情景を細かく描いてゐる。

再び四つ目通りに出て右に曲がり、横十間川に架かる天神橋を渡つて、北側の亀戸天満宮に辿りつく。

亀戸天満宮は、大阪の天神さんと同じくらいの広さだが、前庭には池があつて亀がたくさん蠢いていた。江戸時代の境内には老梅がたくさんあつたので、二月頃には大川を渡つて老梅を見に来る参拝客で賑わつたという。

まだまだ、北割下水跡、竜眼寺、小梅堤、大川橋(現在は吾妻橋)など目で確かめたかったが、両国にある江戸東京博物館も見たいので、歩くのは亀戸天満宮で打ち切ることにした。

### 亀戸へ蝶のむらがる初卯の日 (俳風柳多留より)

# おせぬ

毎月24日締切・35句以内厳守  
掲載は原稿到着順となります  
楷書で誤字のないようにお願い  
いたします。

編集部

## 川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

海の底泳いで見たい竜宮城  
泳いでも目的着かぬ災害地  
同期だがうまく世の中泳ぐ奴  
泳げぬがこれでも生まれ浜の子だ  
政界のドンがあちこちよく泳ぐ  
甘言を並べ押し売り嫌になる  
Bグルメ並んでいます小市民  
雁首を並べ夫婦で敬老会  
愚痴並べそつば向かれて心泣く  
書店先句い立つよな新刊書  
黒白の石を並べて空をうつ  
睡蓮を並べ続けてモネになる  
どんぐりも並べり個性光りだす  
波風を立てずに今日も妻立てて  
さざ波に釣り糸なげる影法師

たけ代 恭子 貴恵 悦子 龍枝 美美子 岳人 清 紀美恵 和子 美知江 石花菜 照彦 耕治 重忠

べろりと波に呑まれた桜貝  
寝返りを打っては波の音を消す  
波の音からやってくる夏休み  
次の波求めとなりの店へ行く  
何もせず乗せてくれたわ老の波  
波風が立って一日暮れました  
困ったぞバイオリズムの風続き  
波風を立てているのに仲が良い  
事故防ご守り胸に抱いている  
党守るためにはうそも方便に  
守ります娘に虫がつかぬよう  
守り抜く何が有ってもヘソクリは  
吠えますが番犬なので悪しからず  
シートベルトは人間を守るため  
指切りが守られたならまた会える  
何を守らんと男の急ぎ足  
盗られそうな鳥しかりと守らねば  
私を守ってくれる杖がある

## 和歌山三幸川柳会

武本

碧報

板子一枚多喜二の海は時化ている  
蟹料理誘ってみたい人がいる  
高望みしても詮無い蟹の穴  
身の丈に合わせて蟹は這い上がる  
高足蟹のようなモデルにハイヒール  
滅亡の歴史を語る平家蟹

玲子 くにこ 芳光 紀の治 三津子 滋 野蒜 泰山 久芽代 美代子 勝憲 道子 公恵 螢 義人 美ツ千 完司 節子 義雄

蟹の出た穴と遊んでいる詩人  
蟹に似た終の住処で悲無し  
蟹通の箸は甲羅の唄りから  
横向いて歩く蟹にもある主張  
これ以上望むとすれば弥陀の国  
これ以上転ぶと掴む草もない  
これ以上小さいと罪になる水着  
これ以上問えば仏も夜叉になる  
これ以上揉み手をすれば垢が出る  
これ以上言えば味方も敵になる  
無洗米もうこれ以上尽せない  
幸せを壊さぬように腹八分  
これ以上はブライバシーと線を引く  
これ以上雑せ繰り返す捜し物  
会う度に大人びてくる孫の髭  
あとけないが靴のサイズは大人並み  
骨太い大人になったもやしっ子  
タメ口がですますになり大人びる  
青い実がはぜて一気に大人びる  
とまり木で息子と銘酒呑む至福  
天気晴朗誤解の紐がとけました  
病人へ気が晴れる術考える  
済んだ空に心開いてゼロにする  
梅雨晴れ間少し散策したくなり  
わだかまり溶けて心がはしゃぎ出す  
快晴へ働く靴を光らせる

章子 ひろ子 元三 昭枝 高夫 宏夫 保州 純子 起世子 准一 幹子 イセ 町子 かずみ 義泰 喜久子 昇 豊 菜摘 孝子 みね 典子 美花 絹子 登美代 智三

晴天をひっくり返すメール着く  
梅雨晴れて節電予行しましうか  
疑いが晴れて二人の歩が揃い

### 川柳塔なら

坊農

柳弘報

天駆けるベガサスの夢開店日  
特売日駆け込む主婦の一直線  
文句なし一本勝ちで優勝を  
文句あるか今日も市長が吠えている  
文句ならたんとあります消費税  
あくせくを蛙の歌が追っ払う  
夏はこれ文句なしです冷奴  
駆けて来た男がもう一休み  
一言を言えば三言返す妻  
面相がどうあれ芯を確かめる  
愚痴文句心寂しい人はかり  
ひよつとこの面にまんまと騙される  
デカデカと三面記事になる離婚  
文句だけ人の五倍は言うてきた  
面接に普段の自分見失う  
男だつて駆け込み寺が欲しいです  
少年の悲しみ砂浜を駆けける  
職安で疲れて並ぶやせ蛙  
宅地造成どこで鳴こうか雨蛙  
文句言わず黙つて俺について来い  
駈け出しの軍手の汚れ玉の汗

八重子 正治 富子 彰治 勝弘 史郎 萌子 紀雄 征子 将文 博一 次郎 郁夫 弘風 勝弘 満作 洋子 國治 惠美子 いさお 寿之

脛の傷文句の言える筈がない  
駆け込みを両手でうける保健室  
どん底で生きる男の断面図  
一面の花に酔いたい時がある  
法螺を吹く蛙に海を見せておく  
停電を脅し文句に再稼働  
千枚田天下を取った雨蛙  
ドンファンを殺し文句に酔うピアス  
身の程を悟る男にある面子  
ふり出しの面子に口紅赤すぎる  
ロンドンを目指す蛙の応援歌  
我武者羅に駆けてた頃は光つてた  
泣きそうな時は駆け込み本の中  
また文句お経のように聞き流す

### 竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

寂しいと大きな声で言うてみる  
うつらないはずだ昨日の番組表  
出来栄えが正直に出る手の加減  
母想い正直に行く一本道  
正直に生き堅物と避けられる  
正直を笑われてるのかも知れぬ  
真つ直ぐに生きて堂堂父の背な  
より添うて名月を見た若かった  
いつまでも仲むつまじきおひな様  
暑いねえソーメン鉢にもみじ添え

恭昌 堅坊 道子 信子 良一 克己 ばつは 富子 柳弘 弥生 義久 朝子 真理子 理恵 静風 歩美 汎美 千代美 笹舟 蘭幸 弘子 榮恵 房子 淑子

### 坊農柳弘選

選ひ方ひとつ変わつてくる答  
丸くなる話を聞いている新茶  
命日の蚊はゆるやかに払われる  
ボランティアほつと拾った温い風  
いい時が流れる五時に起きた朝  
雲行きを読んで人生いつも晴れ  
スピンは便利何処でも顔洗う  
あなたと私足して二で割る間柄  
くちびるが少し動いた日の介護  
宇宙から一緒に飯を食う女

### 佳句地十選

(9月号から)

山岡 富美子 選

赤ちゃんの目も鼻もない大あくび  
一粒も流すまいぞと洗つてる  
反論に理があり旗を持ち替える  
鍵穴に何か誤算があるようだ  
ばあちゃんのいい加減さが心地良い  
背を向ける人には届かない電波  
住み込みの神様を探しています  
メイドインジャパンが欲しい日本人  
一言が花が開いたよつな日に  
病名がわかり半分ほど癒える

華子 登美 完次 榮子 千代 義 見清 シルク 萩江

不意の客胡瓜に味噌を添えて出す

はなれても又添うて来る影ほうし

添いとげた充足感もある仏間

その後が聞きたくなつて手を添える

早世の次男再会この宇宙

梯子三軒もはや宇宙の中にいる

夫の瞳宇宙泳いでいるわたし

コスモス畑に佇つ私の小宇宙

プロボーズ君の瞳の宇宙見て

難問が解けて見上げる銀河系

墓参してタイムスリップする実家

掌の中に乗る幸せていいのです

朝顔が元気に咲いて夏本番

ヒマワリのように上から見てみたい

今日の日の仕上げゆつくり湯につかる

一路

千枝

史子

栄香

厚子

敬子

笑子

比呂子

慶子

幸子

半徳

節夫

輝恵

現代

力

ひかり

### 川柳らくだの会(鳥取)岸本 宏章報

不孝者平気で親をこきおろす

踏まれてもかわいい娘なら痛くない

はつとする笑顔看護師からもう

夢でいいお札枕に寝てみたい

おつとりの昔の母が懐かしい

水揚げのマグロ論吉の東に見え

世界中の鰻を日本食べつくす

札束に縁がないから頑張れる

おつとりとひとり楽しむ針仕事

西瓜畠一年分の札束か

億の金当てて平気でいてみたい

一粋報

洋々

無限

凱柳

美恵子

とも湖

金祥

善夫

昌鼓

はつ江

一京

けんぴきを齢のせいにはしたくない

けんぴきを出す程仕事していない

罰金を払えばいいと凄まれる

真実は一つうやむやにはさせぬ

罰金は偶数月に払います

暑くなく袖の下から諭吉出た

けんぴきをいやす足腰揉んだげる

拉致暴く政治家誰も出て来ない

ギラギラの感情線がよく喋る

悪の華いずれば暴く神もある

別件で暴き風穴開けられる

レバ刺しの次はウナギが遠くなり

財産は出来たが後を継ぐ子ない

罰金にウナギをおごる羽目になり

罰金も覚悟の上だ生レバ

実績を上げるためです切符切る

罰金のなくなる世界まだ遠い

ギラギラと沈む夕陽は名画です

野心ギラギラトップ狙っているらしい

ギラギラと嫉妬に狂う目が燃える

熱中症ギラギラの陽に御用心

酒注いでばち本音あはき出す

夕陽うけギラギラ光る金の鯱

罰金はへそくり範囲黙つとく

つつがなく生きてさいごは仏さま

一粋

圭一郎

節子

春名

房江

振作

薫

蟹郎

茂登子

悦子

妻子

地佳平

由美子

清信

義徳

克也

大鯰

菖子

回春子

一瑤

秀四

雅女

清帆

重忠

孝二

一粋



南大阪川柳会

津守

柳伸報

逆転負けどつと疲れる応援団  
 医者よりも妻が疲れに気づいてる  
 疲れたらおいでと里の夕景色  
 マスコミが揃って黙る何かある  
 オフレコと信じ切ってたのが誤算  
 オフレコの部屋で静かにテレビ見る  
 オフレコが多くて行き詰まる会議  
 内助の功いつもオフレコガードする  
 オフレコはバレても良いと言う話  
 オフレコの規約は風に反かれる  
 身体への投資活気のある後期  
 美人入社課内ががぜん活気づく  
 一〇〇年祭活気漲る新世界  
 子の帰省一氣に我が家活気づく  
 六〇年活気あふれるテムズ川  
 検査結果何事もなくまたお酒  
 賑わいが百円シヨップだけとなる  
 金に渋くならず好きに皆使う  
 渋柿も人も干されて味を出す  
 五十鈴逝く渋い女優がまた一人  
 重吉のセリフ一つにある渋さ  
 言い勝ったお茶が益々渋くなる  
 くま蟬が鳴き出し梅雨の中休み  
 夜通しの作業山間部の豪雨

正春 たもつ 集一 紀乃 庸佑 典子 柳弘 柳伸 勝弘 志華子 ひさ乃 恭昌 忠昭 更紗 嘉住子 シマ子 ダン吉 ルイ子 清 弘風 一步 栄子 直子 なぎさ

橋下に褒められている野田総理  
 留守一人耳掃除等してみよう  
 向日葵が節電騒ぎあざ笑う  
 床机と将棋納屋探し出す夏グッズ  
 百歳の笑顔は神のテリトリ

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

他人のことなのに五輪で熱くなり  
 減税の恩恵すべて富裕層  
 理髪師に命預けて目をつぶる  
 孫出演送り迎えのオーケストラ  
 倉に棲む見えない菌が作る酒  
 愛あれば何人にも要らぬなんて嘘  
 保険屋も八十過ぎたら素通りし  
 定量を守ってこそその御晩酌

高知川柳社

小川てるみ報

噴水も虹色だった遠い初夏  
 はつ夏の風に命をふくらます  
 短パンがずい分増えて初夏の街  
 安住の地は月だったのかかぐや姫  
 安全を選びのどかな道しるべ  
 一円玉家内安全祈願する

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

オアシスという山荘に棲んでいる

螢

和雄 柳右子 昌紀 克己 楓楽

輝夫 哲男 蜂朗 實 勝規 高明 節子 四郎

哲史 てるみ 千恵子 千鳥 勢子 進

私も宇宙の隅で生かされる  
 実直な人だろ笑顔やわらかい  
 母の糸切って翔び立つ子の宇宙  
 オアシスは皆無であつたろういじめ  
 保健室オアシスになる子も悩む  
 ソーメンをラー油で食べる現代子  
 昼食はソーメンが案かたづけも  
 実直に鳴くひぐらしに秋近し  
 炎天下実直すぎるアリの列  
 せめて後五日は生きて欲しい花  
 野良猫に居着かれ家のタマは鬱  
 せめて私を美しく書くフィクション  
 末期の水せめて冷たい缶ビール  
 森の中偶然出会う岩清水  
 ソーメンが乾いたころ通過する  
 その実直さみとめたい蔓の先  
 この顔がせめての美人生まれたら  
 ちよつと来てソーメン食べてすぐ帰る  
 花の庭オアシスにして皆集う  
 せめてものつぐないをする母ころ  
 オアシスは求め過ぎれば干からびる  
 にんげんを生きたる峠の水飲み場  
 実直に土の思いを生かしきる  
 惚け防止ですと寄り道オアシスに  
 命日はせめて拝めと父母の声  
 災害のない鳥取はオアシス圏

(西) 和子 くに子 彩子 孔美子 実満 実すず 咲和 盛桜 茶子 忠良 蟹郎 美恵子 照彦 弘子 宣子 富久江 房子 八重 みさ子 京 喜美子 美ツ千 小鹿 小おる 和子

(岩) 和子



東京のオアシス探すスカイツリー  
子等の心のオアシスであれお母さん  
花回廊オアシス一様時忘れ  
せめてもの身になり貰い泣きできる

城北川柳会(大阪) 近藤

花開く朝の蕾の息遣い  
生きている証拠にぶつと泡を吹く  
寸前のタッチで分けるメダル色  
披露宴とりわけ綺麗よその嫁  
核という自爆装置を抱く地球  
とりわけて美人ではないが惚れた妻  
灼熱を球児の熱気吹っ飛ばす  
なでしこは華麗に足で伝え合う  
幸せの寸前にいて気づかない  
一発のキックへはほえんだ女神  
最近のとりわけ多い超豪雨  
死の淵まで持つてゆきたい自尊心  
キックよりすり足に酔った能舞台  
全没もクーベルタンの心意気  
教え子の悲鳴教師に伝わらず  
盆飾り子等に無言で伝えている  
以心伝心恋はいつでもケセラセラ  
とりわけるケーキを睨む目が怖い  
寸前の怒りが溶ける縄のれん  
初恋は伝えられずにさるすべり

美代子 悠子 露子 満 正報 集一 喜八郎 榮子 隆男 満洲夫 あさ子 克己 武彦 朝子 賢子 堅坊 正子 素雲鶴 高志 倫子 麗 柳弘 弘風 一步 義昭

金魚売りつり銭水に濡れたまま  
キックして缶からからと乾く音  
ボール一つ追って地球をキックする  
後ろからけとばしに來た消費税  
フエイントをかけたキックで敵を突く  
寸前で投げ出す癖は治らない  
落ちている財布をちよつと蹴つてみる  
言い遣しは借金のことぐらいいなり  
一生が死の直前に走馬灯  
ウサギさん高嶺の花に仲間入り  
一杯の新茶にうれしのお裾分け  
ヒッグス粒子神話の世界吹き飛ばす

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

人間を磨く試練の旅続く  
北の旅終えてひととく芭蕉の句  
満点の星に安らぎもたらう旅  
時刻表読んでわたしの旅をする  
もう少し八十路の旅の夢さがし  
智恵子の空もどしてくれと願う旅  
思い出の旅はひとりの方がいい  
これからの夢を抱いて旅に出る  
春旅行いつも重なるパースデー  
思い出の旅の写真に句も添える  
茹で過ぎた玉子の黄味は嫌われる  
初めてのような顔して聞いてあげ

洋志 宏 たもつ 和夫 寿子 縣笹 郁夫 修 ルイ子 勝弘 杵香 正 朝子 一步 日の出 直子 妙子 和代 桃花 芳香 とし子 隆昭 たかこ 千歩

くどい程褒め上げてくる怖い人  
待合でくどくど喋る人生を  
もうええわ辞めさせてもらいますから  
くどい人時には値打ち有る時が  
くどい程言うてほしいのほめ言葉  
DNA一家揃ってくどい顔  
ばやき酒のんではやいて又ばやき  
親切も酒も適量あるのです  
言い訳がくどくど犬も近よらず  
くどくどといつか本題逸れている  
いっちゃん怖くてやばい無関心  
朝帰り怒らない妻なお怖い  
怖いほどツイテル美女の酌受けて  
子や孫に怖い未来が覗いてる  
普通の子が突然変わるから怖い  
再稼働安全神話という恐怖  
寝たきりへ行って来ますと手を握る  
御褒美に脚に湿布を張って寝る  
子守唄中途で母のかく餅  
子が巣立ち二段ベットで寝る夫婦  
全財産枕の下に入れて寝る  
背のびして届いた先に見えた夢  
年齢も四年に一度取りたいな

富柳会(大阪)

古田 千華報 和子

裕之 美世子 勝弘 公平 チエコ 昌紀 温子 篤子 かりん 克博 萌 克己 りつえ シマ子 柳弘 舞夢 半銭 (奥)五月 晴雄 由一 志津子 順子

お互いに凭れて探す月明り

極上の言葉巧みな詐欺師の手  
自己責任凭れる壁が逃げていく

極限に私の鬼が目を覚ます

極限の心ほとけになつていく

感謝する形きちゃんと脱いだ靴

制服を脱ぐと頼りにならぬ顔

初恋が匂う七夕来るたびに

凭れずにやる気スイッチ入れてみる

建前も本音も全部ずぶ濡れに

私にない輝きよ好敵手

海を出て海に帰った一人旅

省略に慣れて阿吽でいるふたり

凭れてた父の背中に叛けない

優しさに凭れ続けてきた微罪

極めたと思う驕りにある油断

恋人の肩に凭れている蕾

蝸牛やつと裾野に着きました

存分に踊り終えたら軽い骨

ふるさとの風に凭れて彩を溶く

逆光がもて遊んでる愛と憎

あじさいの藍極まれり梅雨最中

天辺を目指す誰かの為で無く

こだわりを脱げば明日が笑い出す

金環蝕雲が遊びに二度三度

風紋を重ねて明日をも探る

紅紫朗

高鷺

七朗

武人

晴美

扶美代

伸雄

深雪

澄子

佳子

奏子

未知

登子

彦次

アキ

壽峰

壽之

よしみ

欣之

鬼焼

信子

よりこ

恵

華

千華

葉

極論のその先視野が狭くなる

森子

岬川柳会(大阪)

八十洞庵報

趣味仕事くつろぐ時間たんとある

和香

ティールームくつろぐ友に笑顔の輪

清一

しゃべっても沈黙もよし二人ばつち

和美

くつろいで暫しうたたね昼の夢

富美子

他府県のラーメンばかり食べたがり

治

働いたあとのくつろぎこそ至福

茂平

くつろいだ顔でにぎやか里帰り

年子

古里はいいな昔でくつろげる

貞夫

くつろいでよもやま話花咲かす

富美子

母しのびくつろぐ部屋に香ゆらぐ

洋子

くつろいでコーヒ一杯至福の時

圭子

ばらが好きとどちらが好きと娘問う

範子

菜園の虫との戦い本気出し

澄恵

復興のめどもたために又災害

恵美子

残り火を優しく燃やしファイト出す

令子

もうひと息ファイトファイトとゴールまで

桜琴

感情を気ままに見せる海が好き

洞庵

はびきの市民川柳会(大阪)徳山みつこ報

あかつき川柳会(大阪)山本 柳昌報

ぎつしりと書いたあなたへ遺言を

アヤ子

少年のノートいじめのペンの跡

高鷺

夏ばてを防ぐ献立あれやこれ

美喜

冷蔵庫ビールを冷やすためにある

敏

冷蔵庫ビールを冷やすためにある

敏

スーパに任せています冷蔵庫

悦子

賞味切れつきからつきと冷蔵庫

かつ美

へそくりも冷やされている冷蔵庫

喜久子

冷蔵庫の隅で野菜が干からびる

庸佑

冷蔵庫に私のずぼら詰つてる

みつこ

親馬鹿の財布ルーズな子を育て

獺 香

忘れたと言いつ実は空財布

千鶴子

エルメスの財布中身は聞かないで

いさお

ライバルへ財布が見栄を張りたがる

泰子

ブライドと面子に瘦せる空財布

久仁子

チャネルと財布任せてから平和

六点

荒れ庭も庭師にかかり甦る

ヨシ枝

ベテランは初心二文字内に秘め

佳代子

重鎮と呼ばれる人のあたたかさ

登志子

人生のベテランの気にブレはない

雄太

ベテランをお局さんと呼ぶ後輩

ちづる

ベテランが煙たいらしい若社長

光男

一言でさすがベテラン言つてのけ

和子

ベテランといわれる迄の血の涙

フジ

美ら海の辺野古で語るおばあち

正

猫も夫も旅に出たまま帰らない

シマ子

示し合わせて男を責める嫁姑

敏子

それぞれのドラマロンドンまでの旅

朝子

長江を下る李白と夢に酔む

宏

低福祉白骨となり訴える

八月忌あの日のままの草いきれ

靖国の杜で淋しい風に会う

たたかって男はいつも淋しがり

ふところが淋しいお昼抜きにする

談合でも歩調が合わぬ札の束

寝てるだけで良かった母が逝く

淋しいがこれがお前の晴れ姿

友の訃よばつんと胸に穴があく

淋しいといつて消えゆく恋蜜

大嘘をつく淋しげな横顔だ

転校が辛いと泣いた一座の子

風評になって歩調がよく揃う

この近辺歩調あわせて熱帯夜

ヨサコイのリズムで膝は上機嫌

かじられた脳が歩調狂わせる

ロボットを辞めて歩調は意の俣に

金婚の歩調乱れたこと幾度

寄り添うて妻の歩調で陽がくれる

星が降るそんな生家は今無人

熱帯夜火星の旅の夢を見る

今日句会星古いは吉と出た

痛い星落としメダルは遠くなる

星満天小さなことは皆忘れ

八百長で拾った星は苦い味

天の川光一粒あれが母

峯二

美智子

湖風

鈍甲

勝弘

柳弘

たかこ

武

克己

愿

紀乃

穂夫

のぶ久

和

六点

信二

忠昭

直子

賀世子

大気

祥昭

花笑

秀夫

たもつ

篤

哲男

惑星のひとつが加工されてゆく

星空も汗ばんでいる熱帯夜

あの人とずっと待ってた流れ星

八月忌無念を乗せて星流る

### 西宮北口川柳会(兵庫) 藤岡

引き出しの奥で少年齟齬する

きつちりといつも起こしにくる朝日

看板ですと妻がお膳を下げる来る

泳ぐより派手な水着できめる古希

ヒーローがほろり涙のインタビュー

目撃者捜す看板朽ちて朱夏

連綿と看板守り次の代

熱帯夜月が泳いでいるプール

憂き世ブカブカ私を繋ぐ杭探す

看板ですと放り出された熱帯夜

きつちりと覚えてるのは貸した方

求めれば未知はどんどん増えつづ

看板の打線火を吹く甲子園

原発に思いつながらる原爆忌

大生賛悟つたらしい泳ぎ方

幼稚園靴がきつちり脱いでいる

浮世泳いでいるのか波まかせ

さりげなく胸ポケットにある野心

手の平に一億円は乗らぬだろ

後期です法定速度守ります

見清

和雄

和代

和子

### りこ報

喜明

牙子

りこ

弘子

武臣

敏子

浩司

無限

綴

茂

美津子

千代

朋月

比ろ志

哲男

耕治

伯備

美籠

勝弘

正和

こぼさぬとバケツリレーは出来ません

きつちりとすれば別れが待っている

蟬しぐれいっしょに泣いていいですか

その腕にまだ看板は譲れない

血がたぎるロンドン今日もテレビづけ

思いきり笑う若さがついてくる

美しい看板人を惹き付ける

ポトポトと愛がこぼれているのです

夫憎ぶこぼれる星のセレナーデ

命懸け言っているのは総理だけ

何もかも話して青い青い空

羊水で泳ぐ未来の宝物

きつちりと見分けつかない放射能

ふたり酒愚痴もこぼして夜がふける

いい笑顔これが私の看板だ

はたる川柳同好会(大阪) 水野

努力七分運は三分で生きてます

知りたいが知るのも恐い余命表

記憶力妻に勝てぬと思ひ知る

子が嫁ぎ亡母の淋しさ思ひ知る

さっぱりが一番夏はノーマイク

さっぱりや天気予報を信じ過ぎ

さっぱりと断捨離先ずはあなたから

さっぱりとするには少し風が要る

政界にさっぱり見えぬ民の色

忠

直

ひとみ

秋果

紀乃

順子

歳子

水筆

キヨミ

じろう

わこ

素雲鶴

光子

盛夫

千賀子

黒兎報

美智代

幹治

正子

純子

春代

信男

郁子

扶美代

黒兎

遺言を書いてさっぱりする予定  
さっぱりと君を諦め飛び立つの  
忙しいか達者かてんと顔見せぬ  
銀でいい熱い涙が金を生む  
人生の勝負は終に取つておく

康子  
重子  
勝  
長一  
桂子

### 川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

真夜中のメダララッシュに湧く日本  
先輩の話は老いのカリキュラム  
柔道がJUDOになりつまらない  
なるほどと思うが金のいる話  
ハンドルに日傘を立ててベダル漕ぐ  
結論を早く知りたい話し方  
梅干も持参夫のゴルフ帽

遡行  
幸子  
まみ子  
美千代  
雅美  
百合  
かつ子

### ローズ川柳会(兵庫)

亀岡

哲子報

五輪テレビ血圧にいと差し障る  
完走が目安慌てる事はない  
シュレッダーで木端微塵となる機密  
梅田地下人の流れも夏休み  
受賞する金銀の差紙一重  
包装紙の雅を溜めている文箱

義子  
てる  
哲子  
みつ子  
藍  
年代

### 川柳大阪

森松まつお報

診察券いっぱい持つて生きている  
タイガース勝てるカードはないのんか

笑風  
彦太

カード社会良くも悪くも流される  
現金は無いがカードで満つ財布  
荒波を越えた切り札ためている  
鉦太鼓聞けばお祭り気分出る  
松茸とカニの仲間になるうなぎ  
この猛暑外出禁止令つづく  
黒い服着たらブライト光り出す  
黒縁のメガネの奥のやさしい目  
黒ペンツ不気味だから道ゆずる  
細腕の母の切り札そつがない  
やり直す勇氣はきつと日の目見る  
母の持つ勇氣目立たぬいぶし銀  
振り絞る勇氣に青汁が旨い  
アメリカにノーと言えます野球界  
勇氣だし好きなら好きとはよいや  
上を見ず公僕ですと言う勇氣  
勇氣見る私にや着れぬノースリーブ  
君がいるただそれだけで出る勇氣  
ママの膝ボクの勇氣が湧くところ  
親鳥は雛を守って立ち向う  
勇氣だし注意をするとすぐイジメ  
声あればせんどほいほい酒の席  
免許証の写真がどうも気に入らぬ

川童  
鉄心  
信醉  
照月  
五月  
芳香  
功  
勝弘  
万紗子  
朝子  
一風  
柳弘  
紀雄  
美世子  
一歩  
かよこ  
美花  
柳昌  
いつふみ  
すがお  
堅坊  
まつお

### 川柳ささやま(兵庫)

遠山

可住報

久子

叱る人もう居ない佗しがる  
童歌うたうと少女に戻る母  
叱られてぐち聞いてほし地藏様  
男氣を出して妻から叱られる  
子を叱る親も買いたい物がある  
まっとうに生きる証の汗のシャツ  
肝心な事を補聴器聞いてない  
叱られた亡母が悲しい夕茜  
若い時洒落た下着が干せたのに  
山菜がばあちゃんを待つ春の山  
コーヒーに亡父浮かべてのむ三時  
少女とは程遠かった戦中後  
よその子も叱つてくれたおじいさん  
人間が犬に引かれて散歩する  
薄味の料理家族へ愛を盛る

### 倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

美緒子  
純子  
美紗子  
哲男  
稠民  
真由  
勇  
多美子  
開子  
可住  
かほる  
幸子  
ちかあ  
照代  
美智子  
康子  
萩江  
風露  
智恵子  
日出子  
完司  
鬼一  
貞子  
醉芙蓉

堪え難きを堪えて六十七年目  
安全に徹してほしいオスブレイ

一兵卒に徹する口が今党首

夜を徹し水の番した早魁時

五十年主婦に徹して腰を病む

夜を徹し孫の産着を間に合わせ

我を張って勝つては見たが寝つかれず

われわれは大きな溝で隔てられ

我々の頭上を飛ぶかオスブレイ

なつかしき我が古里に父母はなく

度忘れをもしやもしかと我に問う

熱中症呼ばれて我はよみがえる

猛暑日は昼寝に徹しやり過す

### 岩美川柳会(鳥取)

### 石谷美恵子報

白髪で夢をしゃべっておしゃれして  
若いっていいな失敗おそれない  
フェロモンを感じる鼻はまだ若い  
着地点決めないままに飛ぶ若さ  
口八丁若い頃から変わらない  
恥かいて若い体が覚え込む  
頂点でハッスルすれば敵に遭う  
ハッスルし買った田畑が老いの枷  
楠木を見上げるたびにハッスルし  
口角の泡と泡とがゆずらない  
夢の中ハッスルしては寝言言う

幸安 主一郎 完司 一瑤 公子 たぬ 忠良 重忠 昭弘 くにこ 雅女

唐草の風呂敷嫁と来たまんま  
道草で学んだ柔というところ

職退いて庭の草取り任せられる

空家から草が人間呼んでいる

草を抜く心の棘を抜きながら

草取りを慰め蛙がよんと出る

草の実の風のいたずら待っている

### 川柳同友会みらい(鳥取)吉田

### 陽子報

ふる里の海へ弱気を捨てて行く  
昨日とは少し違った今日生きる  
終章は蓮の花皿お借りする  
春ですぬ蒔かぬ草花咲き競う  
人生の評価他人と比べない  
原発があの手この手で動きだす  
試歩つつむ青葉若葉のハーモニー  
源流は汚れを知らぬ山みどり  
退屈のないよう病二つ三つ  
幸せはその日その場に詰まってる  
見通しの甘さはきつと生まれつき  
父の日は仏間の父に手を合わす  
失敗はお互い様だ許し合う  
大切な人名を書いて胸の中  
坊さまでも腰痛なのかすぐ立たぬ  
戦争も乗せて地球は自転する  
ときめきを掴む鏡を拭いておく

葵 美江 礼香 温子 章子 久司 美恵子 純宏 寒之 慶一 信子 惠美子 三郎 みち子 敦子 嘉子 澄子

誰彼無しに出迎えをする庭の花  
神さまどうぞ天窓広くしています  
ドクダミの効能信じ汗をかく  
遠まきに見てる過保護に手が出せぬ

口べたな背広は今も就活中

叶ったら次のもしもが顔を出す

石段のリズムに合わせ蛙の子

美恵子

和子

### 川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

### 柳歩報

天敵に負けない庭が映えている  
当面の敵は猛暑と放射能  
慌てるな敵も昼寝の夢の中  
悩む程相手の策にはまっっていく  
敵味方ごっちゃに乗せたバスツアー  
痛い思い出笑顔に包む金メダル  
責められて痛くない腹泡を吹く  
げんこつの痛さを起爆剤にする  
色黒にも日差しが痛く突き刺さる  
鞭の味痛さが舌に埋まっている  
痛いほどひとに恋して生きのびる  
生きるのも死ぬのも総べて自然体  
蟻んこの命でつかく燃やす夏  
手の甲に浮く血管にある命  
点滴に生きて生きてと二週間  
八日目の蟬の命は輝いて  
百歳で痛み知らないいい笑顔

町紅 長吉 湫丘 青帆 草庵 幸子 たけし 博子 芳恵 とも子 柳歩 静江 知恵子 桂子 ゆき 寿代 ちえこ

保育器で小さなあくびする命  
命ひとすじ艶やかに咲く朝顔よ

百歳に望みをかけるストレッチ

ラーメンの命はなんたつてスーブ

ゆらゆらと竿で傘寿が舞っている

ゆらゆらと脳裏くすぐる今朝の夢

ゆらゆらと隣に座る好奇心

日の丸が揺れ陽炎の水たまり

夕方は行方不明になる男

意味不明そんな私でありました

結婚指輪不明になった薬指

括弧外され行方不明になる私

足繁く通えと呪む盆の墓

見た目にも賞味切れてる予感した

睨み付けてないと右脳が直ぐ休む

踏んだドジそれでもいつか武勇伝

だんまりに丁見狭いと夫言う  
新婚の狭い部屋から大志湧き  
少しずつ料理覚えて留守も良し  
狭い家ですがと通す広い家  
狭くとも思ひの深い親心  
うさぎ小屋やと建てたよお母さん

千里

左余

久絵

芳山

昌枝

民子

禮子

和歌子

雪代

孝流

茂美

幸代

美智子

淳司

弘光

修

狭い露地抜けた所に旨い店  
にらみ合いクマが逃げたと武勇伝

I Tが進み世界が狭くなる

土壇場で絶る手すりを決めかねる

暑いのに蟬懸命に恋してる

くよくよとしてる間もない明日の糧

したたかに生きた証の日記帳

通帳を睨み余生を考える

紐つきの交付金から放射能

ファシズムがナチズムめいてびり出す

狭い視野の中で未熟な有頂天

煽られて厚い鎧を脱ぎ捨てた

口数の節約続く妻の乱

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ報

タッチの差世界新まであとわずか

二次会へ財布気にして徒いて行き

タッチした荷物の重い日もあろう

もこ

篤

たけし

正博

(徳)正子

靖博

敬二

久美子

直樹

克三

隆彦

和子

正美

澄子

ちよえ

かつ子

川柳クラブわたの花(大阪)西川

目覚しきが三つ鳴っても起きぬ孫

少女の頭しがみついている夏帽子

ベレー帽後姿に亡父重ね

人の世の情に感謝送る日び

お似合いと言われその気で来た帽子

散歩道哀れ吸い殻ワンカップ

愛猫も認知症なり老介護

生きることも無理をしないで楽めせず

いつか来る旅立つ朝の砂時計

安心です医師と坊さん友に在る

再稼働地震対策するが先

都会つ子鈴虫みてもゴキブリと

まだ有るさ明日も又来るやる事が

縁日で鈴虫買つて帰り道

重圧かたつた七日でパンダ近く

義明報

禮子

宏

晴美

俊子

義明

はじむ

浩三

愛子

博子

和子

耀一

正春

孝子

奈良司

栄美子

— 124 —

古時計狂うことなく生きている 一風

いずも川柳会（島根） 佐藤 治代報

嫁さんが時ときついこと試す  
試運転したい浄土にゆく翼  
物忘れ左脳のネジが試される  
事故逃れあとひんやりの汗拭う  
プロなみの大輪の百合咲きました  
変化球投げて男を試される  
冷蔵庫あけひんやりを食べている  
スーパの試食で今日も鉢合わせ  
五時からの男を試す灯が点る  
試される位置で寡黙が板につく  
一コマで胸にストンと落ちてくる  
この年になっても好きなさえさん  
Vサイン首もすこし伸びてくる  
図書館で暑さ知らずのまんが読む  
古井戸に西瓜ひんやり夏を盛る  
年老いて口先だけはプロ並だ  
プロ級の料理で夫をつなぎとめ  
安請合い縦に振るくせ直らない  
限界を知った女がマンガ画く  
二人居て首長くして孫を待つ  
さりげない漫画の中の人生訓  
人肌を伝えてくれたまんが本  
七転びしたがすんなり首据わる

煩悩児 佳子  
房緒 米估  
沁丘 博子  
治朗 桂子  
考亮 徳子  
あきら 熊四郎  
妙 健柳  
シゲ子 英子  
夢生 弘子  
敬子 多喜  
志げる 喜子

絵手紙でひんやりさせるかき氷  
まんが好きな人間が好き手をつなぐ  
私の泳ぎを試す湖がある  
幻覚の父はのらくろ二等兵  
四コマのまんが私のドジがある  
たかがまんがされどまんがで満たされる  
曖昧な男を試す唐辛子  
俺の首とりに来る人まだいない  
狂いそう首から上が呆けました  
プロを夢見た原稿用紙積みである  
辻褄が合うまで試す蟬の声  
首ねっこ掴まれたまま生かされる

京都塔の会 樹本 宏子報

意地張った靴が蹴躓いている  
手をかざし活断層の上に立つ  
炎天下人文字揺れる甲子園  
会社にもいじめはあるぞ耐える父  
ゴキブリを張り倒すのは母の役  
ウイंकと乗換んだ文庫本  
まだ生きているぞと意固地振りかざす  
願い事殺到してる天の川  
子や孫に置きかえ聞いているいじめ  
歳月がやがて新人へとメダル  
日本語できくイチローのインタビュ  
矢印の逆方向へむく地球

求芽 英旺  
昭 満子  
益子 弘之  
かずお 綾子  
宏子 昌乃  
葉子 鹿太

片意地を張ってもこぼすご飯粒  
カラスまで厳かに鳴く文化の日  
メールより葉書で欲しい暑中状  
念願のメダル胸張る父娘  
居心地に滞在延ばす湯治客  
トマトから澁瀬な息もらう朝  
衝動買いするでなかった自己嫌悪

川柳あまがさき（兵庫）加川 靖鬼報

梅ちゃんのリズムで妻が起きてくる  
選手には皆あげたい金メダル  
つらい日も笑える明日につなげたい  
汗ひとつつかぬ役者よ名女形  
もうそろそろ帰る頃だと鍵を開け  
案の定二人の仲は熱かった  
いい笑顔ライトを浴びるお立台  
逢えそうで会えぬ人いる夏祭  
そうめんにつばみの朝顔のせてみる  
汗のつぶ見てる元氣な鬼がわら  
金メダル裏に家族の物語  
午後八時伝言板を消しに行く  
結論はファジーで平和だと思ふ  
ボランティア尊い汗は厭われない  
あの出世社長のお古嫁にして  
妻の目は知恵をしばった嘘見抜く  
焼酎を飲むと悪知恵湧いてくる

正和 寿美子  
あかり 寛美  
初音 幸香  
雪菜 柳明  
洋子 よしひさ  
勝巳 美代子  
ひとみ キヨミ  
五月 祐康  
朋月



全員集合テレビ囲んだのはむかし  
散歩する犬も木陰が好きらしい  
なでしこよ千代に八千代に花であれ  
ナースの手赤ペンメモが書いてある  
ええ知恵貸してやるかといやなやつ  
大切な人への思慕を消せぬまま  
過ぎ去れば月日も人も温かい  
あんななんかあんなかと缶を蹴る  
失敗を発酵させて知恵にする  
汗をかく様子は見えぬ苦勞人  
DNAやはり俺似の息子たち

# 大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

百均とくるくる鰯で満足じゃ  
よはよはの平均寿命なら要らぬ  
大福が跳ねてる夏のお嬢さん  
キンチョールで不満分子を追ひ払う  
行列の蟻を炒めている日差し  
不文律知らない奴が幅きかす  
滝のごと蟬を鳴かせて寡黙な木  
滝に打たれても煩惱は消えない  
フツフツと不満溜まって活火山  
平均に撒いて欲しいな雨と金  
飯を食う存在感のない顔で  
平均台お手のもんだよカタツムリ  
○×□多彩な友が取り囲む

靖鬼 奮水 哲夫 和子 耕治 かずお りこ 美籠 哲男 見清 遠野 石花葉 主一郎 芳山 寿代 芳光 大鯨 くにこ 紀の治 由紀子 風露 熊四郎 七七 たえこ

こはれ種勝手気ままによく育つ  
法律の通りに出来ぬ遺産分け  
驕らずに平均的な墓でよい  
法律に守られている無法者  
欲捨てた平均寿命越えた顔  
受診のたび薬の種類増えて行く  
独り占めは駄目と首振る扇風機  
ドンダリの列ドンダリが嗤っている

# 川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

水だけ残してハモは平らげる  
夏の雲見てかき水欲しくなり  
水柱のむこうで招く秋の影  
日本酒に水を入れて呑む猛暑  
飲み会はオンザロックでしめている  
札幌で木彫りの熊に吠えられた  
枕木は寝ながら立派に仕事する  
木で鼻をくくる器用なことをする  
木の下ではいけない雨宿り  
ターザンの居そうな庭が理想です  
手作りの椅子座つてはいけません  
わくわくと恋人を待つ木のベンチ  
露天風呂木洩れ日の中虫と居る  
花火師が生命を掛ける夜の華  
寝たきりの母と聞いている遠火火  
追憶の花火を胸に打ち上げる

悦子 久子 重忠 鈴野 水歌 すみゑ 仁美 完司 一步 登志子 清之 榮 勝弘 美代子 信二 六点 光男 扶美代 まつお 雅枝 惠美子 喜代子 アヤ子 龍一

ベランダで蚊取線香と観る花火  
万華鏡と思う花火に酔える夏  
線香花火持ったその手に蚊がとまる  
遠火火子ども返りの母と聴く  
遠き人を花火に重ねる盆  
線香花火母は子供になった声  
この世です花火ボンボン多彩絵図  
古里に母と花火の予約席  
花火師の執念あの世まで焦がす

# 豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

火星人に会うまで死なぬことにする  
やったぞという雄叫びのメダリスト  
葬儀費はリーズナブルとしたためる  
まだ一歩千里の道が応援歌  
格好の良いこと言うが絵空事  
ばたばたと扇ぐ扇子に出る奇ち  
座右の銘を常に心の中に措く  
やんわりと都合つけばと逃げられる  
五輪でも入れ墨堂々答はなし  
格好いい夫だったな立葵  
節電に肩身がせまい常夜灯  
下馬評の通りにならぬ甲子園  
まだともが老いの体でせめぎ合う  
酔の物のタコの産地で世界地図  
まだ少し世話になります厚労省

ヨシ枝 悦子 夏子 婦美枝 いさお シマ子 瑠美子 あかり 弥生 美津子 久子 肇 郁子 庸佑 歌留多 比呂志 幹治 義雄 きらり 健二 行兵衛 (水)玲子 美佐子 徹



今宵かも知れぬ花火を抱いている  
盆最中僧の経より補水液

堅坊 夢 隆

誘われてまだときめきの中に居る  
ほめ言葉まだまだ本気鏡みる

紀子 靖鬼

本音まだ出したらアカン屋台まで  
チクタクのリズムで今日もつつがなし

千枝子 かずお

やればまだできるがこの辺で止める  
忘れたことならたんとあるボツケ

武臣 菜々子

不祥事を謝ることの不恰好  
消費期限まだあるのです見た目より

美籠 見清

どなたでも笑顔はいつも格好いい  
この世まだ見たい聞きたいことばかり

葉子 勝弘

鰻重は平常心では食べられぬ  
格好はいけてないけど優し夫

玲子 求芽

一面のひまわり叫ぶ反戦歌  
聞いてほしいはじめられてる子の叫び

美智代 昌乃

呪文かも歪んでかぶる夏帽子  
五欲に負けて叫び出したくなる座禪

幸雀 則彦

常識をいつも疑うパイオニア  
格好よく生きたと過去の人にされ

千代

### 六甲川柳会(兵庫)

伊勢田

殺報

看板の誤字がやさしく人を呼ぶ

みつ子

好きなこと一心不乱が美しい

弘

娘が嫁ぎホロリ夫婦で美酒に酔う

ひろ

オリンピックああ日の丸は美しい

武臣

円熟の技を競った晴れ舞台  
歳かさね顔は心の美しさ

見映えより心の内の美しさ

ブス認め笑顔美人を目指します

円熟の域は見えない先の先

熟練の技が他国で生きのびる

熟れるまでゆっくり待てる老獺さ

深い溝なくす垣根は低くする

深い愛計り知れない親の恩

今日こそは本音話そと深呼吸

終えんの治療で悩む深い愛

今もまだ深い祖父母の思いやり

口数の少ない夫の深い愛

深々とお辞儀をさせるにじり口

原発事故全て明かさぬ深い謎

句集から温もりもらう夏の彩

何もかもひれ伏す如く夏の空

夏木立諸行無常の蟬時雨

紅を引き鏡の中の老いを消す

この川にきつと帰ると鮭の稚魚

叱る子の瞳に映る親のエゴ

彼と飲む酒にほんのり夕茜

人間のくせに人間嫌いです

眺めてるだけならとてもいい女

赤い糸きっちり結ぶ愚夫愚妻

愛しさほどよい距離に孫がいて

繁義 文子

康子

ひとみ

光久

勝

宏造

能子

照子

千賀子

和子

洋一

英子

義博

浩司

美恵子

妙子

盛夫

弘子

茂

和郎

夏子

寿朗

淳

武彦

加寿子

娘が来るとテレビリウム下げられる  
これからだ老いの兆しに背を向ける

取り越し苦労まだまだ続く老母の愛

こぼれたら又這い上がる蟻である

心満つ本屋と花屋はしこして

楓 楽

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子 報

老いらくの恋好きですを聞き逃す

棒読みのお詫び帰らない命

脱原発の声が届かぬむなしさよ

まんじゅうでお酒がのめる変わり者

はらわたの底で息巻き我慢する

不景気と暑さふつ飛ぶギョルみこし和

洗いざらい喋ってしても悔いている玄

家族よ許せ父は献体するつもり

首切りのリストを脱むドライアイ

息巻いて買ったパソコン手に負えず

九条に彬の夢が綴られる

審判の不正際攻めるブーイング

努力しても結びつかないことだらけ

どっちもが一步も引かず難儀やな

息巻いた後にむなしさだけ残り

告白は私一人にだけです

父の日を何時もドライに割り切られ

夢を追い魔物を退治金メダル

今日もまたしゃべり過ぎたと宴の後

利子 保雄

美穂

いわゑ

蛙城

昭

いさお

香代

清

和美

和

也

信二

幸子

ダン吉

隆昭

忠太

月子

珠子

檀代

紀雄

弘子

英夫

ドライフラワー花粉症とは縁遠い  
とことんはエンマの前と覚悟決め  
できちゃった別れちゃったと言う娘  
息巻いた言葉も妻は丸く受け  
息巻いて来たけど祖谷のかずら橋  
床に着く楽しい夢を見るように  
餌取りの河豚に刺癩波止の釣り  
夢は跳ぶ夢は走れる車椅子

房枝 洋 保州 ひろ子 みつ江 康 信 義 泰 欣之

# 米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

フルベースチャンススキリストホメット  
もらいものしてお世話にも腕がなる  
十五年金魚と同居今日も無事  
二回とも心ちちんで入れられず  
トライアスロン最後のお辞儀すばらしい  
主催者の言うほどで無いデモの数  
絆かな向こう三軒両隣  
暑ければ今度は冬が好きと言う  
平凡な暮らしの中で花育ち  
夏草に草刈戦士も悲鳴あげ

雨 奇 宏 之 正 二 律 登美枝 紀の治 未延子 札 子 多美子 ひろし

# 川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

頼られる内は一肌脱ぐつもり  
歯切れよく頼って来いと胸を張る  
頼るのは汗だといつも言い聞かす  
タクシーに頼る癖つく老いの足

紀 子 寿 子 ダン吉 佐 一

まつくなあなたについて行く小道  
いただいた命舞台を華にする  
復興へ今立ち上がる屋台骨  
滑り台から少年は風になる  
蒸発した私に誰も気づかない  
人の命いつか蒸発するものを  
蒸発止め辛い戦争語り継ぐ  
怒ってる父の頭のあの湯気は  
たつぷりと水を飲んでもひび割れる  
肩の荷が蒸発したか弾む靴  
折り合いをつけて盆には帰ろうよ  
呑み過ぎた酒で帰宅の千鳥足  
民宿じゃないと言いたい里帰り  
バトカーに乗り徘徊の母帰る  
帰りたいでも帰れない母の胸  
里帰り母が居るから風になる  
旅三日もう帰ろうという財布  
だらしなない形で蟬も地に帰る

# 川柳さんだ(兵庫) 堀 正和報

貸し借りにしない善意のボランティア  
中古でも眠れぬほどの恋をする  
マイカーの最初は中古のダットサン  
波風をたてぬようにと気を使う  
中古でも使えるパーツあるドナー  
ロンドンにウェーブ起したなでしこ

小雪 徑 子 美 子 大 輪 紀 久 子 めぐみ 秀 子 千 賀 子 夕 胡 和 香 克 子 准 一 よしこ 保 州 ほ の か 富 美 子 泰 女 英 子 哲 男 忠 好 文 歳 子 キヨミ 淑 子

価値観でゴミや宝になる中古  
居眠りも美人だったら肩も貸す  
孫たちは爺ちゃん好きとぶらさがり  
捨てるほど持っているのに使わない  
栄光は捨てて出直す再生紙  
沖繩の海はしずかに眺めたい  
力にはなれぬが先ずは耳を貸す  
核心に触れると妻は気取りだす  
貸していたヘッセに君の花手紙  
良運の波が来たかと乗ってみる  
昭和には大手振ってた中古品  
近く順序私我先ともめている  
ボランティア出来る事ならやりまっせ  
パソコンは消耗品と論される  
笑い袋の涙まったく見破れぬ  
ヒト科では熟年と呼ぶ中古品  
わだかまり捨てて優しい風になる  
貸す金はないと言いつつ金庫開け  
惚れたのは他人の頃の妻でした  
僕は舟君の波間で揺れ遊ぶ  
国民を全く無視した聴取会  
あなたとの足跡波が消して行く  
軒を貸す母屋とられてほぞを噛む  
古民家の柱の傷にある歴史  
エコノミーをビジネスにした銀メダル

一 子 宣 子 順 子 朋 月 美 龍 菜々子 光 久 武 彦 ひとみ 喜代子 祐 康 一 泉 雅 司 健 二 美 和 子 見 ちあき 裕 美 茂 山 雄 太 郎 雅 尚 徹 雄 司 章 子 正 和

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

今夜また浮かぶは母のあの笑顔  
一瞬のかつき誤り世のひずみ  
世の波にもまれ浮輪をはなせない  
浮かれ過ぎ財布の中味空になる  
青春の煩惱浮かぶ古日記  
クリーン作戦自転車川面にぬつと出る  
競馬場耳に小銭は縁起担ぎ  
新盆の友の笑顔が目につかぶ  
野獣の眼浮かぶ瀬もあれ金メダル  
浮き沈み時々浮いて良とする  
お先棒かつぐ癖までDNA

敬子

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

人間をよく見るために目をつむる  
真剣でない目元が笑つて  
頼もしき孫の目線で子守する  
にこやかに嘘を見透かす鋭い目  
気がつけば目の前にいた青い鳥  
好奇の目道草を食うランドセル  
ストレスの中でもがいている小骨  
ストレスを溜めたか妻の大噴火  
ストレスにならぬ程度にして悩む  
子と思う閉じることない母こころ  
閉会の挨拶までに消えている

富子 捷也 舞夢 紀子 楓楽 満作 蕉子 浩二 千歩 桃花 希久子

川柳ねやがわ(大阪)

龍島

恵子報

メダル38の快拳で五輪幕を閉じ  
目を閉じて今日を反芻する湯船  
これはマズイ活断層にふたをする  
あいさつに來てね命を閉じるとき  
人生をきれいに閉じる尊厳死  
百歳を目標にするクラス会  
節電で冷え過ぎのバス消えた夏  
肩書きにストレス付いて身が細る  
車座になって本音がこぼれ出る  
八十路ゆく五感ゆつくり呼吸する  
矢おもてに立つて男の意地を見せ  
一点の曇りも見えぬハートです  
世話になったひと置いて席を立つ  
軽率な言葉の裏にある驕り  
おせっかい焼きです父も母も僕  
雨垂れがボツリドラマを変えてゆく  
欲捨てて透明になる影法師  
座禅組むその空間が透き通る  
原発の軽率を問う大地震  
明日を見るメガネ探しの靴を履く  
軽率な人の良いところお人よし  
ぐうたらな男を一人飼うてます  
一途とはこんな姿か曼殊沙華  
小さい秋ひよいと運んできたトンボ

恭昌 すみ子 眞澄 理恵 善之 知之 げんい 照子 弘子 志華子 修 亜成 壽峰 高鷺 郁郎 郁夫 柳弘 洋 寿子 美江 仁清 弘一 朝子

事務所便り

今月号から事務所発のお知らせ、お願い等を、この欄から発信することに致しました。「これはどういうこと」と疑問に思われていること等の答えになればと思います。

現在の事務所のスタッフは3名で、平日の10時から16時まで交代で運営しております。

「川柳塔」誌への投句は毎月15日必着締め切り、土日祭日が入る場合は前倒しになります。

ご留意の程、お願い申し上げます。

手をつけた分だけ応えてくれる花  
怒ってる大地の神は平和主義  
オレオレが軽率なわし狙い打ち  
無一文軽率だった保証印  
世話好きの伯母がいたから結ばれた  
帳尻がいつも合わない世話をする  
今のうち世話して恩を売っておく  
竜巻警報屋根が飛んだらどうしよう  
結局は死ぬまで母が父の世話  
沖繩の米軍キャンプ早よかれ  
難民キャンプ明日の見えない日が哀れ  
再稼働の軽率責めるデモの列

賢子 秀雄 弘風 仁 尚世 博泉 さち子 かすみ 忠央 美智子 ルイ子 鈍甲

| 句会名       | 日時と題                                                | 会場と投句先                                                                              |
|-----------|-----------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 川柳さんだ     | 吟行<br>16日(火) 11時30分開場<br>ケーキ・にんまり・休む・おまけ・自由吟        | 三田ホテル (三田市けやき台1-11-2)<br>〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和                                |
| 川柳塔みちのく   | 20日(土) 17時締切<br>打つ・あっさり・折り紙                         | 弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぱ1階「川柳道場」<br>〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯                              |
| 岸和田川柳会    | 市民川柳大会<br>21日(日) 12時開場<br>シグナル・ほのぼの・予感<br>気付く・祭り・拾う | 岸和田市立福祉総合センター<br>〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代                                     |
| 川柳ねやがわ    | 21日(日) 14時締切<br>食べる・仲介・キャリア<br>自由吟                  | 寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室<br>寝屋川市駅からバス<br>〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉                      |
| 川柳藤井寺     | 21日(日) 14時締切<br>ツアー・金・席題は共選                         | 藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F<br>近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分<br>〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子     |
| 岬川柳会      | 21日(日) 14時締切<br>身勝手・はたく・あゆみ                         | 淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分<br>〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵                            |
| 南大阪川柳会    | 22日(月) 18時開場<br>ストレート・ぺこぺこ<br>ぐずる・重い                | 大阪市立住まい情報センター 5F 研修室<br>地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口<br>〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ |
| 松露川柳会     | 22日(月) 19時30分締切<br>魚・スーパー・雑詠                        | 溝口五区集会所<br>〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々                                          |
| 川柳クラブわたの花 | 26日(金) 9時開場<br>秋桜・亀・袋・自由吟                           | 八尾市生涯学習センター<br>〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明                                          |
| 川柳塔すみよし   | 27日(土) 14時15分締切<br>コスト・染める・素晴らしい                    | 住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分<br>〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子                            |
| 和歌山三幸川柳会  | 27日(土) 12時30分開場<br>健康・乗る・土                          | 和歌山商工会議所 4階 第2会議室<br>〒640-8570 和歌山市南中間町20<br>ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」                   |
| はびきの市川柳会  | 28日(日) 14時締切<br>影・恋人・テープ・窓                          | 綾南の森 公民館<br>近鉄高鷲駅北東・徒歩10分<br>〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏                           |
| 川柳ふうもん社   | 28日(日) 13時開場<br>菩薩・ヘルパー・汗をかけ                        | 開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107<br>〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原深雪                                |
| 京都塔の会     | 30日(火) 14時締切<br>面・がっしり・練る                           | 京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ<br>〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル<br>弁財天町328-202 都倉求芽               |

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

# 10月各地句会案内

(開催日順)

| 句会名                | 日時と題                                           | 会場と投句先                                                                                                  |
|--------------------|------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 川柳塔<br>な           | 4日(木) 13時開場<br>挑む・粹・倍増                         | 奈良市立中部公民館 4F<br>近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分<br>〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵                                       |
| 城北会<br>川柳会         | 6日(土) 13時開場<br>エリート・湿気・迷路<br>自由吟               | 旭区老人福祉センター 3F<br>地下鉄千林大宮③番出口<br>〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子                                          |
| 富柳会                | 6日(土) 14時締切<br>整・待つ・自由吟                        | 富田林市中央公民館<br>近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m<br>〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10<br>TEL 0721-25-0603 池 森子                    |
| 倉吉会<br>川柳会         | 6日(土) 14時締切<br>リフォーム・楽・疼く                      | 倉吉市 明倫公民館<br>〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17<br>谷口次男                                                      |
| 川柳<br>あまがさき        | 9日(火) 14時締切<br>辛抱・評判・渋い・自由吟                    | 尼崎女性センター トレビエ<br>阪急武庫之荘駅南へ200m<br>〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治                                          |
| ほたる<br>川柳<br>同好会   | 9日(火) 13時30分締切<br>一大事(詠み込み不可)<br>極める・折句(ぶ・ど・う) | 豊中市立蛭池公民館<br>阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル 5F<br>〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎                                          |
| 川柳塔<br>さかい         | 12日(金) 13時開場<br>油断・あさはか<br>折句(ハノイ)             | 堺市総合福祉会館<br>〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也                                                              |
| あかつき<br>川柳会        | 12日(金) 14時締切<br>曲がる・恋・手首・時事吟                   | 大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階)<br>地下鉄[谷町6丁目]駅③番出口から3分・道路向い側<br>〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花                  |
| 川柳大阪               | 13日(土) 14時締切<br>鈍い・案・未熟                        | 地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」<br>〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純                                              |
| 川柳塔<br>まつえ         | 13日(土) 13時45分締切<br>遠い・リヤカー・進む<br>あきれる          | 松江市雑賀町 雑賀公民館<br>〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子                                                                |
| 川柳塔<br>打吹          | 13日(土) 13時締切<br>神・失敗・戻す                        | 倉吉市上灘町9 上灘公民館<br>〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光                                                              |
| 八尾市民<br>川柳会        | 14日(日) 13時30分締切<br>神話・幻・叩く・雑詠                  | 八尾神社内 西郷会館3F<br>近鉄八尾駅西口徒歩5分<br>〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一                                              |
| 川柳塔<br>わかやま<br>吟社  | 14日(日) 14時10分締切<br>兼題=前・はらはら・表紙<br>課題吟=病氣      | 和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2<br>兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子<br>課題吟 〒592-8349 堺市浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫 |
| 西宮北口<br>川柳会        | 15日(月) 14時締切<br>梨・燻る・ぼろぼろ・自由吟                  | エビータの森ビル2階<br>阪急西宮北口駅下車北へ5分<br>〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子                                               |
| 豊中会<br>もくせい<br>川柳会 | 15日(月) 13時40分締切<br>振る・新聞・ながら・自由吟               | 豊中市中央公民館 4F 阪急曾根駅南東・徒歩5分<br>〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清                                                 |

# 柳界展望

参加者、五五〇名。  
和歌山県川柳協会会長  
ひとり来てデジャビュ  
の古道をぞろ行く

★第43回奈良新聞川柳大会は7月22日、奈良県文化会館で開催。同人の成績。思惑があつて今夜は魔女になる。渡辺 富子

★第1回卑弥呼の里女流川柳大会は7月29日、佐賀県吉野ヶ里公園駅コミユニティーホールで開催。同人天位。

少年のハンドル虹を追いかける 木本 朱夏

★第6回松江市川柳大会の同人の天位。

短命を知らぬ砂像の面構え 福西 茶子

悲しみを溜めてマリモになつていく

抱き締めた人の形が残る腕 新家 完司

★和歌山県川柳協会発足20周年記念全国誌上大会の同人成績は次の通り。

▽お詫びして訂正△

▼9月号P47中段5行目、星児美↓誠美。P108下段19行目、ちびるが↓くちびるが。P110下段21

行目、眩し↓眩し。P114下段11行目、禿げた↓禿びた。P114中段9行目、稲村の穂に学ぼうと見学に↓稲村の火に。P116上段1行目、チャイニスト↓チルドレン。P117上段7行目、露の雨鱉うまくして匂に酔う↓梅雨。P119中段9行目、体風↓台

風。P122下段3行目から11行目、松本千恵子↓松本知恵子

▽新誌友紹介△

佐賀県 真島久美子  
紹介者 木本 朱夏  
茨木市 岡田 守啓  
紹介者 水野 黒兎  
大阪市 寺本 実  
紹介者 河内 天笑

## 平成24年度（第24回）

### 川柳塔碑合祀祭実施要項

本年度川柳塔合祀祭を下記の通り行いますので、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

合祀祭日 平成24年11月10日（土）雨天でも行います。

集合場所 南海電車 難波駅 3階中央改札前

集合時間 午前9時30分

（川柳塔の茶色の旗をあげておきます）

乗車時刻 特急「高野5号」午前10時発に乗車します。事前申込者には割引周遊券付特急券（サービック）を購入しておきます。

会 費 4,500円（往復乗車券及び住まの特急券、昼食費）  
帰路の特急券（760円）は各自でご購入願います。

合祀祭会場 〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山17

高野山霊園内 川柳塔碑前（奥の院下車すぐ）

大霊園事務所 電話0736-56-2966

到着後すぐに法要を営みます

（午後12時10分頃より約30分予定）

合祀予定者（敬称略）

（平成23年8月～24年7月までに逝去された方）

白井 二英 持田多喜子 酒井 一壺

武田 帆雀 桜井 千秀 田村 邦昭

乙倉 武史 井伊 東吉 森井 菁居

常任理事会 9月7日（金）  
①第18回川柳塔まつり開  
連②同人総会関連③新常  
任理事・新理事④6賞選  
考結果⑤誌友へのアンケ  
ートまとめ⑥川柳塔への  
勧誘チラシ⑦定例確認事  
項⑧その他  
次回 9月25日（火）PM13時  
30分

大阪市 紹介者  
河内 天笑

寺本 実  
水野 黒兎  
岡田 守啓  
木本 朱夏  
真島久美子

常任理事会 9月7日（金）  
①第18回川柳塔まつり開  
連②同人総会関連③新常  
任理事・新理事④6賞選  
考結果⑤誌友へのアンケ  
ートまとめ⑥川柳塔への  
勧誘チラシ⑦定例確認事  
項⑧その他  
次回 9月25日（火）PM13時  
30分

# 誌友の皆さんへ

先般誌友の皆さんにアンケートをお願い致しましたところ、建設的なご意見、ご要望、ご提案などたくさんのお返事をいただき、誠に有り難うございました。

これらにつきましては、常任理事会で慎重かつ前向きに検討し、よりよい川柳塔にするため努力して参りたいと考えております。

なお、諸般の事情でご要望にお応えできないこともありますので、その点ご容赦下さいますようお願い致します。皆さまには今後とも川柳塔をご支援賜りますようお願い申し上げます。

川柳塔社

## 第36回 鳥取県川柳大会

と き 10月14日(日) 午前10時開場  
ところ さざんか会館 5階 大会議室  
(鳥取市役所駅南庁舎隣)  
鳥取市富安2-104-2

TEL 0857(29)7151

(JR鳥取駅下車・南口から徒歩4分)

宿題と選者 (各題2句・11時45分締切)

|        |         |
|--------|---------|
| 『器量』   | 野口 節子 選 |
| 『植える』  | 熱田熊四郎 選 |
| 『奥』    | 長谷川博子 選 |
| 『儂い』   | 木本 朱夏 選 |
| 『びったり』 | 新家 完司 選 |
| 『隠す』   | 恒弘 衛山 選 |
| 『正面』   | 小島 蘭幸 選 |

会 費 2000円(大会誌・昼食)

欠席投句 1000円(9月20日締切・小為替)

※投句先 〒689-0216

鳥取市気高町宝木1561-113

福西 茶子 方

第36回鳥取県川柳大会実行委員会 宛

TEL 0857(82)1314

主 催 鳥取県川柳作家協会

## 第27回 国民文化祭とくしま 2012年 川柳大会

(当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)

日 時 平成24年11月18日(日) 11時

会 場 徳島市立文化センター

宿題・選者 (当日投句。敬称略)

「泥」 佐藤 古拙 (青森)

「ふらふら」 土田 欣之 (大阪)

「進化」 田中寿々夢 (群馬)

第二次選者 (敬称略)

大野 風柳・竹本瓢太郎・大木 俊秀

河内 天笑・住田英比古

賞 文部科学大臣賞・日川協会会長賞など

問い合わせ先

〒530-0041

大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905

(社)全日本川柳協会内

国民文化祭徳島大会事務局

☎ 06(6352)2210 FAX 06(6352)2433

## 第32回 川柳塔鹿野みか月川柳大会

日 時 11月25日(日) 9時開場

場 所 鳥取市鹿野町総合福祉センター

「和泉荘」

課 題 (各題2句・11時30分締切)

「本物」 小島 蘭幸 選

「ふところ」 森 中 恵美子 選

「凄 い」 新家 完司 選

「意 味」 杉 山 静 選

「たっぷり」 奥 田 みつ子 選

「碎 く」 石 橋 芳 山 選

「天 気」 牧 野 芳 光 選

会 費 2000円(欠席投句 1000円)

投句先 〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1279

中原 諷人 方

川柳塔鹿野みか月事務局

TEL 0857-84-2100

投句締切 11月1日

主 催 川柳塔鹿野みか月



## 編集後記

★しのび寄る秋が今年は

音を立て

薫風

★残暑もようやく落ち着きよいよ秋本番。編集長として二年が経過した。真剣に目を凝らしているにもかかわらず、相変わらず誤植との闘い。首から三つという言葉がある。校了して「これで間違いがあつたら、首を賭ける」と啖呵を切つたものの、本が出来上がつてみると誤植の三つや四つは見つかるというもの。

★九月号の「川柳塔の讃歌」にも、「誠実」が「星児実」になつていた。木津川先生は「アハハ」と笑いました。誰でも誤植とわかる誤植です。ちつともすまななうことありません」とお許しくださいつたが、申し訳なさうと恥ずかしさに身が竦む。

★過去に印刷に回す寸前に気付き、あわやセーフ

★今月の目次下「時代の風」をお書きくださったのは、本誌「誹風柳多留」の輪講メンバーの一人小栗清吾氏。著書の『はじめての江戸川柳』（平凡社新書）は、サブタイトルが「なるほどとニヤリを楽しむ。肩の凝らない古川柳入門書」。

★今月から誌面が少し変わります。一路集が従来の二頁から二段組みの三頁へ。佳句地十選の選者が毎月二人に。また、昭和四八年八月から見慣れた「初歩教室」のタイトル文

の例をあげてみる。同人の作品に「墓地を買う」とあつた。えらくスケールの大きい句とよくよく見れば「墓地を買う」の誤植であつた。愛人の死を悼むに、ギョツとしてみれば「愛犬の死」の間違い。申し訳ないが大笑いした。校正の眼がさかさまの田を見つつけは高橋散二の名吟。

★今月から誌面が少し変わります。一路集が従来の二頁から二段組みの三頁へ。佳句地十選の選者が毎月二人に。また、昭和四八年八月から見慣れた「初歩教室」のタイトル文

の例をあげてみる。同人の作品に「墓地を買う」とあつた。えらくスケールの大きい句とよくよく見れば「墓地を買う」の誤植であつた。愛人の死を悼むに、ギョツとしてみれば「愛犬の死」の間違い。申し訳ないが大笑いした。校正の眼がさかさまの田を見つつけは高橋散二の名吟。

★今月から誌面が少し変わります。一路集が従来の二頁から二段組みの三頁へ。佳句地十選の選者が毎月二人に。また、昭和四八年八月から見慣れた「初歩教室」のタイトル文

## ひとこと

### 三つ折一字半がかり

めだかの学校では毎年一回川柳作品展を行っている。各人が力作を色紙や短冊などに思い思い書いてたり描いたりして発表している。

先ほど発行した合同句集、ろっこうみちをご覧頂いた川上大輪副主幹より「川柳作品展の写真を見て感じたことですが、短冊の書き方が少し気になりました」との言葉を頂いた。

その事とは、川柳を色紙に書く場合は縦長に使うということ以外は自由であるが、短冊は《歌短冊》

以来、連歌、俳諧の伝統を踏まえ（句短冊）としての決まりがあります、との事。

短冊などについては全く無知なものの同士、勝手に描いて発表して誰しもが恥ずかしく思われてきた。き始めは「三つ折一字半がかり」が目安となつてゐる事である。

短冊についての詳しい資料を送って頂き、短冊の歴史、書き方、雅号の位置、雅印のいましめ、短冊の規格、たとう（畳紙）まで知る事ができたことに感謝してゐる次第である。（山口 光久）

字が変わりました。川上大輪副主幹の手になりました。★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）

★八月末、ロンドンでパブリック開催。テレビ観戦しながら人間つて素晴らしいと胸が熱くなった。（朱）



# 川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(12月号)

地名

市都  
道府  
道  
姓  
雅  
号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



# 檸檬抄投句用紙

「ガード」(10月15日締切)

12月号発表

奥田みつ子 選 —— 共選 —— 森山 盛桜 選

B

A

地名

市都  
道府  
姓雅号

切らないで下さい

B

A

地名

市都  
道府  
姓雅号

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい



## 作品募集

初歩教室 一路集 (3句) 「隠れる」(3句) 鈴木公弘担当

「閉じる」  
「けじめ」  
「しんしん」

檸檬抄 (2句) 「ガード」

愛染帖 (3句) 奥田

水煙抄 (8句) 新山

川柳塔 (8句) 西出島 幸選

12月号発表 (10月15日締切)

小島蘭幸選

楓司選

盛桜共選

新山盛桜共選

森田みづ子選

奥田みづ子選

大橋政良選

宮崎シマ子選

吉田弘子選

1月号

檸檬抄 「気持ち」

一路集 「発見」「張り切る」「ざっしり」

初歩教室 「正しい」

## 第31年度 夜市川柳募集

第5回「仲間」川上大輪選  
ハガキに3句 10月20日締切  
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 川柳塔さかい

〒543-0052  
大阪府天王寺区大道一丁目一七  
花野ビル201号室

印刷所 美研アート

編集人 木本朱夏

発行人 小島和幸

発行所 川柳塔社

電話 〇六〇六七九一三四九〇番  
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

定価 八百円 (送料84円)  
半年分 五千円 (送料共)  
一年分 九千八百円 (同)  
二〇一二年(平成二十四年)十月一日発行

## 第64回 大阪川柳大会

日時 11月2日(金) 12時20分開場  
場所 大阪市立住まい情報センター3階ホール  
電話 06-6242-1160  
地下鉄「天神橋六丁目」駅下車③号出口  
JR大阪環状線「天満」駅下車 北へ660m

会費 1500円 (発表誌呈)

「光」水野 黒兎 選(川柳塔社)  
「乱」早泉 早人 選(川柳文学コロキウム)  
「ド ア」久保田千代 選(川柳塔社)  
「放 つ」油谷 克己 選(番傘川柳本社)  
「惚れる」筒井 祥文 選(川柳天守閣)  
「優雅」森中恵美子 選(番傘川柳本社)  
「衣」たむらあきこ 選(川柳瓦版の会)

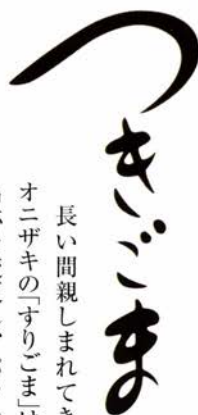
出句 各題2句 席題なし 締切 13時20分  
主催 番傘川柳本社・川柳塔社  
川柳文学コロキウム  
川柳天守閣・川柳瓦版の会  
後援 大阪市

本社11月句会  
7日(木) 午後1時から  
兼題 「句」「うんざり」「器用」  
「古顔」「かぶる」

## 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)の、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

# 杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた  
 オニザキの「すりごま」は、  
 名称を変更し、パッケージ  
 ジを一新いたしました。

オニザキのすりごまは、  
 元々すり鉢ですったゴマ  
 ではなく、杵と臼を使った  
 杵つき製法で出来た「すり  
 ごま」です。

今までと変わらぬ、風味  
 豊かな味わいをご堪能く  
 ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス  
 〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし  
 力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

## 医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科  
 緩和ケア（ホスピス）  
 デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>